
ばつ らば

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばつ らば

【Nコード】

N3389J

【作者名】

柊鏡

【あらすじ】

右手がぐんと引かれた。耳のようなかたちをした跳ねツ毛が特徴的な、やや青味がかったアッシュブロンドを揺らしつつ、氷柱つるいが言った。「渡さない！」

右手がぐんと引かれた。

耳のようなかたちをした跳ねツ毛が特徴的な、やや青味があったアッシュブロンドを揺らしつつ、氷柱ついでが言った。「渡さない！」

すると、待っていましたとばかりに、今度は左手が引かれた。とても、強い力でぐいっと引かれ関節がペキッと鳴る。

豊満な胸がぼくの二の腕を包む。ふたつのメロンが、柔らかなメロンドクッションがぼくの片腕をつつんで放はなさない。「私も、氷柱さんには渡さない！」

「先輩……」

ふたつのメロンの持ち主——黒紐先輩くろひもは見上げ調子で、潤ませた目をぼくに向けてくる。その瞳には、非難の色があった。「茂木くんは、吸盤もひつついちゃうようなぺったんこがいいのね！」

「えっと——その……」

「孔明くんは私のもの。これから、楽しい楽しい腑分けが待っているのだ！ メスの準備は万端だ！ オスはないが。とりあえず、押お忍す！」

「ふ、腑分け？」

物騒な単語にぼくはたじろぐ。

発現の後半は無視だ。なぜ体育会系的な掛け声をあげているのかも、このさいは捨て置く。氷柱の言動に関しては、深く考えてはいけないのだ。考えたら負けだ。却ってこっちが混乱するだけだ。

氷柱は、そんなぼくの心情などまったく気にしない。彼女の手が蠢く触手の所作で、ぼくの頬へと伸びてきた。

ひたりと冷たい感触。

彼女の手を覆うアーマリングのさきっぱが触れたのだ。搔き毟

るように、金属がぼくの表皮をなぞって、

「こつちを向いて」と言う氷柱。顔立ちに尖ったナイフのような妖艶さがあつた。ぼくはうつかりを目を逸らしてしまった。

負けじと先輩も氷柱に倣う。

感じられていた弾力が遠のく。膚の暖かさがなくなった。

メロンから解放されたと思うのも束の間のこと。背後から接近する新たな弾力。先輩は、美しくくびれた身体をぼくの背中におしつけたのだつた。「こつちを向いて」

ぼくと先輩はあまりにも密着しすぎたていた。

ゆつたりしたワンピースの布地越しなものにもかかわらず、彼女の筋肉の女性特有のなだらかさと、脂肪のふくよかさが感じられた。ぼくはドキマギを通り越して、愚息こもこも気を緩めれば昇天しそ
うだ。

天を衝きそうだ。

「この——バイタ！」氷柱が先輩を睨んだ。

先輩の口撃。「この——ネクラ！」

「ネクラはあなた」

「じゃあ、バイタもあなた！」

「どっちでもいいわい！」ぼくは彼女たちを振り切ろうと、この一瞬のすきを見逃さず、走り出す。逃亡への挑戦は——むなしくも失敗に終わった。——同時に、両腕を引かれたのだ。弾性に富んだゴム鞆のようにぼくの身体は、うしろへと巻き戻されてしまう。

「ひゅがッ！」

肺がつぶれた。

きっと力エルの音が、ぼくの口腔からひよっこり出たはずだ。むせかえる。

——どうして、こんな目に会っている？

両天秤、両手に華……といえは聞こえはよい。がしかし、「女は魔性」と偉い偉い先人は言った！

ぼくはたばかられないぞ！

これは罨だ！　ワーなんていわないぞ！

けれど、ぼくの意味など彼女らのまえでは盲腸いじょうに意味がなかった。ギギギと両手を無理繰り伸ばされて、

車裂きになった。

暗黒時代のヨーロッパの処刑法。

痛いです。

とっても痛いです。

脱臼しちゃった。甲子園にいけない身体になっちゃった。

甲子園、いけないけど。丸坊主とかイヤだし。さわやかじゃないし。むしろ暑苦しいだけだし！！

——ところで、これはなんのバツゲーム？

—

ぼくは占い師から運氣の向上するというクスリをもらった。

占い師なんて人種を信じてはいなかったが、無神論者がたまには、神さまにすぎるようなもので、ぼくも占い師に頼ってみたのだった。最後の神頼みというヤツである。

——クライストは言った。「いままでさんざんに神をこきおろしてきた無神論者は数あれど、悪魔をこきおろした無神論者を私は識^しらない」まったくもって、拍手喝采ものの箴言だ！

けど、神さまはサイコロを振らないらしい。

どこかのもじやもじやあたまの物理学者がのたまったけど、じゃあ、きつと悪魔はサイコロを振るわけだよ。悪魔っていうのは、神さまと真^ま反対のことをするのが趣味なものたちなんだから。

占い師ってのは魔女のたぐいなんだから、悪魔みたいなものと考えてしまってもいいはずだ。うん。これでいい。よく解らないけど証明終わり！　なんか哲学者とか科学者とか文学者からの引用が多いと、勞せず、智的に解決できた気になるよね。

して、ぼくがどうして占い師に頼ったか。

理由は単純明快。

ぼくはあす、マージャンで戦う。

つまり勝負運と、場のながれを支配する神の手が欲しかったのだ。運氣というのは無節操なやからで、努力／友情をガン無視にして飛来してくるものだから、魔術的ななにかに身を寄せるべきなのだ。

女々しい？

占いは女の特権？

なにをおっしゃる、うさぎさん。

「勝負はときの運」とカメさんは言った。

カメさんがうさぎさんに勝てたのは、カメが努力家だったからじゃない。うさぎが、度しがたいほどのアホウだったのがカメの勝因だ。つまり、対戦相手にめぐまれていたということにほからないのだ。もし、質実剛健なうさぎVS怠惰のカメだったら？

ぼくは日頃、黄金の右手を持つ男と呼ばれている。

シャイニングなフィンガーも、焼きたてな日本パンも関係ない。ヒキがいいのだ。

人生一回でるかでないかのテンホー（*ゲーム開始後、いきなりあがる役。役満のひとつ）を三回も出した男なのだ。

しょうらい、パチプロでも食っていけるかもしれないと自己陶醉しちゃうぜ。きっと、ぼくはギャンブラーになるために生まれてきたに違いなく、母さんのなかから生まれ出でたその瞬間に「ツモ！」と叫んだと思う。

だから、あすの勝負も勝算しかない。我が辞書に敗北の二文字はない。が――万が一を考えるのがチキンなぼくなのだ。

どうしてそこまでするのかと言うと、敗者にはバツゲームが科される。これが、はてさてクソ厄介で、戦々恐々としてしまうバツときているからチキンなぼくの綺麗な心臓は萎縮してしまって、最近血圧がめちゃくちゃ低い。

バツゲームの内容とは、

高嶺の花にラブレターを送るという……。

いまどき、手書きのラブレターを、ほんとうに求愛する目的で出すのだって、こっばずかしい時分だ。

そんな時代に背を向けるどころか、これは特別攻撃にさえ比肩する。玉砕しかありえないことをせよ！ というのだ。万全を期すのも至極とうぜんのことだ。誰がぼくを非難できるものか。正義は我にあり。

電話よりはいい？ それは甘い考えた。

音声というのは、録音という手段を講じないと残らない。全部、空気のなかに溶け込んで、「はい。おしまい」だ。だけど、手紙と

いうのは物理的なものであって、つまるところ証拠が残ってしまうのだ。特別な手段を用いることなく！

そんなの、末代までの恥！

ぼくの後裔たちは先祖の恥に打ち震えるのか！ 残せるかどうかも皆目解らない子孫のためにもぼくは戦う。

考えてみるといい。

歴史の教科書にお目見えするような人物たちにプライバシーはない。

常識的な感性で考えてみると、おかしいことが多々ある。

通常、墓をあばくことは本来なら不謹慎でタブーなのに、古代の王族たちは考古学者と名を変えた盗掘人にその存命中のあるがままをあばかれる！

まあ、ぼくが将来的に偉大な人物になれるほどリアルラックがあるのかっていったら、そこまでの自信過剰さはないし、そもそもカノジョのひとりもないのだけでも。マジで、子孫——残せるかなあ……。

ケータイメールと変わらない？

バカいつちやいけない。ケータイのばあい、ぼくが送信したという証拠はない。トモダチのイタズラなんだとシラを切ることが可能だ。

だけど手紙のばあい、バツゲームなんだから代筆なんかできるわけがない。代筆させちゃ、バツゲームの意味が瓦解しちゃう。ゆえに！ 筆跡鑑定にかければ、あら不思議、一目瞭然！

そして、そのラブレターを送るさきというのは、

三年B組、黒紐先輩。

フルネームは縄架黒紐。なわがけ

中国か香港か——こんななまえの映画俳優がいたような……。っ
て感じのなまえのひとだ。DQNネームといえどそんな感じだし、
なんとなく古風な感じといえどそんな気もしてくるなまえ。

彼女をひとことで表すと、美少女。しかしこれは陳腐だ。

二言で表すと、美しいノ少女。

三言で——めんどうだから説明で勘弁。

黒紐先輩が美人さんであることはだれの目にもあきらからだ。

よくモデルのようなという形容いがあるけれど、ぼくはそうは思わない。世界ミスコンで優勝した日本人はお世辞にも美人じゃない。あれはおそらく、ルーシー・リュー（＊ハリウッド女優。中華系）が天使！ などと形容されるアメリカンのお花畑的審美眼のせいだ！ メグ・ライアンがかわいらしいのは認めるが。

そして、これは日本でもいっしょだ。マリエ（＊雑誌モデル）が美人か？ うそだあッ！

だからここはあえて、俗世間的な描写をしよう。

たとえば、マックへいったとする。そこでマックポークを頼もうとする。しかし、やってきたマッククルーに対し、《ポーク》といいたくなくなるような美貌と思えばいい。いや、《てりやき》といいたくなくなるといったほうが正鵠を得ているだろうか……。まあ、そんな感じた。

また、おおくのグラドルの顔立ちが残念！ しかし、肉体はワガママボディ。「天は二物を与えない」というが、あるうことか黒紐先輩はワガママボディである。顔立ちはすこしも残念じゃないので、まさしく二物を得ている。

賢人は言った。

「スク水にはふたつの派閥がある」、と。

どういうことか？

よう！、よが着ればエロス！ ダイナマイトボディでも、エロスちいさな布地に包まれたぱっつんボディにエロス！ ということらしい。

らしいといったのは、ぼくの持論じゃなくって受け売りだからだ。ぼくは、こんなヘンタイ紳士じゃない。至極まっとうな好青年を自負している。熟した果実を食べたいと思う健全さを持っている。腐りそうな果実や、青い果実には食指が動かん。

先輩は中学時代《スク水とぼんきゅっぱんの宝石箱》と呼ばれていた。

おおくの、将来生命となるべき貴重な遺伝子（ホワイト・フロツグ・チルドレン）たちが、先輩の蠱惑的さにあてられた健全な男子諸氏により、猛然とエスニッククレンジングされているのは、ぼくの想像の域をでまくっているだろう。無残にシートとティッシュの海に消えたことだろう。ご冥福を祈ります。「嗚呼、ザーメン」じやなかった——アーメン。

まあ、ここまでは二物だ。

みつつめは家柄だ。縄架というなんか田舎臭い——スペイン語でいえば *donde esta?* ほら、田舎臭い！ ドンデエスタだって！——そんなまえとは裏腹に彼女はいわゆるお嬢さまなのだ。縄架家といえば、あらゆる分野のコングロマリット《A社》の大株主の家系だ。

A社は揺り籠から墓場まで、どころか、戦争から戦後復興後のテロリズムまで、地底旅行から宇宙旅行まで、旅立ちの村から魔王城までを手広くカバーする。一族の総資産は数百兆ドルといわれている。あきらかに世界の通貨量をオーバーしていそうだが、気にしてはいけない。そういうことになっている。金は水モノである。

そんな縄架家の宗家、直系、嫡子——つまり一人娘。

そして、よつつめ。

彼女は絶滅したかと思われていた貞淑な乙女なのである。

高校生（ぼくは二年生だ）にもなると、色気づく。

色気づかないばあいは、グレる。もしくは、ネクラる（*登校拒否とも言う。未来のNEET予備軍。とつぜん、子息が「きょうはいい天気だな」と脈絡なく黄昏だしたりしたら、親御さんは必ず留意すること）。

が、たいては色気づくのだ。

化粧はケバく、ときに日焼けサロンの魔手にかかり、スカートは短く、したにはホットパンツやジャージやスパッツを履き、耳には

色取り取りのイヤリングをジャラつとさげて、ネイルしたつめ先はシャーペンを持つのに難儀し、あたまのなかはいえ、かつこいいオトコノコとセクロスすることしか考えていない。

ヤラハタにならぬために——といった女となるのはケプラーの法則よりも身近であり、蓋然性が高く、おおくの同志によって立証されている科学的事実である。

おおかたこんなところなんだけど、先輩は黒髪ストレートロング（＊日本の一般男性（チカン予備役）がもつとも好む髪型。2009年ばく調べ）。膝下スカート。彼女の唇が動いたとしても、かしましさは微塵もなく、空気を振るわせるのは風鈴のような優雅な音色。そして、ピンと伸ばした背筋でもって肅々と歩く。

こんな人物なら、とうぜん、飢えたオオカミは攻勢に出る。

しかし——だれひとりとして帰ってきたオオカミはいない。みな赤頭巾ちゃんを狙い、猟師に撃たれた。赤頭巾ちゃん「猟師」黒紐先輩。あな、おそろしや。

「童貞ペンギンがきたぞー！」と冬町が言った。

クラスに緊張が走った。さすがに、浣腸に走るヤツはいなかったが、間諜は戻って来た。彼は廊下へと顔をだし、センコーの出現を警戒していたのだ。

クラスメートの顔が能面に変わった。

私語が消える。

幾人かの生徒たちは、死地に赴く武人さながらに、そして、いままさに悪魔の階^きをみながのぼろうとしている。

つんつんと背中をつつかれて、ぼくはうしろを向いた。

ほぼ反射的に。

人間は背中をつんつんされると骨髄反射的にふりかえるようにプログラムされているらしい。まったくもって、けしからん。童貞ペンギンがくるんだぞ！

「ちょ……。花子。童貞ペンギンがくんだぞ！」

「センサーがかわいそーでしょ」幼馴染の花子は、すこしも同情している風もないくせに、いかにもイインチョー的なことを言った。ちなみに彼女はイインチョーでもないし、フーキ委員でもない。ヒラである。

彼女は、たしかに担任を童貞ペンギンといわないが、似たようなことは言う。リタイヤした亭主を粗大ゴミと呼ぶか、濡れ落ち葉と呼ぶか、そんなささいな違いでしかない。

「用事はなんだよ？」

童貞ペンギン降臨のまぎわだというのに、なんの用事だ？

ぼくは、訝りながらも花子のちっちゃな鼻を見据えた。鼻同様、ちいさなふたつの穴のかたいっぱうからは鼻毛がこんにちはしていた。——切れよ。

花子の口がゆっくりと動く、

「つつただけ」

「死ね！」ぼくはさっさとまえをむいた。

と、同時に教室の前の扉が開かれ、童貞ペンギンがやってきた。のっしのっしとやってきた。

もしもこの世界がRPGだったなら、まちがいなくラスボスである。そんな威厳で充ち充ちている。ぴったんぽったんと床を叩くスリッパの音色だけが教室中に充滿した。だれも——しゃべらない。

ペンギンの物腰をした担任は、その腹鼓をゆらしながら、教卓のまえに立つ。

突き出した腹と、まえのめりの歩き方がペンギンっぽいということとで当初、彼は《ペンギン》とだけ呼ばれていた。

が——ある日、冬町が「あの顔、童貞っぽいよな」なんて言ったので、いらい童貞ペンギンと呼ばれている。

皇帝ペンギンに謝れ！

南極までいってジャンピング土下座してこい。たしかに、あの絵に描いたようなブサイク（なにそれ？）なら——一理あるなあ、とは思うが。

彼は極上のブサイクだが、鉄拳制裁上等の教師なので不断は恐れられているからこそ、陰口で童貞ペンギンと呼ばれているのだった。皇帝ペンギンには謝罪と賠償をすべきだが、これはしかたのないことだ。きっと、こころやさしいペンペンくんはご容赦してくれるのである。

「さて——こんかいのクラス順位を発表する」

ますます、しずまりかえる教室。シーンという擬音すら封殺されてしまったかのように静謐。

ぼくらにプライバシーはないようだ。

順位が公開されるというのはPTA的にはどうなんだろう？ キ

ョウイクインカイ的には？

トップは賞賛をあびるからいいとして、ドンケツはかわいそうじゃないか、とも思うんだけど、この童貞ペンギン、そんなことは気

にしない。黙々とクラス順位を読み上げていく。

なんでも、ライバル心を持たねばならないというのが彼の持論だから。親しいトモダチが自分よりも好成績だと識れば、おのずと奮起するはずだと考えているのだ。

彼は——どうやら、ぼくたち、ゆとりが打たれ弱いことを識らないらしい。ゆとりの打たれ弱さはK-1でフルボッコにされた曙なみである。一ラウンドでタオルである。いやいや、開始二秒でいいだって、痛いイヤだもん。

もつとも、ぼくは成績優秀者の部類なので憂慮などしない。ほかのクラスメートのようにぎくしゃくするほど緊張もしないが、でも、童貞ペンギンの童貞らしい物言いがぼくを不安にさせるのも事実。むんずと成績が羅列されているであろう、バインダーを開く童貞ペンギン。

まず、ブービーの発表。

佐藤さんが崩れ落ちた。

佐藤さんのトレードマークのおさげ髪までしなびてしまっているかのようだ。完全なる絶望。

ドンケツとトップの同時発表を最後にもってくるというのは、しようじき、バラエティー番組の見すぎじゃないかな。

クラス三十五人中、ぼくは七番だった。

休み時間になって、冬町——親友だ——がぼくのところへやってきた。彼は、にへらと笑ったのちに、口をひらく。

「おまえ何番だったよ？」

「七番だ」

「あいかわらず、成績のいいことで」
にらまれた。

「ぼくは天才だからな」

冬町はぼくのことばを完全にスルー。

「俺は二五番。石綿と波幌いしわたが十三番と二十番。つまり、おまえが親始まりだな」

一般的には、マージャンでは風牌（*東西南北が書いてあるヤツ）をめくらせて親を決める。けれども、こんかいはテスト終わりの遊興ということもあり、テストの順位の高いやつが親ということになった。たいした意味はないが、だからこそ、意味をもたせようということだ。意味のないものに意味を見出す、ぼくたちの、この高尚な戯言はじつに哲学的観念のもとに遂行されているわけだ。

ぼくが親か——。まあいいだろう。

黄金の右手を見せてやる。

唸ってきたぞ。

静まれ、ぼくの右手！

勝負は放課後だ。まだ、おまえの力を見せるときじゃない！

ぼくらのやり取りをつまらなそうに見ていた花子。ワイシャツ越しに、ぼくの背中へ《へのへのもへじ》を描くという意味不明なことをしながら、言う。「またドンジャラするのー？」

「ドンジャラじゃねえ！」（*タカラトミーの登録商標です。ポンジャンというべき）

「似たようなもんじゃん。ジャラジャラいつてるし」

こう——花子とは、ほぼ生まれたときからの付き合いだが（つまり十七年）、ひとが話しているときにすぐ横槍を入れてくる。もしくは、ずっとぼくの背中に《へのへのもへじ》を描く。なにがしたいのか解らない……。

不思議ちゃん？ だったらよかったのにねー。

花子のばあい、アホの子というのが正しいんだ。

アホの子と不思議ちゃんのあいだには、超えがたい壁があり、その壁を越境するにはライセンスが必要なのだが、そのライセンスを発行しているのは萌えの守護神なのでそうそうカンタンに発行されない。ざまあ！

「話しかけるな！」

「コーくんのイケズう」

「コーくんって呼ぶな！」

花子はシナをつくったが、魅力はゼロ。あたりまえだ。お互いにあいてのうんこもシッコも見てきたのかなのだ。お互いに全身全霊をもって、すべてを晒けだしあった仲とも言える。そんな関係性のどこに魅力を感じるというのだろう。無理、ぜったい無理。不確定性原理。

「そうだぞ。コーくん」冬町が言った。

「おまえも呼ぶな！」

ぼくの本名は茂木孔明^{もてぎ}という。

とうぜんのように、諸葛孔明がモトネタだ。パパンが三国志演義マニアなのだ。ママンは三国志正史マニアなので、ふたりのあいだに論争は絶えない。けれど、名付けに関しては満場一致^{ふたりしかいないけど}だった。

べつにコーくんというあだなが嫌いなわけじゃないんだけど、しまりが悪い（＊性的な意味ではない）ような、むずがゆいような気がしてできるだけ呼んで欲しくないのだ。両親からも呼ばれているせいで、こどもあつかいを受けているような——つまるところ、背伸びしたいお年頃的にはそぐわない。

冬町も不断は孔明と呼んでくれる。

花子には、いくどとなく、呼ぶなといってきたのだが——、

「私のコーくんはさあ」

「かってに所有物にしないでほしいんだけど」

「じゃあ、ダーリンは——」

誤解をまねくようなことを……。

ぼくは花子から目を離し、

「冬町。そとへいこう」

「了解。了解」

忍び笑いをする冬町の襟をひつつかみ、ひきずってぼくは廊下へ出た。落ち着いて話をするためだった。

廊下にはペンギンがいた。でっぷりおなかをひっさげている。

彼はだいぶ後退している髪の毛を掻いた。それから、ぼくらをまじまじと舐めるように見た。

とつくに休み時間は終わっていたのだ。

童帝（ガールズⅡインビジブルⅡマスター）は言った。「教室、戻れ」

ぼくらは即時撤退を決めた。イタリア軍もびっくりのシッポのまき具合だったと思う。エチオピアこええええ！

「確認する」高らかに冬町が宣言すると、石綿と波幌がじつに大仰な動作で首肯する。ぼくも倣う。

ここは放送部室だ。

うちの学校の放送部室は体育館にあつて、防音がカンペキなのでセンサーたちに隠れてなにかをするのにとっても適している。

見渡せば、ゲーム機やAV（オーディオビジュアルではない）がかんたんに目につくし、スナック菓子のふくろがそこいらに散乱している始末。

「血判状はもってきたか？」

「Yes, mom」「Yes, sir」「Heil Hitler
！」

なんかへんなのが混じっている気がするが、冬町はしかつめらしい態度で頷く。「よし……」

ぼくは血判状を自動マジジャン卓の天板のうえにのつけた。

石綿と波幌、そして冬町もこれに続く。

出揃った四枚の血判状。

そこに書かれている文面はまったく同じだ。

『2009年7月15日。この日に行われる死合^{デスマッチ}は命を賭すものである——』とかバカみたいに中二病まるだしの文言で始まる。

内容はくだらなく引き伸ばされているので要約すると、負けたヤツは必ずバツゲームをすること。バツかれたりして、履行しなかったばあい、恥ずかしい写真を校内に張り出すこと。となっている。

恥ずかしい写真はまるで人質のごとく、各人から徴収された。ぼくのはあいはネシヨンベンによる世界地図の写真。だれだつてネシヨンベンくらいする？ おっと、これが中三のときつてんだから、笑えないんだよね。

撮影者は花子だ。いったいなにを企んでこんなものを撮影したの

か、理解に苦しむ。冬町に写真提供したのも花子だ。もちろん、ぼくは自身の栄えある未来のためにネガは焼却してやった。

そして、なぜこんなことをする次第になったかというと、

「おもしろいことねえ？」

ただそれだけである。

ふつうの賭けマージャンではおもしろくない。

もともと、ぼくらはそんなにおおくの小遣いをもらっているわけじゃなく、エロ本を新品で買ったら五冊でうちどめ！ くらいの小遣いしかもらっていない。マージャンは仲間内でやるゲームなので、パチンコやスロットのように胴元からお金がかつちがわにきたり、むこうがわにいったりせず、ほぼゼロサムゲームだ。

いつも同じ、この四人でやっているので完璧にゼロサムゲームと
いいていい。

延々と同じメンバーでは、賭けマージャンをする醍醐味というのは、あまりない気がする。マージャンでお金稼ぎしたいなら、雀荘なんかで見ず知らずのひととやるのがいいと思うし、もうちょっとメンバーが増えれば解決するのもだが、とんと増える気配はないのである。うちの高校はキメジメくんとキマジメさんが跋扈している九竜城クワンシロウなのである。

だから、即物的——つまり金銭ではなく精神的なエンターテインメントを求めた結果がこれだ。ベットするのはコインでも札束でもなくて、矜持——プライド。そういうことなのだ。

逃亡者が出るかもしれない危惧があるため、血判状が用意された。逃げればチキンの汚名を被ることうけあいである。——とはいっても、ほんとうに血で判なんかしてないけどね。ちゃんと朱肉あかを使用した。でも、朱肉って、なんかグロくね？ 朱い肉だよ！

「さあ——死合の始まりだ！」冬町が告げた。

すると、

——パアアン！

なぜか石綿がクラッカーを鳴らした。

紙ふぶきが舞う。カラーバンドがふわりとぼくのあたまの天辺に被さった。火薬の臭いがする。

——ちゅどーん！

波幌が花火を打ち上げた。

おい、ここ放送部部屋だぞ。案の定、花火は天井にぶちあたり、火の粉を撒き散らしながら器具類のうらつかわへ消えた。火事になっても、しらねーぞ。ここには燃えそうなものが腐るほどあるんだ。ついでに放送機材は高い。ベンシヨーとかなったらぼく、識らないフリしますね。

そして、

いやな予感がした。第六感だった。キュピーンという音が聞こえた。

ぼくは首を回し、冬町を見た。

彼の手には、

「なぜ爆竹なんか持っている？」

ぼくはソッコー、彼を取り押さえた。

身を挺しての一撃により、冬町は持っていた着火マンを取り落とし、不満そうに顔をしかめた。

ぼくは彼がまた、変な気をおこさないように着火マンを拾う。そしてスボンとベルトのはざまにノズル部分を突っ込んだ。

伸びてくる冬町の手をはたき落とす。

「おまえはなにもしないのか？」

「しねーよ！ 爆竹ならしていいのは旧正月の中国人だけだ！」

「まあ、始めようぜ」ケースから牌を取り出しつつ波幌。

ぼくは占い師からもらったクスリを呷った。ふ——これだ勝つる！
こうして死合が始まった。

「『チーホー』」

ぼくは耳をうたがった。

空耳アワーのお時間です。

「さて、トリプルロンとかありなのか？」

「ありだ。血判状を見る」

見た。ルール上、ありと記されている。

「そのまえに、捨て牌であがるのはチーホーなのか？」

「血判状を見る」

見た。ローカルルール（*地域別、プレイヤー別にさだめられるもの）が採用されている。

チーホーというのは役満だ。ほんらいは親以外が第一ツモ（*一番最初に牌をひくこと）であがることを言う。しかし、ローカルルールではロン（*捨て牌であがること）も可能となっているばあいがある。

端的に言う。

ぼくはゲーム開始の、最初で負けた。

親の役満の払いは四八〇〇〇点。それが×三。出だしの持ち点は二五〇〇〇点なので、即死。超絶オーバーキル。スライムにメラゾーマもしくはイオナズン。鬼畜！ 勇者には血も泪もないのか！

スクエニに抗議する！

三人の雁首がぐりつと動き、むつつの目玉がぼくを見やる。

「『じゃあ、バツゲームよろしく』」

なにこいつら、ハモってんの？

ぼくは言った。「こんなにはやく勝負が決するのもおもしろくないだろう？」

「まあそうだな」

「もう一回だ」

「いいだろう！ おまえが親な」

二回戦もぼくが親らしい。まあいい。

——ジャラジャラジャラ。

配牌。

牌を立てて、

最初の捨て牌、

「「「チーホー」」」

「ちょ。まて！ おまえら、積み込んだな！」

「なにを言っているんだよ。黄金の右手」

「そうだぞ」

「負けを認めろ」

「むぐう……」 ぼくは素直に負けを認めたが——でも納得がいかない！ 「もう一回だ！」

「「「いいだろう」」」

だからなんでハモるの？ こいつら三つ子なの？ おそ松くん的ななにかなの？

そして、

「「「チーホー」」」

死にたくなった。

占い師もボコにしようと思った。詐欺師め……。

けっきょく三連敗したぼくは三通のラブレターを書くハメになった。さすがに四回戦を挑む気にはなれなかった。ぼくはマゾじゃない。仏の顔もサンドバッグまでも言う。

助けて！ ママン！ お小遣い要らないから！ とはいけません。きやつら三名がラブレターの提出先に指定した女子は以下。

三年B組、縄架黒紐。

二年C組、白面氷柱。

二年A組、田中花子。

三名。

三回負けたのだから、致し方ない。首は括らないが、腹は括ろつ。
花子はまあいい。

出さなくていい。

幼馴染ゆえの権力というか、なんというか、都合のよさを最大限に
発揮することにした。握りつぶすことにしたのだ。「これは、うま
そうな饅頭だのお」と越後屋のおもたせにニヤつく代官になった気
分。

黒紐先輩は学校の有名人だし、花子はぼくの幼馴染である。けれ
ども、指定された人物でひとりだけが解らない。

白面氷柱ってだれだ？

同じ学年らしいけど……。

冬町に訪ねると、彼は胸をそらして、「俺的にはあり」とか意味
不明なことをたまに、いきなり歩き出した。

しかたなくあとをついていくと、どうやらC組を目指しているら
しい。

B組とC組をへだてている渡り廊下を渡った。

「あのジャラジャラとしてる子」と冬町はC組のまえで説明を始め
た。

ぼくは顔を教室に突っ込むのをためらい、窓枠から眺めた。

C組の窓側最後尾の席で、つまらなそうな顔をしている女子――
らしい。

そのまとったオーラとは裏腹に、彼女はとても目立っていた。

声が大きいとか、サイズがでかいとかそんなんじゃない。サイズは
むしろ小柄なほうで、平均身長よりおそらく低い。一五〇センチち
よっとくらいか。

しかし、なんというか、髪型が奇抜なんだよ。

垂れ耳というんだろうか、そんな感じに髪形状になっている。色
もなんとなく青味がかっているような気がする。色白なことは解る
ものの、目鼻立ちが遠目にはハッキリしない。が、ジャラジャラの
意味は解った。

手首、指、耳、首元に光るもの。

シルバーアクセとかそういうもんなんじゃないかなあというのを、たくさんつけている。たぶん、二〇個くらい。どれもこれも女性向けというよりは、男性向けといった風体で、無骨だ。

不良だ！ とぼくは直感的に悟った。

ドクロを形取ったかたどたとき思えないぶつといリングが指にちりばめられているさまを見て確信した。

白面さんがこっちを向く。

目があった。

黄色い目をしていた。

鼻筋はすっきりしていたが、モンゴロイドにしては高かった。髪の色も黒や茶ではなく、青の挿した白銀だ。ハーフかなにかなだろうか？

彼女はしげしげとぼくを見つめたのち、机のなかに手をつ込んだ。ニット帽みたいなものがでてきた。みたいな、と表現したのは、ニット帽＋イヌミミカチューシャだったからだ。耳に該当する部分には、牛の鼻輪くらいのサイズはあるだろうリングがはまっている。

あれ？

不良じゃなくて、ソッチ系？

混乱するばかりから目をそらし、彼女は帽子をかぶった。色は灰色だった。

なにがしたいのか解らない。

なんとなく花子と同じタイプのような気がした。不良だろうが花子的であろうが、できれば、関わりあいたくない人種には違いない。

不良とかアッチ系って意味じゃなくて、ぼくの神経が安寧のなかに居おれないという意味で。

「まあ、がんばれ」冬町が大笑いをこらえていることがカンペキに解る顔でぼくの肩をたたいた。イラっとした。

イラっとしたから、デコピンをしたら、かわいく「ふにゅ」と言った。なにこいつ？ かわいいとも思ってたんの？

二

これまでの人生でラブレターというものを書いたためしはない。じっさいに好きな子に送るのなら、その文面に悶々とし、紙がひっきゃぶけるくらいに推敲を繰り返すのかもしれないけど、今回はバツゲームである。深く考えるなど馬鹿馬鹿しいにもほどがある。テキトーな文面で済ますことにした。

『好きです。つきあってください 二年A組茂木孔明』

こんなもんでいい。

どうせノーだ。

高嶺の花に手が届くほど、ぼくの背は高くないし、イマイチなものか解りがたい白面さんにしたところで、いつしよだ。

見ず知らずの男子からコクられてイエスなんて言うか？ ふつう。常識的に考えてありえない。ぼくだって、そうだ。

まあ、あいてが小野小町でもノーだ。だって、平安美人だし。

かりに、クレオパトラがシナをつくって求愛してきても、つつばねる自信がある。だってそうじゃないか？ あいてのひととなりも識らないのに付き合えるわけがない。そんなのはどこか、おかしいと、正論でめくくる。

一目惚れつてのを、ぼくは信じちゃいない。まあ、ぎやくに花子のように、あいてのことを識りすぎてしまったばあいも付き合えるわけがない状態になってしまうのだが。

ありえないと思ったら、なんだか気が楽になった。

肩の荷がおりて、すうっと身体が軽くなった気さえする。

バツゲーム実行の日、ぼくは朝早くに登校した。

まだ部活の朝練も始まっていない時間帯で、スズメさんとカラスさんがチューンガラーチューンガラーとシンフォニーを奏でている。車

どおりもほとんどなく、狭い住宅街の道を横切るのは新聞配達の兄ちゃんのバイクくらいだった。タクタクタクと軽妙なリズムを刻みつつ、ぼくのまえを過ぎ去った。

ぼくはだれもない前庭をつつきり、三年生の昇降口へ向かった。

ニンジャ的な挙動（変態的ともいうし、不審者のともいう）でぼくはゲタ箱の林を泳いで、目的の靴箱に手紙をねじこんだ。

それから、すばやく二年生の昇降口へとつかえし、C組のゲタ箱のなかから白面とかかれた名札を探した。きよろきよろとあたりを見回し、見張りやストーカー、花子がいらないことを確認して、二枚目となるラブレターも投入した。

ふう……。

こちらスネーク、任務完了――。

滞りなく日中はすぎた。

ちがうことといえ、例の三人が四六時中ニヤニヤしているだけである。キモイ。ああ、キモイ。重要なことなので二回言いました。

——そして放課後——

「あの……。茂木くんはいますか？」

唐突な、そして予期せぬ訪問者によって水を打ったように、クラスがしずまりかえった。

先日の、童貞ペンギン降臨のときと同レベル。

脳内のウィルスバスターが警報を鳴らす。

これはただごとじゃないぞ、とぼくは廊下を見た。そこには黒紐先輩が悠然として立っていた。

クラスメートたちの好奇に満ちあふれた視線が彼女へとそそがれている。「いったい、なんの用だろう？」みな、一様に興味をいだいていることは間違いないさそうだ。

先輩はぼくを見なかった。そりやそうだろう。ラブレターにはなまえしか記載してないんだから、顔立ちが把握できているはずがない。彼女は、きよろきよろと首を回した。

コトンと背後から座席をズラす音がして、

なぜか花子を取り次ぎに行った。

二言三言話したあと、花子は振り返り、ぼくを指差した。なにを企んでいる？ 花子よ。ぼくはきみが怖い……。

先輩は、ちよつとだけ躊躇するような素振りを見せ、それから教室にはいつてきた。ゆつたりとした足取りで。

彼女は立ち話に興じる生徒や机をすすすと華麗によけてぼくに迫った。

間近で見ると——イイ！

清楚感がマキシマムなのは確定的にあきらかだった。

ぼくは唾を飲み下した。

ノドボトケが上下して、ごくりと鳴った。骨伝導されて、ぼくの
耳朵はとても大きい音のように、これを聞いた。

並べば、ぼくと先輩の身長差はあまりなかった。わずかに彼女の
目線が低い気がするが、そおらく一六五センチは超えているんじゃないかなあ。女子にしては大柄なことはたしかんだけど、こんなに上背があると思えなかった。理由は、先輩が出るところは出ているスレンダーだからに違いないのだった。

先輩はぼくを見詰め、

「茂木くん。で、いいんだよね？」

「はい！ なんででありましょーか！」うつかり、なんちゃって軍人
調になつてしまつくらいテンパリぶり。お解りいただけるだろうか？

このとき、ぼくの精神はマッハで有頂天だった。

ぼくがどうやったって取り乱してる証拠だよ！

日本語が崩壊した。

これでは、拘束具とかが常備されている病院で栄養食を食べるハ
メになる。そんなレベルにぼくは錯乱しているのだった。

黒紐先輩が口を開く、

「お手紙、ありがとう」ぺこり。

「いえいえこちらこそ」ぺこり。

「いえいえこちらこそ」ぺこり。

「いやいや——」ぺこり。

なにこれ？

どこのリーマンの取引現場だろうか！ おじぎばかりに精を出し
ていると、国際派を自認する連中から、「おじぎはみつともない。
欧米風に握手にすべき」とか苦言を呈されること請け合ひである。

このままじゃ埒があかない気がした。いや——気がするじゃない。

ぼくがなにか策を講じないと延々と続く。たぶんだけど。

ぼくはなんとか自分のタズナを取って、クールさを取り戻そうとつとめた。約五分かった。おじぎはたぶん——〇回はした。首が攀った。ドサ周りのリーマン？の気持ちを痛感した。

「先輩。その——」

「うん。解ってるよ」

こんどは、ぺこりではなく、こくりとあたまを揺らす先輩。かわいらしかった。美人なだけではなく、かわいいのだ。これを反則もしくは、誘っているという。

「ここにきたのは、手紙のことなんだけどね……」
解ってますとも。

いわずもがな。

「やあ、孔明」冬町乱入。KYだな。いや——AKYというべきか。解ってやっているわけだから……。

ぼくは冬町をバスケットっぽいディフェンスでいなしつつ、間髪いれず早口で言った。「先輩。ちょっとここじゃ人目が多いと思うんです」

先輩は周囲を見渡し、いまさら気付いたかのように口元に手をあてた。なんというおくゆかしいおどろきのジェスチャー。大正時代にタイムスリップして、ハイカラさんの袴すがたで登場していただけると、ぼくは天にも伸びるような快楽が雲間を突破する。

どうやら、彼女は天然さんの模様である。

ぼくはガッツポーズをした。

黒組先輩のこんな仕草を見ただけでも本懐をとげたようなものだ。答えがノーでも構わない。

「屋上とかいきましよう」

「うん。そうだね」

ぼくは先輩とつれだつて屋上へ向かおうとする。

ついでこようとす不逞ふていの四名——冬町、石綿、波幌、花子に「ぜったい、くんなよ！カス！」と釘をさすのは忘れない。

ことばの釘打ち銃を一世掃射！

ぼくは上島竜兵じゃないので、きゃつらがぼくの言と真反対の行動——ストークしてくることはないはずだ。やつらだって、最低限の空気読解力ひのうみは持っているはずだし、ジョーシキをわきまえているはず……。それにぼくは期待するしかない。

チツと舌打ちがよつつ聞こえた。聞こえないフリをした。いちおう、期待していいらしい。

塔屋を出ると、さわやかな風を感じた。まえをゆく先輩の髪の毛が風に煽られ、たなびいた。

ぼくは後手で屋上への鉄扉をしめた。――がしゃん。

夏場の屋上は、ぼかばか陽気の小春日和（*誤用）を感じる。太陽がぎんぎらぎんだからこそ、さりげない微風にいやされる。近藤真彦サイコー！

ぼくらは塔屋の近くのフェンスにもたれかかった。

先輩は腰元に体重をあずけ、片足を振り子のように小さく揺らす。なんだか、落ち着いていない。

先輩クラスの美少女なら、告白なんて日常茶飯事だと思っていたから、それ相応の対処はテンプレになっていると思っただけに意外だった。なにか、みなが敬遠する要素でもあるのだろうか？と少し不安になったりもしたが、先輩を一瞥してしまえばそんな不安感は吹き飛ぶ。

「あのね。茂木くん」

「はい」

先輩は蒼穹をみあげた。

積乱雲が遠くに見える。

鳥が飛んでいる。滑空した。

「とべると思う？」

「とべる？」

――なんの話？

「ごめんなさい。茂木くんとは付き合えません」という話じゃないのだろうか？ 切り捨てるなら、さっさと一刀両断してほしいものだ。内心はガクガクブルルなのに。

先輩は続ける。

「鳥はみんなとべるよね？」

「ですね」

「じゃあさ、かこの中の鳥もとべるの？」

「え？」

ぼくはたぶん、とっても鳩豆な顔をしたと思う。

鳥の話題だけに、鳩。

「とべると思う？ イエスカノーで応えて」

「イエスです」

「どうして？」

なんで、いきなりこんな話をするのだろうと思いつつも、好青年であるところのぼくは律儀に応えてしまうのである。まったく、我ながら紳士すぎて怖いくらいだ。モテないのがおかしい。この世界の法則に異議あり！

「たしかに、鳥かごは狭いかもしれません。でも——鳥ってそんなにバカじゃないんですよ。バカだと思ってるのは人間だけで。カラスだって、もしかすると、電信柱のうえからこつちを見て笑っているかもしれないんです。

脳化指数って指標があつて、それによると、鳥類は全体的に賢いんです。牛豚よりもずっと。鳥って、自分が虜囚であることを理解しているし、どうやったら脱走できるかくらいの算段はつくんですよ。だから、しずかちゃんのカナリアは脱走するんです」

先輩は首をかしげた。

ぼくは続ける。

「それに、飛ぶ必要もないんじゃないかなあって思いますよ」

「え？」 こんどは先輩が鳩豆になる番だった。大きな目の瞳が、さらに一回りおおきくなった。

「動物の生存圏ってとっても狭いんです。地球にとっては表皮よりも薄い、いまにも破れそうな皮膚のうえにぼくらは棲んでます。陸地も大気もひつくるめて。人間は地球よりもすべらかな球体をつくれないんですよ。ですから——飛ぶだとか飛ばないだとかそんなことどうでもいいんです。地を這おうが、空を駆けようが、どっちも

どっち。五十歩百歩なんです」

我ながらいいことを言った。

科学的な事実に立脚した、すばらしいことばの羅列。そこに痺れる。憧れる！

「凄い博識なんだね」先輩はまったく含みのない調子でぼくを賞賛した。「じゃあ——」先輩はくるつと軽快に反転した。屋上からグラウンドを見下ろす格好になった。「ここからとべる？」

「ここ？」

先輩は屋上を囲うフェンスをたたく。「これをのりこえて」

「え？ とべるわけじゃないじゃないですか。グラウンドにまっさかさまですよ」

「そうだよね……」先輩は顔を伏せた。そのままの体勢で言う。「電車のアナウンスでさ」

先輩はさつきからとりとめのない話——もとい、イマイチつかみどころのない話をふってくる。しょうじき、ぼくは当惑していた。断頭台に送られたのに、身を縮めつついざ処刑台にのぼると、そこはブルーマンの舞台だったという感じである。

「黄色い線の内側にさがってくださいっていうよね？」

「いいですね」

「外側つてなに？」

ぼくらは、しばらく押し黙った。

ぼくは答えを探している。先輩はその答えを待っている。

ふつうに考えれば線路だろう。

黄色い線の外側を覗いたところで、錆びた鐵^{てつ}の狭軌が枕木のうえにのっている姿が見えるだけだ。おもしろいものなんてなにもない——はず。

しかし、この答えは間違っている気がした。あまりにも順当すぎる。なにも考えずに応えられるではないか。とすれば、先輩が求めている答えはもっと違つところにある。おそらく、いま、ぼくは試されている。

深く、先輩の真意を読み解くのだ。茂木孔明十七歳、これは試験だ。

あたまをひねる。

「黄色い線の内側にさがってください」というアナウンスが流れるのは、事故防止のためだ。つまり——黄色い線の外側へいったひとは、もれなく電車に轢かれてしまうわけで、「お待ちドー！ 無残な轢死体一丁できありがたい！」ということである——なるほど。ぼくのあたまのなかの電球がピーンと点^{とも}った。

謎かけみたいなもんだ。

「あの世ですか？」

先輩がぼくを見る。

その瞳はまた一段階、大きくなっていた。黒目が白目の部分を埋めている。ぬりつぶされてしまっている。

「茂木くん。あなたなら——」先輩は目を伏せた。もごもごと唇が動き、「最後にいいかな？」

先輩はふたたび、そのおもてをあげた。真剣な顔があった。彼女は、おもむろに左手をぼくへとつきだした。

左手首にはリストバンドがはまっている。およそ先輩に似つかわしくなかった。どうしてこんなものを？ と一瞬だけ虚をつかれたが、答えなどすぐに出てしまった。人間の知性は過去の経験、知識から類推する……。

まずい——。

なんかイヤな予感しかしないぞ。これまでの会話の流れるに、先輩はアレなひとだ。なんてことだ！

あたまのなかの電球の色が赤に変わる。こいつは——まったく、赤信号だ。青信号などない。みつつの灯すべてがレッドだ。エマー・ジェンシー、エマー・ジェンシー！

先輩の白い細腕が動く。右手の五指が左手首へと向かう。

どうかはずさないでくれと願ったが、彼女の指先はとまらない。リストバンドがズラされた。

まさしく——予想通り。リストバンドのしたからあらわれたのは、幾筋もの痛々しい刃傷！ 幾何学文様のように刻まれ、ミミズ腫れのようにもりあがっている。

眼前には切り傷。目をあげると、真摯な顔。

どうしたらいい？ 助けて、ウルトラマン！

ああ、ぼくのバカ。バカヤロー。なんで、あそこで「あの世ですか？」なんて応えちゃったんだろう？

先輩がこんな子だったなんて。識ってました？ 奥さんッ！

痛い子だって識ってたら、あんなことぜったい言わなかったのに！
どうして教えてくれなかったんだ！ 神さまのウンコ！ こいつがカルヴァンの予定説ってヤツなのか？

くそう。くやしいのお、くやしいのお。マージャンで敗北を喫したときに運命はディスティニーしていたということか。

とつさに口をついて出たのは、

「先輩って料理ヘタなんですネ」

——なにを血迷ったこと言ってるの？ 俺。ここはすっぱりと縁を切るためにフォローなんかすべきじゃないのに……。

「そう。うん。そうなんだよ！」

なぜか先輩は嬉しそうだ。

「茂木くん」

ほがらかなオーラが先輩をつつんでいる。

痛い子であることも忘れ、やっぱり先輩は美人さんだと思った。
アイタタな人だってことなんて、どうでもいいじゃん。いいじゃんいいじゃん！ ぼくはあたまの切り替えが光子よりも光速だった。

「えっと——」

「手紙の答え、イエスでいいかな？」

うつかり、「うん」と応えてしまうぼくだった。

おいおい、クレオパトラや小野小町の求愛を無碍にも、つつぱねるって言ったのはどこのジャーマン（ドイツ人）だ？ オラァ！
喰らえ！ ジャーマン！ スープレックス！

ぼくと先輩は正式に付き合うことになってしまった。

そうなつてしまえば、早いものである。とんとん拍子にデートの日取りも決まった。今週の日曜日だ。

ぼくらの棲んでいる町は、田舎と都会の中間くらいの、いかんともしがたい立ち位置の町だから、娯楽なんてものはない。

校外アミューズメントパークなんてものは、ありえない。スポーツチャとかないし！

故、デートいえば、田畑の畦道でちゅっちゅするくらいしかないのである。しかし——もっとフアンタスティックなことがいいなあと思つたぼくは、思い立ち、花子の家に行った。

花子の家はぼくの家となりだ。歩いて一分もかからない。

おとなりさん。

ぼくらが幼馴染な理由。

インターフォンを鳴らす。

「花子いますか？」

「いるよ」花子のお袋さんは、きさくに応対してくれた。

小さなころから出入りしているので、勝手しつたる他人の家。ぼくは軽快な足取りで彼女の自室へ向かった。彼女の部屋は二階だ。

階段をのぼる。《花子の部屋》と書かれたタグのぶらさがるドアをノックする。

「はい」

花子が出てきた。ラフな部屋着を身につけている。

彼女はぼくを見るなり、目を細めて、

「やあ。コーくん」

「なに、その目」

「私になんの用？ 黒紐先輩ときゃっきゃうふふしてくれば？」

なんだかすごくつれない。見るからに、あしらわれていることが

解る。

先輩は学校では有名な美少女なので、とうぜん、だれかと付き合いうことになったなら、みなと識るところとなる。花子も女子のネットワークに在籍しているんだから、識っていてあたりまえ。だが――この態度は？

花子はシニカルに笑んだ。「あのさ、コーくん」

「うん」

「さっそく、ふられた？」

「なぜ嬉しそうな顔をする？」

「いやいや。気にしないでよ。なはは」花子は自室のドアを全開にすると、言った。「まあ、はいってよ」

「お邪魔します」

ぼくは室内を横切り、ベッドのうえに座った。となりに花子が座る。

そういえば、花子の家にくるのも久しぶりだと思った。

枕元に置かれた、どでかいグルーミー（口元の血がキュート）の綿人形をひっぱりながら、ぼくは訊く。「あのさ。先輩のことなんだけど」

「うん」

「ほら、ぼくつていままでオンナノコと付き合ったことないじゃん？」

「ないね」と、一刀両断する花子。ぼくは、つとめて平静なフリをしたが、多少はところが挟られた。

奮起して面接を受けにいったのに、「で？ この空白期間は？」

と訊ねられた気分に近い。ぼくの恋愛履歴書は空白だらけなのだ。

「だからさ、デートつてなにをすればいいんだろ？ って」

「つまり――」

人差し指がぼくの鼻先にやってきた。

すかさず、グルーミーでガード。花子の指がよからぬ方向へと曲がった。彼女は手を引っ込め、

「私に指南してほしいと？」

「そういうこと」

「ふむ。じゃあ、ご指導ご鞭撻をしてあげよう」花子は仰々しく頷いた。「じゃあ、水族館にでもいつてくれば？」

ぼくはすぐさま、自分の耳の穴に指をつっこみ、耳クソを掻き出した。「水族館？」

「そう」

「近場にあつたっけ？」

ないから、耳を疑ったのである。

「あるじゃん。国際水棲生物見本市」

「なんだよ。それ……」

初耳もいいところだ。

ぼくらの町にも、近隣にも水族館なんてハイソな娯楽施設はないはずだ。断言できる。十七年も、こんなところで伊達に暮らしてきたわけじゃない。とぼくは主張したのだが、

「いけ」

命令された。

なにか企んでいるような気がヒシヒシとする。危機管理神経がこれではよろしくないぞ、と言っている。さいきは、大人たちが自己責任論を振りかざすので、食品管理衛生法よりも厳しい危機管理意識を持たねばならない。これを——シックスセンスという。間違ってもセックスセンスではない。これは異性間プロレスで磨くしかない。

「ほんとうに水族館なんだな？」

「そうだよ」じつにシレつとしたものだ。

「見本市ってなまえがおかしくないか？　ただの魚市場ってオチはないよな？」

「まさか」

「魚河岸うおがしって言い逃れもなしな？」

「信じてよね。コーくん」

じーいつとガン見されて、オンナノコを無下に扱えないぼくは信用してやることにした。どこまでもジェントルメンな自分にちよつと心酔。

「さすが、コーくん」

……ゲンキンだな、コイツ。

「ところで、コーくんさ。なんで、先輩にコクったの？」

「だから、こうして――」

「私というものがあいなから」

「きやつせん！」

きやつせんとは「聞こえません」の短縮形だ。手早く発現でき、あいてをムカム力させる効能も持つ使えることばだ。

「ふうん。でも、バツゲームだったんでしょ？」

「なぜ、識っている？」

「冬町くんから聞いたし」

「……余計なことを」

「三通、出したんだってね？」

「黙秘する」

「スケコマシッ！」

「きやつせんッ！」

「うぜー！」

花子の拳が迫った。

もちろんグルーミーでガード。

「私、もらってないんだけど？」

「きやつせんッ！」

「ふんがーッ！」

ぼくは山田家をあとにした。

日曜日がやってきた。

きょうも世界は平和である。平和すぎて、ハナクソをかつぽじりたくなる――はずなのだが、ぼくの心臓はバクバクだ。手を握ることになるかもしれないので、ハナクソをほじるのは諦めた。代わりに――

気休めにと、TVを点けた。

ニュースをやっている。

殺人事件とか放火時間とか。

社会学者たちが「若者が！」とかいっちゃうような事件が目白押し。

が――かの哲学者アリストテレース先生ですら、「昨今の若者はチャラチャしてて、女みたいな格好ばつかしやがって、クソがッ！」って言うてるし、ぼくは気にしない。いつだって老害はあるものだ。老人はおしなべてアルツナハイマーに罹患するのだろう。あな、おそろしや。

TVだって出端のころは害悪と言われていた。インターネットができてからは、あまり言われなくなったが。新規なものはいつも虐げられる。〃（イコール）若者は虐げられる。

ケータイが鳴った。

ぴりりりるぴい♪

電話じゃなく、メールらしい。

『茂木くん。待ち合わせ場所を変更してもいいかな？』

先輩からだった。

商店街の喫茶店で待ち合わせる予定だったのだが、

『学校の校門前にしてほしいのだけど……』

ギャル文字も絵文字も使わない、先輩の文面はすばらしすぎる。感動した。泪がぎっちょんちょん。

待ち合わせの変更？ モウマンタイ。

壁掛け時計を見ると十一時だ。予定の二時まではけっこうあるが、支度することにして、TVを消した。まずは――顔を洗おう。

念入りに洗顔し、もしもに備えて歯磨きに十五分を費やし、スマイルの練習をしてから、ぼくは本を開いた。書名は《自殺願望者の心理》。なんでこんな本を読むのかって？ 決まってるじゃないか。先輩がアレでソレなひとだからさ。

ヘタな一言が、よからぬ結果を生むかもしれない。

しかし、逆に考えることもできる。

神さまもびつくりな善人であるべくにとっては天啓に等しいかもしれない。先輩は、どうやらばくに対して好感をいだいたようだから、もしかすれば先輩のリストカットをやめさえることもできるかも。と少しばかりぼくは思っていた。

歯を磨きながら考える。

どうして先輩はリストカットなんかするのだろうか？

先輩はなにひとつ不自由していないように見える。天から二物いじょうを与えられているのだ。

ふと脳裏に浮かぶのは――太宰治だった。

稀代の女つたらしの駄目人間。代表作はみんな大好き《人間失格》。「俺は人間をやめるぞーッ！」でおなじみ。

彼は充たされていることにコンプレックスに持っていた。豪農の息子であることが彼を苛んだ。彼を愛好するひとびとは、「彼の弱いところが魅力だ」と言う。とんと理解できないことである。いや

――ダメンズのハシリと思えばいいのか。自己解決。

女と心中を繰り返した太宰と、人間関係から自殺した芥川龍之介は似て非なる。――さてよ？ 心中？ まさか、ね？

「茂木くんなら、どうでもいい人間だからいっしょに死んで」

ぼくはかぶりを振った。

――ない、ない。

ない、と思いたい。

歯茎から血が出た。

洗面台に吐き出すと、歯磨き粉に混じって赤い模様がある。なんだか、ゾクッと背筋が寒くなった。早く出よう、と思った。

学校につくと、校門の前、門柱に背中をあずけて先輩が立っていた。

先輩は制服を着ていた。

私服じゃないのがまことに遺憾である。

「ごめんね。パパがどこへ行くの？　ってうるさくって。だから、生徒会活動だつてウソ言ってきたの」

なるほど。だから制服か。

制服でもワガママボディは隠せないッ！

胸でタイがおしあがっていてよ。

まあ、私服が拝めないのは残念だけど、デートはきょう一回ぎりということはないはず。ないよね？

「それじゃ、いきましよう」先輩が歩き出す。

ぼくは黒紐先輩のあとについていく。

路肩に、黒塗りのセダンが停まっていた。

セダンといえば、成金と政治家と成金とヤで始まる自由業のひとたちが愛好していることで、とみに有名である。さすがは、A社のご令嬢。

「お嬢さま」

ドライバーが降りてきた。

いかにもな、専属運転手といった風体の男だった。しかも、そこそこのイケメンである。精悍な顔立ち。軽く嫉妬。

先輩は振り返り、

「茂木くん。安心していいよ。佐藤は私の味方」

佐藤さんというらしいドライバーは、ぼくを見るとにこやかに笑った。見た感じ悪いひとではないようだ。その仕草がさわやかすぎて、ムス力になった。「目が、目があぁ」

「茂木さん。お嬢さまをよろしくお願いしますね」

よろしくされてしまった……。

仲良く後部座席に乗り込む。

ぼくらふたりには、いまのところ、共通の話題というものがない。その点を気遣ってか、佐藤さんはしきりに話題を提供してくれた。

そとづから外面だけではなく、内面もイケメンのようだ。

先輩が信頼するのも解った。内面イケメンでありガワイケメンである。まさしく最強、フルハウス。

三十分ほど車に揺られた。

国際水生生物見本市まで五〇〇メートルといったところで、セダンは近くのスーパーの駐車場へ入った。スーパーは日曜だというのに閑古鳥（＊動物界・脊索動物門・脊椎動物亜門・鳥綱・キジ目・キジ科・夜逃げフラグ属・閑古鳥。 *kancodorius yonigeflagus*）が鳴いている。

佐藤さんを残して、ぼくらは目的地を目指す。

彼は、ぼくらが帰るまで駐車場で待っているらしい。なんだか後ろめたかったが、その旨を告げても涼しい顔で「仕事ですから」と言った。メンがよいばかりか、仕事にも実直とは、コイツ……隙がねえ……。

花子の説明によれば、見本市は民家のない山の手にあるのとこと。舗装道路はところどころひびわれ、ブザマなようすを晒している。

道中、

「緊張する」先輩が言った。

「ぼくもです」

「初めてなんだよね」ちょっと恥ずかしそうだ。ほのかに朱が射しているような気がするのは錯覚だろうか。ぼくはPTSD（＊たぶん、麻薬）をやっているわけじゃないので、おそらく、紅潮してくれているのだ。

嬉しさに有頂天がマッハだった。

「そうなんですか？ 先輩って——」

ぼくの言を、彼女は遮る。

「お付き合いしてことがあるって思ってた？」

「はい」

「オトコノコから告白されたことならいっぱいあるんだけど、いい返事をしたのは茂木くんが最初だよ」

「どうしてです？」

「飛べるか？ って話だよ」

見本市の入場ゲートが見えてきた。

アーチ型のゲートのうえにはペンギンがあしらわれている。

それを見て、先輩は言う。「ペンギンって飛べないよね」

担任の童貞ペンギンのすがたが浮かんでしまい、笑い出しそうになるのを必死にこらえた。脳波パターンをマジメモードに切り替える。ノンレム睡眠をレム睡眠に切り替えるようなものだ。楽勝。

「ペンギンは泳げます。ダチョウはライオンよりも早く走れます」

「そうだね」先輩は笑った。どうやらこの回答でよかったらしい。ひとまずは一安心。

そして——安堵感は瓦解した。

国際水棲生物見本市は釣堀だった。

「はい。練り餌は五〇〇円です」と受付の、褐色膚で豪気そうなおっちゃんが、眠そうにしながら言った。

目を白黒させながら、先輩は釣竿を受け取ると、ぼくに助けを求める視線をよこした。

ぼくも助けてほしい。

男同士にしたところで、わざわざ釣堀に出向くなんて、おっさん臭いことこのうえないではないか。

うら若き男女の逢引の場としてふさわしいのかどうか——ふさわしくないことなど、決定的だ。考えるまでもない。考えることすら放棄して、このまま釣堀にスキューバダイビングしてやろうかと思っただが、寒そうだったからやめた。

「あんのぉ……クソビッチ（＊雌イヌのこと。ダッチはオランダ人のこと。ダッチワイフは俺の嫁のこと）」が

花子を呪う。

五寸釘と藁人形がないのがうらめしい。釣り針と竹竿では呪術すらかけられぬ……。

「ビッチ？」

「いえいえ。こっちの話ですよ」

「そうなの？」

「はやく池に行きましょう」

テキトーに誤魔化すことにした。

初デートか釣堀とかなめてんの？ 死ぬなの？ ぼくは死んだ。スィーツ（笑）にならないように細心の注意を払わねばなるまい。

一辺が五メートルほどの池にはぼくら以外の客はいなかった。それもそうだ。

ぼくですら、町内に釣堀が存在することをきのう識つたのだ。花子から耳にするまではまったく識らなかった。存じない町民もきつと多いだろうし、識っていたとしてもくるだろうか？ こない気しかない。それくらい寂れていた。

ここでトリビアです。

釣堀に国際という枕詞がつくのは、もともとアメリカの占領軍軍人のための娯楽施設で、インターンショナルな施設だったからです。舟旅がメインだった、かの時代、アメリカンがいるだけでインターナショナルだったんです。

先輩が言った。「釣りってどうやるの？」

とりたてて、ぼくだって詳しくはない。

他人にレクチャーできるレベルじゃない。祖父に誘われて何回か海釣りをした経験があるくらいだ。しかし、だいたいのことは解る。釣りというのは、愛好家が多いことから解るように、難しい趣味じゃない。カンタンな導入だが、そのじつ奥が深い趣味なのだ。

ぼくが手短に説明すると、先輩はよろこんだ。

備え付けの椅子に座りつつ、まったりとした空気が流れた。ホーホケキョが啼いている。山田君はいないようだ。

どれくらい時間が経っただろうか。ぼくは腕時計を見る。まだ十五分しか経っていなかった。なかなか魚はひっかかってくれないことにやきもきする。

ここのお魚さんたちは、自分たちが娯楽の種にされていることに薄々気付いているんじゃないか。そう思わせるくらいに、まったく釣れる気配がない。このままではボウズだ。はなはだかつこ悪い。ボウズなのは高校球児だけでいい。

先輩に、いいかつこを見せたくなった。

けれど、釣りというのは気合や根性ではどうにもならない。釣果は魚の気分しだいなのだ。

焦った。

まったりした空気が他人ごとのように思えてくる。

横を見ると、先輩はジーっと水面を見詰めている。視線を落として、ぎゅっと釣竿を握っている。そんなにきつく持たなくても相手は本マグロでもないし、竿をもっていかれるということはないのに。緊張感は膀胱を刺激する。

尿袋の緒が切れそうだ。

防波堤が決壊するまえにぼくは、

「ちよっとトイレいってきます」

「いってらっしゃい」

水面から視線をはずすことなく、先輩は言った。

コンビニの大使用トイレのごとく男女兼用のトイレのまえには、見たことのあるオンナノコが立っていた。

アクセがジャラジャラ。

「こんにちは。孔明くん」

ぼくはスルーしようとしたが――

「どこへいくの？」

手首を掴まれた。

腕に幾重もはめたリングがかちあう。鳴る。

「なにか、用かな？」

「用？ もちろん。私は、あなたからラブレターをもらったのだ」
オンナノコは白面さんだった。

ネコミミっぽい帽子を被っているので、遠目にも実のところ判然としていたのだが、気付かないフリをするつもりだったのだ。けっきょく、夢くも失敗したわけだが。

白面さんは、あまり表情の読み取れない仏頂面で、

「安心していい。私は、いまは邪魔しない。縄架黒紐はいわゆる境界例だ。いや、単に精神薄弱と言っていていいかもしれないが。じつさいのところ、精神医学というのは医者の鑑定によって結果が著しく異なってしまう、およそ科学とはいいがたいものだ。骨董品鑑定のほうが、まだマシというレベルですらある。精神医学との結びつきも強い精神分析なんてものは、エセ科学の最たるものであるし、その手法すら、スピリチュアルと大差はない。ようは、ユングのように数式で精神を記述するか、靈魂うんぬんを持ち出すか、といった些細な違いではない。科学のガワをかぶった呪術だ。そんなものは宗教だな。しかし、人間というのは心的にいつて脆いことも確かだ。理論的裏づけがどうであれ、私はあまり気分のよくないことはしたくない。だから――」

いきなりの長口上。

ぼくは辟易した。

術学趣味も大概である。

しかも先輩がアレなひとだと識っている？　もしかして有名なことだったのか？　ぼくが無知だっただけなのか？

識らぬがホトケとはよく言ったものだ。

「ん？　ちよつとした独自ソースがあるのだ」

「そう——なんだ」ぼくは気圧されていた。

長口上自体もそうだし、仏頂面でつらつらと説法されれば門前の小僧も習いたくなくなるものである。

「ところで、釣堀というのは——」

またしてもなにやら長々と語りそうなので、ぼくは言った。「おもしろい話をしてよ」

「それは、ギャグというヤツか？」

ピンと、帽子のフチから覗く髪が跳ねた。なんだか、耳がよつつあるみたいでおかしい。

「そうだよ。笑いは地球を救う」

彼女は量子力学的難問に苦戦する物理学者の顔をした。きっと、いま彼女のなかでは超弦理論の宇宙ひもについてだとか、インフレーション宇宙論だとか、タイムマシンと因果律の関係とか、どうして手動灯油ポンプが醤油チュルチュルという正式名称なのか？　とかそんなことがめくるめくついているに違いない。

懊悩。

やがて顔付は、F i m a が理解できない物理履修中の学生のそれに変じた。

「お手本を見せてほしい」

ぼくは咳払いをした。

見せてやろう。我が渾身のギャグ。

ぼくはこれでも、ギャグキングと言われているのだ。脳内で。脳内美少女たちに拍手喝采を浴びているのだ。とくと見よ！　ぼくの

ギャグ！

「ヘイ、ジョン。となりの家に塀ができたってね！」

白面さんがぼくを興味深そうに覗き込む。「うん。それで？」

十分にタメをつくったところで、

「ウォール！」

爆笑は起きなかった。しかし、快哉があがった。

尊敬と崇敬のこもった、矢のように熱い視線の驟雨がぼくを襲う。

「うおおとウォールをかけた斬新なギャグ！」ぱちぱち。「素晴らしい！ 私をこんなに笑わせてくれるなんて！ 解った。宇宙へいこう」

「は？」

「だから、宇宙へいきましよう。私はあなたに惚れた」

しょうじき、意味が解らない。やっぱり先輩とは別の次元でアレなひとだと思った。グウの根も出ず気力がおきない。

変な帽子に、ごつごつアクセ。見た目からしておかしいじゃないか。先輩と違って。先輩は見た目はリストカッターには見えないし。白面さんは外見からして完全にアウトだ。ワイルドピッチのうえに、ピッチャー返しだ。

ぼくのヴィクトリー「オヴ」モテロードは棘の道らしい。ドリルのような棘がびっしりと生い茂^おっていて、ぼくを苛むんだ。バツゲームから始まった二枚のラブレッターがさらなるスパイラルを生んでいる気がしない。

「邪魔しないんじゃないの？」

「気が変った」

——変んなよ。

「じゃあ、おもしろいギャグをいえたら宇宙へ行ってやろうじゃないか」

「いいだろう」

白面さんは不敵ににやつく。ネコミミ帽子のさきつぽをいじり、「となりの家にカキができたってね！」

「ほう。それで？」

「それ、柿やないねん。牡蠣やねん。となりの柿本さんは牡蠣の養殖してんねん」

「……」

「どうだ？」

「ここは南極点かな？」

ふ……。ドシロートが。なんでも大阪共和国の言語にすればいいつてもんじゃない！ 大阪なんて新幹線で福岡にいくために素通里したことしかない東京モンが考えるような実に浅はかな考え方だ。まったく、片腹痛いわ！

「む……。垣と見せかけて、あえて垣じゃないという。この高度なギャグを理解できないのか！ となりの垣に柿たてかけたという早口言葉ともかけているんだぞ！ ギャグというのは認識、常識のズレを楽しむものはずだぞ！ これだから、ホモサピエンスは——」

「いや。そもそも音声的に、垣、牡蠣、柿。全部いつしよだし。口頭じゃ、まったく解らない。0点とつけるのもおこがましいわッ！

マイナス一万点！ 青天井ルールじゃなくてよかったな！」

ぼくの反論不可能なパーペキ論破に、彼女はむすっとふくれた。

それから、

「帰る！ カエルが帰る！」

帰るのかと思いきや、数歩歩くと立ち止まった。

期待感丸出しの表情で、

「どうだ？」

「お帰りください」

「I'll be backだからな！ つぎにあうときは、私はT-800じゃなくてT-Xだと思えよ！」

「なんだったんだよ。もう……。まあ、T-1000じゃないだけよしとしてやろう」

自分でラブレターを出しておきながら、先輩以外には冷たいばくなのだった。

ぼくは一途なんである。冬ソナでいえば、ユジンくらいに一途な
のである。かわいそうなサンヒヨク。パク＝ヨンハ（＊サンヒヨク
役の俳優）とか、いつの間にか歌手になってるしさ。関係ないか。
先輩を待たせては悪いと、手短にシヨウベンを済ませようとした
ところ、足元に紙切れを見つけた。なんとはなしに拾ってみると、
白面さんからのものだった。

『水曜日。家庭科室で待つ』

なぜ——休み明けの月曜日じゃない……。まったくわけの解らん
女子だ。

冬町の好みを疑う気はないが、ぼく的にはナシだ。あり得ん！
さて、彼女からいかにして逃げるか水曜日の朝までに考えなくっちゃ。

池へ戻ると、先輩が走ってきた。

「遅いよ！」

「ごめんなさい」

「ほかの子と会ってたりしないよね？」

「え？」

こいつ——エスパーか？

「だって、茂木くん。その——」

やっとぼくのジェントルメンっぷりを評価する女性が現れたよう
だ。

嬉しいじゃないか。エスパーだっていいや、と思った。もうなん
でもこい。宇宙人でも地底人でもなんでもこい。ただし美女およ
び美少女に限る。

「——じゃなかった。そうじゃないの！」

先輩は急に取り乱すと、池のほうを向く。
釣竿が泳いでいた。

シユールだ。

「先輩……」

「だって、釣り方解らなかつたんだもの」

「先輩はかわいいなあ」

すっかり口に出てしまったことを悔いた。こつこつ科白はこつこつ
の声にとどめておくべきだった。

案の定、先輩はすぐく恥ずかしそうに照れた。

そして、釣果はマルハゲだった。

三

水曜日。

家庭科室へやってきた。

週一の移動教室でくる以外には、とんとご用事のない家庭科室。

黒ヤギさんは白ヤギさんに訊ねるまでもない。

入室すると、洗剤の臭いがした。

何度もいうが、ぼくは紳士なのだ。オンナノコから交わされた約束事をブツチするわけにはいかない。と啖呵を切りたいところだが、断る口実が思いつかなかった単なるヘタレである。

しかし——よもや、こんなことになるうとは。

自分は喰うがわであって、まさかヒツジだったとは夢にも思わないオオカミさんのぼくはとてつもなく焦っている。赤頭巾ちゃん助けて、PLEASE！
プリーズ

「それでは、切開を始める！」

素手にメスという、衛生管理ゼロなイデタチで白面さんが、ぼくの腹のうえへと、のそつりと現れた。

ぼくは、いま家庭科室のステンレスの天板に縛り付けられた状態だ。

がつちりと鎖で緊縛されている。そんな、こんな大人ちつくプレイはまだはやいよ！ とか思いつつ、彼女の顔をしたから見あげる格好を強制されている。下方から眺めると、彼女の瞳の色がなんとなく赤味がかっていることに気付いた。が——いまはそんなことはどうでもよい。

メスが徐々にぼくのはだけさせられた腹部へと迫る。

これは——ジョーダンなのか？

白面さんを見る。

とてもジョーダンとは思えない顔。というよりは表情から感情が読み解けない。あえて読解すれば、マジメな感じだろうか？ やっぱり、ジョーダンじゃない！ マジメな顔でメスとか危険すぎる。「ちよつと待って！ 話せば解る！」

「そう……。じゃあ——」メスがいったん引つ込む。「私はホモ」サピエンスを研究している。いままでサンプルを採取しようと思っていたんだが、私にも倫理観というものがある。無闇に解剖をするような無粋はしないよ。安心するといい。だけど、あなたはすでに要件を充たしているのだ」

「意味が解らない！」

ペン回しの要領でメスを指の間で回転させる白面さん。

うっかり失敗して取り落とし、ぼくの腹にずぶりとつきささらないだろうか、ヒヤヒヤだ。脂汗がでてきた。ガマの油売りが小躍りし出しそうなくらいの、滝汗モード。まさに人体ナイアガラ。

「愛があればなんでもできる。いち、に、さん、東京ラブストーリー——！」

「愛とかないしッ！」

「それはおかしい。あなたは私にラブレターをよこした」

「loveとlikeは違う！」なんつうモンギリ型の定型句テンプレート！ けれど、こんなことばしか浮かばなかった。

「では、あれはライクレターなのか？」

「そんなの、初めて聞いたわ！」

「ならやつぱり、ラブレターでいいのだな？」細動するメス。きらんと光る刃。「切開を始める」

なんとという、焼け石に水（*誤用？）。

焼け石に水？

なるほど……。水ではなく、大水ならいいわけだ。

どんなに高温の石だろうが、そいつは岩じゃない。巖でもない。大水の前には手も足も出ないはずだ。堤を壊し、堰を粉砕する大水のように振舞えばよい。ようするにクリティカルヒットを与えれば

よい。なんて、かんたんな話！

「ちよつと……いいかな？」

「なに？」

ぼくは見本市での一件を思い出していた。

これは賭けに違いないが、おとなしくアジの開きになる気など毛頭ない。なにしろ、ぼくは全身麻酔すらかけてもらってないのだ！

魚には痛覚がないので、活け造り状態でもすこしも痛くはないが――

――、ぼくのばあいは痛いんだ。人間だもの。みつを。

「きみがぼくのギャグで笑ったら、解放してくれない？」

逡巡してから、白面さんは応えた。「いいよ」

これで確定。

彼女は笑いに関して興味があるとみえる。当人のセンスは愚にもつかないが。

「ひとはパンのみで生きるのではない、と言うよね？」

「イエズスね」

「じゃあ、なにが必要だと思う？」

「聖書によれば、神の口から出ることにばに浴する。これはギャグだと思う。食べるという意味の口、と、発音するという意味の口、の「ギャグになつてないような……」

「だってパンの話でしょう？ イエズスもなかなか諧謔趣味があつたみたいだ。さすがは大工の息子で、ニート（＊彼は三十路まえまで定職についていなかった）」

「ケーキでも食つてろ！」

「それはフランス革命時の創作と言われている。是が非でも王政を悪にせねばならなかったから。けれど、さっこん賑わいを見せている、マリー＝アントワネットの名誉回復というのは承服できない。

なぜなら、彼女を悪役にしておかないと、いまの民主的な地盤が揺らぐことになるから。たとえば、アドルフ＝ヒトラーはナポレオン＝ボナパルトと同じく投票によって独裁者になったわけだけれど、敗戦後、ドイツ国民は彼を悪の祭壇に祭った。自分たちで指導者に

したてておきながら、だ。ナチスにマインドコントロールされた主張することで国民は免罪符を得た。じつさいのところ、彼は英雄のはずだ。ナポレオンはいまでもフランスの英雄に違いない。もちろん、英雄というのは大殺戮者であるばあいが多いから、ナポレオンを英雄視するのはフランス人と日本人くらいのもので、いささか滑稽ではある。とうぜんのようにほかの欧州諸国ではボナパルトは侵略者でしかない。もっとも、宣伝省という着眼点といい、ヒトラーがマインドコントロールをおこなっていなかったという保証はない。むしろ、その手腕はすばらしいとほめたたえるに値するだろう。けれど、彼が軍需によっても、ドイツの不況を救ったのは事実。ひるがえって、日本人というのは愚かだった。国民総懺悔なんてバカなことをしたために、いまだに謝罪と賠償と言われ続けている。――

――のちの歴史が判断する。もしくは、歴史家の判断にゆだねるといふのはよくある言説だが、ときに英雄すらも悪人に、ましてや無辜のものを罪人にする覚悟が必要なのだ。そもそも、なにが悪であり、なにが善であるか？ というのも難しい問題だし、近代国家というのは国民を洗脳することから始まる。ワイマル共和国時代、ドイツの医師で社会衛生学者のマックス・ヒルシェは民の社会化、つまりは国有化を提言している。だから、共和制フランスの教科書ではマリ―は悪でなくちゃんらない。そう、教育すべき。これは議論の余地の問題ではない。議論してはならないのだ。近代国家の歴史教育が一種の洗脳であることは、ぎゃくに議論の余地がある。たとえば、日本では西欧諸国に負けず劣らず義務教育の開始が早かった。明治には成立していた。これをほめたたえるムキがあるが言語道断だ。国家による教育とは、さきも述べたように国民化へのプロセスだ。早期に義務教育を開始したからこそ――」

「もういい！」

まったく、どこの思想家だよ。あたま痛い。

社会科のセンサーだってここまで講釈を垂れないぞ！ こんなに講釈したら、睡眠どころか永眠する生徒がでちゃうからなあ。

白面さんは見るからにうなだれて、

「残念。というか、なんの話だったか？」

「パンいがいに、人生にはなにが必要って話ッ！」

「パンきり包丁？」

「そのまま食え！ 千切って食え！ くそ硬いバケツだろうと、千切って食え！ 文明の利器使用禁止！」

「むう……」白面さんの柳眉が毛虫のようにうごめく。そして、彼女は自分なりの回答を得たらしい。してやったり、との感情があらわれるのがありありと解った。「バターだ！ バターがないとそのまんまのパンなど食ってられない！」

「甘いな。ふふ」

「なんだって!？」

彼女の顔を色取る驚愕に、ぼくは歓喜した。すでに伏線も撒いたあとは回収するだけである。ギャルゲにおける好感度の数値をあげていく作業よりもカンタンだった。まったく、白面さんはやりやすい。

ギャグエンペラーの手にかかれば、おちゃのこさいさい、への力ツパである。カップパの河流れである。

「いっしょにパンを食べてくれるひとさッ！」

しゅんかん、ぼくは華麗極まるスマイルをつくった。

「甘ああいッ！」白面さんが叫んだ。「なんという三段式ロケットギャグ。そのペイロードには笑いが詰まっているんだね！」

「そうかな……」

意味不明な解説をありがとう。

白面さんが笑った。「じゃあ、パンを食べよう」

「はいい？」

「いっしょにパンを食べる。だから、カンパニーなんだよ。Com - pan - y！」

「そうなんだ……」

「ちよっと待っていてほしい。いまから焼く」

「いまからかよ！」

「大丈夫。すでに小麦粉は用意されている。麦穂を刈るところから始める必要はない」応えつつ、ぼくの拘束をとく。ふう……これで自由の身だ。ああ、空気おいしいなあ。生きてるって、スバラシイ。

「そりゃ、どんなに手作りにこだわる蕎麦職人でも、蕎麦刈りからはしないような——」

「そのこの棚に入っている」

白面さんの視線に追従すると、調味料などが詰まった棚があった。調理実習でお世話になる水屋だ。あたりまえのことだが扉には盗難防止のために施錠されている。ちいさなサイズの南京錠ではあるが、家庭科教諭の許可もなく開けられるものだろうか？

ぼくの疑問はすぐに氷解した。

彼女は鍵はもっていなかったが、鍵と同じ結果をもたらすものもっていた。ハリガネである。

それもただのハリガネではなく、ちょっと奇妙なかたちをしている。ピッキング犯が好んで使用していそうな、専門化されたものだった。きつと正式名称もあるのだろう。識らんけど。どこから取り出したのか、杳ようと識れぬハリガネを鍵穴に差し込んで、ものの数秒。南京錠は陥落した。

「破城槌ラムは城門を破った。では、敵陣へ呐喊する」

スルーだ。スルー。きゃっせん。

ぼくは白面さんをそのまま観察することにした。縞々パンツを見つめるようなたたかな眼差しで彼女の一挙手一投足を観察して判明したことは——予想外にも、彼女の料理の手際のよいことだ。人間、見た目で判断してはいけない。ぼくはひとつだけ人間的に成長したのだった。

ちやちやちゃつとかろやかな手並みでバターと卵を混ぜ、そこに強力粉とベーキングパウダーを加えていく白面さん。その顔はいつものように無表情でクールなものに戻っていた。

突然、ボウルの中身をかき回す手をとめ、彼女は振り返った。

「食うなよ？」

「食わねえよ！　ちゃんとできてから食う」

「てつきり、孔明くんは、ナマ生地ですら食っちゃうイヤシンボーなのかと思ってたよ」

なんという偏見。そして勝手な設定。ぼくはジェントルメンだと何度いったら解るんだ？　って一回も口に出してはいないか。テヘへ。

できたパン生地はしばらく寝かさなくっちゃいけない。最低でも半時間くらいはかかるかもと白面さんが言った。ぼくらはパン生地がふつくらとなるまで暇になった。だからといって、

「腑分けの続きをしよう」

「しねえ！」

「やはり、ダメなのか？」　しょぼんとする白面さん。

「ぼくを笑わせないとダメ」

「それは難しい……」

「修行あるのみ！　粉骨碎身で臨みたまえ」

「いいの？　粉骨して碎身していいの？　孔明くんを漢方薬にしているの？　でも漢方薬になる原料としての要件は、胎児の死骸もしくは凌遅刑によって肉を削がれたものの肉片と……」

この子、どうしたらいいの？　ぼくはどうすればいいの？

変な子のあいてを、どうしてしなくっちゃなの？　なにかの天罰なの？　原罪でも贖っている最中なの？　アダムとエヴァのバーカ、バーカ！

「どうしたの？」

「なあ……」

「なに？」　白面さんは首をかしげた。綺麗な赤目がぼくを見てくる。うっかり、愛らしいと思——ってないからな！　ぼくは一途、ぼくは一途。ぼくは一途な好青年……自己暗示完了。

「どうして、ぼくの身体を引き裂きたいわけ？」

「もしかして、童貞？」

脈絡がないなあ……。と呆れつつも、

がしかし、童貞というぼくにとつての悶絶的禁止ワードに絶句してしまいそうになったのも事実だった。ここは毅然とした態度で臨むべきだ。ぼくは深く息をつき、強健さでもって言い放った。「悪いか？」

白面さんの手がぼくの肩に置かれた。仕事をしくじった部下をなぐさめるような優しい手つきでぼんぼんと肩をたたいてくる。そして、

「大丈夫。童貞はステータス」

「エー！」

腰砕けになった。

アッパーがくると思っていたら、キックを喰らった。そんな感じ。身構えて試合に挑んだところ、じつはボクシングじゃなくムエタイだった。まさにこれ。ムエタイでは性転換したボクサーがいるが、金的は有効か？ 有効なのか？ まあ、それはいい。それよりもだ。まーた始まったよ！

「そもそもだよ、孔明くん。童貞、処女というセックスに於ける日本語の言い分け、弁別が恣意的。たとえば、キリシタンの文書では童貞という語が好まれる傾向にある。それは、もとを質せば英語のヴァージン、ラテン語でいうところのウィルゴーの訳語として童貞が生まれたから。ウィルゴーおよびヴァージンはどちらも男女の別なく用いられる。チェリーボーイにしても、チェリーは男性用の侮蔑語ではない。キリシタン文書では童貞マリアとも書かれる。童は、男女の別なく用いるからね。そして、日本列島における童貞の区分には、さらに酷い様相を呈している。素人童貞、いわゆる性風俗以外での性交渉を持たない男性へののしりさえある始末。これは、男は女を食すべきという考えが根底にあるのかもしれない。「据え膳食わねば、なんとやら」などということばもある。しかし、多くの宗教的な価値観ではけっして童貞は悪いことではない。イスラ

ムにおいては、気軽に女性に触れることさえ禁忌であるし、カソリックでは童貞を推奨する傾向にあり、また、アメリカでも結婚するまで性交渉をしないことが清く正しいとされるむきもある。仏教でも同じ。仏教では女人を忌避する、悪魔的な存在であるとするアイデアルがあるのもそうだが、女人を拒絶するあまりに、衆道などがはやった。痔というのは、やまいだれに寺と書くが、ここには直接的な比喻があると見て間違いない。しかしまた、いっぽうでワギナ「デンタータ」といったことばもある。これは、齒の生えた女性器、つまり、男性の性交渉への忌避感を表したものだ。古代ローマでは、性器同士よりもオーラルセックス、イラマティオーやフェラティオーがはやったのはいうまでもない。これが、さきにのべたワギナ「デンタータ」に対するものか、かたや、ダイレクトな性的交渉をなると抑えるのが美德だったのかは解らない。ローマ、アンシエント「グリークではホモセクシャルが横行したのだから。童貞を軽くみるというのは、女性の自発的な性的解放や価値を貶めるとも逆説的には考えられるし、また現代日本において女性がヤラハタなどというのは、男性の獣性を喚起するようなおろかしい行為とも取れる。現代の風俗産業は爛熟している。すっかりした場所ならば性病の心配はないし、ポルノにしてもネットでかんたんに手に入る。私は思うんだが、公娼制度というのはある意味で有益であると考えて。そうなると、プロというのは成立しえるが、いまは直接的な性風俗は事実上黙認されているにせよ、してはいけないことだ。「偶発的にベッドインした自由恋愛の帰結」といういい訳が通る。つまりは、線引きが難しい。素人だと思って抱いた女がAV出演していた、なんてのはお笑い種ではなく、毎年発売されるAVの数を考えればけっこうまっとうな確率を持ちえるのではないか？ とすれば、わざわざ素人の女を求めるということにさしたる価値があるのかどうかその根本を疑うべきかもしれない。オナニーというのは、聖書のオナンを――」

「もついい!」

こっちのペースが乱れまくりんぐ！

これが俗に言うKYってやつなんだな。KYってなんの略だっけ？　かわいそうな幼女？　うん、たぶんそうだ。ぼくの現在の心境はまさにかわいそうな幼女なんだもん。うえええん。

「あ、そろそろいいかな」

白面さんの壮絶なる有無をいわせぬマシンガントークによって、半時間があつと言う間経っていたのだった。彼女は、ボウルのなかの生地を覗き込むと、「うん。いい感じ」と言った。とてもうれしそうな顔をしていた。

「メロンパン？」先輩は不思議そうに瞼をさげて、ぼくの抱える紙袋を見た。しげしげと見た。

「そうです。メロンパンです」

「手作りみたいだね」

「ぼくが作りました」

ウソではない。半分はぼくが作ったも同然である。

パン生地をつくったのは白面さんだが、そのあとの工程はふたりがかりだった。というか、後半はぼくだけしか作業していなかった始末である。パン生地にクッキー生地をかぶせるところは、ほとんどぼくがやった。なぜかというと、白面さんが飽きてしまったからだ。

飽きた挙句、パンを食らうという当初の目的すらも忘れて、「眠いから帰る」と帰宅してしまう始末。

まったく何様のつもり？　とか思ったけど——こちらとしてみれば、なにも悪いことばかりじゃない。だって、彼女の目的である腑分けとやらのことすら失念したようなのでありがたかったんだもの。身のすべて（＊臓物含む）を晒けだすのは愛する人だけって、決めるんだもん。

「食べていいの？」

「どうぞ。どうぞ」

おそろおそろ紙袋からメロンパンをひとつ掴むと、先輩はそのちっちゃなお口へと運ぶ。カリカリ。

先輩がフリーズした。

顎の動きがとまっている。まずかったのだろうか？　じつはまだ、ぼくは食していなかった。まずかったら、白面さんをあしたにでもボッコボッコにしようと決めた。たまには紳士も暴力を振るう。愛に信念は適わない。

「先輩？」

「おいしい！」

「それはよかったです」

じつは二次発酵、時間がなかったのではありません。とか死んでも言わない。こまかいことはいいのである。結果オーライなのである。経路とかプロセスとかどうでもいいのである。

「私、メロンパン好きなんだ」

「そうなんですか？」

「うん。いつてなかったけど。それなのに、解ってくれるってことは、私たち似たもの同士なのかな」
待て。

似たもの同士ってなに？

怖いこといわないでくださいよ……先輩。ぼくはリスカットなんてしませんし、睡眠薬だつて過剰摂取で永遠の昏睡に至りたくないの。呑めないくらい、性に——じゃなかった、生に執着してるんですよ？

仲間だなんて——なにそれ、怖い。

ウォータースライダーは滑れても、ぼく……東尋坊からはダイヴできませんからね！　せめて二階トイレの窓くらいで勘弁してほしい。

「どうしたの？　考えごと？」

先輩はきょとんとしている。

刹那、ぼくはキョドリかけ——こちらの内面を読み取っているわけじゃないことに気付く。純粹にこっちの反応がないのにとまどっているだけだ。そうだよ。先輩はエスパーかもしれないけど、エスパーなんているわけじゃないじゃん。杞憂杞憂。空が落ちてくるってヤツだ。

「まあ、そんなところです」セーフ。セーフ。怪しまれてない。OK、OK。

「そっかぁ」

こうして日々は過ぎていくのであった。

もちろん、先輩といっしょに下校したのは言うまでもないだろう。楽しいよ？ オンナノコと下校するの。下校中は手を繋ぐので、さいきん夜のお勤めがすっかりサウスポーになっちゃったけどね！え？ 日本は右側通行だから、ふつうは左手で繋ぐだろうって？ 交通事故怖いんだぞ……。

先輩はいがいと周囲を気にしないタイプなのだと解った。というか、正確には周りが見えていないというべきなのだろうか。ぼくの供したメロンパンがよつぽど気にいったのか、あるうことが……、
「茂木くん。こんにちは」

と、我がクラスの入り口で手を振ってくるのである。

周囲の視線が痛いのでやめてください、と懇願の眼差しを向けたら、「はいつてきてよ」の合図と勘違いしたらしく、ぼくの席までやってきた。先輩、空気読んでください……てか、空気に文字なんか書いてないから読めないよネー。

初登場のときと同じように足取りは優雅だった。

「……スケコマシ」

花子がボソつとぼくにだけ聞こえるように絞った声量でいった。はい、無視無視。ノイズはノイズキャンセラーで消去しなきゃね。

「これが愛夫弁当というやつか……」冬町が言った。

「なんだよ……それ」

「そのままの意味だ」

「……スケコマシ弁当」

「ありがとう、茂木くん」

ぼくが渡した風呂敷包みをうやうやしく受け取ると、黒紐先輩はぼくの前席に座った。向かい合う格好になった。先輩が見つめてくる。えへへ、照れるよハニー。という内面はとうぜんのように韜晦しつつ、

「いえいえ。先輩がこの世に未練——じゃなかった。よろこんでく

ればいいんですよ」

「キヤーキヤー」うぜえ。

「……スケコマシ」

「で、中身なに？」

「……エロスが詰まってる」

「おまえら、とりあえず好奇心はネコをも殺すということばがあつてだな——」

ぼくは冬町と花子を睨んだ。

ふたりはニヤニヤしながら退散した。

——と思ったら、単にぼくの席から遠のいただけだった。遠巻きにしながら、見てくる。じつにうざい。マジでうざい。パパラッチに追い詰められたダイアナ妃のこころ模様が解った。カメラもつてないだけ、ぼくのほうがマシだと思っておこう。英国王室も大変だなあ。

「じゃあ、食べましょうよ」黒紐先輩がするすると風呂敷をほどく。蓋をあける。顔が華やいだ。「わーい」

弁当の中身は、

すべて冷凍食品である。

サクサク春巻き。

ねっとりミートボール。

パサパサピラフ。

冷凍食品がいはいはなにも使っちゃいない。手を抜いたのではない。こうするようにと、先輩が言ったのだ。

「ありがとう」

「おかまいなく」

「うん。じゃあ、私からもどうぞ」

先輩の手提げから登場したのは、

お重であつた。

すばらしい重量感。

超重量級の三重のお重。

重重。

『重』という漢字を三回も使っちゃうくらいに、ばかでつかい。とてもぼくひとりではな食えそうにないし、先輩はもつと無理だろうと思った。

なかを開けると、こいつは御節おせちなのか？ 状態になった。

あまりにも豪華だ。

豪華で、豪華だ。

豪華としか表現しようがない。

ごはんだけで五〇〇グラムはあろうかという盛大なボリュームなのだが、これがまた輝いているのである。陸のダイヤだ。宝石箱やあ！ どどこさんのリッチナブルなアキタコマチに違いない。あれ、アキタコマチだから秋田産か。新潟産ならニイガタコマチだよな。ジョーシキ的に考えて。

「いつも、佐藤がつくりすぎるの……。精をつけにやああきません、って」

「佐藤ってあの運転手？」

「んつとね、佐藤は料理長」

「あのひと、料理長もしてるの？」

佐藤め……。口惜しさも忘れてしまふほどの万能イケメンと思っただが、

「違うよ。うちはね、佐藤しか雇わないの」

「佐藤さん」って呼べないじゃないか……。いっせいにみんな振り向くとか怖すぎる。しょんべんチビる。

「でも、なんでですか？ 理由は――」

「ほら、いまって個性の時代じゃない？ 佐藤なんて平凡な名前は個性がないとして、履歴書で落とされるんだよ」

「そんなバカな……」

世間…… 厳し過ぎるぞ！

おまえの顔が気に入らないって理由よりもむかつくぞ！ それ！
「それがあるの。大事なんだよ？ 個性。少なくともA社では落と

してる。だから救済に家令やコック、掃除番、守衛、そういった職業として——うち、つまり縄架家個人として雇うわけなんだよ」

「でも、苗字ってどうにもならないような……」

「だから、そんな可哀想な佐藤さんを雇うの。なまえで人生が決まっちゃうなんておかしいもの」

わけが解らない……。

世間は名前にすら個性を求めるのか。だから子供に悪魔とか雷中（*ピカチュウと読む）とか海（*マリンと読む）とか、奇抜なものをつけようとするわけか……。なら——ぼくは合格に違いない。なまえを見た瞬間、「合格！」と面接官が言うに違いない。ちよつと変った苗字と下の名前をくれてありがとう。父さん&母さん。

て、いうかあれ？　なんかおかしいぞ。これってダブスタっていうのではなかるうか？　A社って……。あなたの家が経営してませんでしたっけ……。まあ、深く考えないことにしよう。

「はやく、食べましょうよ」

先輩が目を輝かせながらせかすので、

「いただきます」

十七年の人生で初めて識ったことがある。春巻きを食べるオンナノコはエロいということを。

なんでこんなことを識らなかったのか。

まことに残念だ。

いいかい？　バナナを食うオンナノコよりもずっとエロい。バナナはふつうにムシヤムシヤ食えるけど、ちっちゃなお口の人が春巻きを食うと中身がでるんだ。具と汁が。それが下唇にはりつき、ぬらぬらと輝く。こいつは、どれくらいこつた！

「ほんとうに、そんなんでよかったんですか？」　ぼくは貧相な冷凍食品の列を見ながら言った。

冷凍食品……。

まごうことなき冷凍食品。

「うん。庶民的な味がね、私好きなんだ」

きれてはダメだ。茂木孔明。

庶民ということばに反応しちゃだめだ。

おかげでこっちは、シェフのつくったお重が食えるんだぞ！ うまいうまい。この錦糸卵は絶品だ。こっちはなんだ？ なんのソテー？ まあいいか、とりあえず肉。宝石箱やあ！ な肉。

「ああ、それで交換して食べようって？」

「うん。パパがね、厳しくて」

「なるほど……」

「食べ物で人格形成がなされるってのがパパの持論で。牛は牧草を食べるように、ライオンはガゼルを食べるように、人間にもヒエラルキーに応じて食べ別けがなされるべきだって……」

「なんか、すごいですね……」

なんというキチガイな思想を持った父親だ。これでは、先輩がリストカッターになつてしまつのもまつとうな気がする。よかった！

庶民でよかった！ 父さん、アル中だけど！

「うん……」

イヤなことでも思い出したのか先輩の覇気が見るからに消失。

まずいぞ。舵を切れ。

このままでは世界の端っこにあるという、絶壁の滝つぼへまっさかさまだ。話の方向を修正するのだ。喜望峰へ面舵いっぱーい！ アフリカの土人が待つてるぜ！ ぼくはバスコダガマになる！

「そんなことより、野球の話しようぜ！」

「え？ 野球？」

「野球拳の話でもいいですよ！」

「野球拳？ 中国拳法的一种？」

「ごめんなさい。純朴な先輩は野球拳なんて知らないっすよね！ じつのところ、野球拳は愛知県松山市の伝統芸能であり、家元も存在するとか、マジどうでもいいっすよね！ トリビアもいいところすね！ ちなみに現在の本家家元は澤田剛年さんという。マジ、どうでもいいしッ！」

「スルーでいいです」

「そうなの？」

「はいはい。スルー。ばっちスルー」

「ふふ」先輩が笑った。「やっぱり、茂木くんはおもしろいね」

「ギャグキングですから！」

「そうなんだ」

「自称ですけど！」

我ながらうまい誘導だ。

先輩はすっかり元氣を取り戻した。

喜望峰へいくのは存外、楽チンな航海であつた。なんだ、大したことないじゃないか。バスコダガマ。四百年まえのスペイン？ポルトガル？どっちでもいいや。産まれたかつた。ぼくは航海王子だッ！

「ヒソヒソ（あいつ、女人のあつかいあんなうまかつたか？）」

「ヒソヒソ（脳が沸いてるのよ）」

「ヒソヒソ（あれか、脳に寄生するウマバエ）」

「ヒソヒソ（そうそう。あれみたいなものよ。そのうち、身体じゅうからうじゃうじゃハエがでてくるよ）」

「ヒソヒソ（きめえ）」

「ヒソヒソ（いまでもじゅうぶんきものいのにね）」

「ヒソヒソ（うえっうえ）」

「おまえら、黙つとけや！」ぼくは一喝した。

陰口はいけないんだぞ。小学校でセンサーからならわなかつたのか！ぼくはいまだってブリーフにもなまえを書いてるんだから。

「アイコンタクト（調子のとてんぞ）」

「アイコンタクト（まったくしょうがないヤツだなあ。コーくんはむかしからだけどさあ）」

「アイコンタクト（しかし、まさかうまくいくとは思わなかつたなあ。てつきり撃沈して、みんなで笑いものにするってのが、当初の計画だっただけだ。これだつたら、俺でもいけたんじゃないかね？）」

「アイコンタクト（冬町くんが？ ムリゲーだと思うけど？）」

「アイコンタクト（なんでえ！）」

「アイコンタクト（だってたぶん、アレ、コーくんが強要してるのよ。イヤがる先輩をむりやり……）」

「アイコンタクト（犯罪！）」

「アイコンタクト禁止！」

まったくしょうもないやつらだ。どいしょうもない。ぼくと先輩のスイートタイムを邪魔する権利は総理大臣にだってないんだぞ。

もちろん、幕僚事務総長にもない。アメリカ大統領にもだッ！

「テレパス（やっぱ調子のもてんな……）」

「テレパス（いつかいヤキいれるべきね。こんど、焼き鰻もってくるよ）」

「テレパス（そいつあ、いい案だなあ）」

「テレパス（じゃあ、私が放課後体育館裏に呼び出すから）」

「だから黙れえ！」

「え？ 黙ってるけど？」

くそあ……。あしたからは屋上か中庭で食うことに決めた。こんなのもうこりごりだ。たくさんだ。ああ、もうおなかいっぱいになりそう。

「一人漫才？」先輩が言った。

「そんなところです」

いまにみとけよ……。冬町&花子……。

「おー！ 孔明くん」

なんか余計なの来たし……。

くんなし！

「おーい！ どこだい？ 孔明くん！」

ぼくは身がかがめた。完全に隠れるなど不可能なのだが、これで事態を回避できるものと高をくくっていた。

教室の入り口でキョロキョロするネコミミ帽子。アーマーリング女。こんな風体の女子など知り合いにはひとりしかいないのである。

「不在なの？」白面さんが花子のほうを向く。「ねえ、そのあな
た。孔明くん、休み？」

花子は、

「そこそこ」

指差すなや！ ひとを指差しちゃいけません。つてばつちやから
おそわらなかつたのかよ！ まったく最近の若造はなってねえなあ
！ 大澤親分、活をいれてやってくだせえッ！

「なんだ。いるんじゃない」

つかつかとやってくる。

「や、やあ」

見付かってしまつてはしょうがない。ぼくは、右手をよわよわし
くもかかげてみせた。ぎこちなくなつてしまうのはしかたがない。
ぼくはウソがつけないのだから、表出してしまつても焦らない！

「どうしたの？ なんか拳動不審なんだけど」白面さんが怪訝そう
な顔をする。

「解つてるだろ……？」

「なんの話？」

「だから——」

ぼくはウインクした。

「あー。解つた。うん」白面さんはうなづく。

うなづけば、呼応するように耳のピアスがじゃらじゃらと鳴る。

何度見ても、とんとなれない。どうみたつて不良だよ。DQNだよ。
リア充だよ！ やっぱり、ぼくは清楚系が好きなんだなあ、と再確
認。先輩とかドストライクだし。ストライクすぎて、ここは狙い目
とばかりに却つて力んじやつて、ファールっちゃうくらい。

「邪魔はしない約束だったしね。いいいいいよ」

「解つて——」

なぜか先輩を見据える白面さん。そして、「勝負だ！」と言い放
つた。

「邪魔してるじゃん！」

「食事の邪魔はしてないが？」

「……」くっそ。一休さんかコイツ。ギャグはおもしろくないくせに、屁理屈^{トンチ}は得意らしい。屏風からトラでも出せや！　ゴラァ！

「勝負？」話についていけない先輩。

「うむ。じつは、私も孔明くんがほし——」

「はい。ストップストップ」

「む。なにをする！」

ぼくは白面さんをチョークスリーパーしながら、ひきずって廊下へ出た。大急ぎで。必死だった。だって人命がかかっているのだ。

ここで白面さんの尊い犠牲が発生したとしてもぼくは先輩を守る！

たとえ修羅になったとしても！　ああ、なんかかけーぞ。ぼく、男前だ。まるでライトノベルの主人公である。

教室からだいぶ離れたところで解放すると、

「おまえ……」

ぷはあと大きく息をつき、白面さんが言う。「オンナノコに暴力ふるうなんてひどい！」

「オンナノコねえ……。メス振り回すようなオンナノコはオンナノコじゃない！　オンナノコは包丁を振り回すんだ！」

「ガーン！」

めちやくちや解りやすいリアクションで頼れた^{くすお}。

ぼくは一步あゆみより、包容力のある笑みをつくった。あまりの微笑に彼女のところが蕩けてしまわないか心配になるくらいに素晴らしさ（アッサム）で、華麗にも呼びかけた。「で、白面さん」

「む？」

「黒紐先輩が境界例だって識ってたよね？」

「ああ……でもさ……」

「でももへったくれもない！」

ぼくはぴしゃりと言った。

先輩が死んだら困るじゃん。ぼくが困るじゃん！　先輩をなだめすかしつつ、最後（*セツクルのこと。挿入完了ともいう^{ゴールデン}）までい

つてからじゃないと困るじゃん！　もしかしたらぼくの人生最後のフラグかもしれないんだから。折れたら、のろう。

ぼくは真剣だった。

ぼくの思いはきちんと白面さんに届いた。

人間話せば解るのである。犬養毅は死んだけど。

「真剣なんだな……」　白面さんは深い溜息をひとつした。空気を白く染めてしまうかと思うほどの深さだった。「解った。もうやめておくよ。だから、なにか彼女にあったら言うてよ。協力するから」

「おまえ……いいヤツだったんだな！」

「私は、善人だからな」

立ち上がる。それから胸を張る白面さん。

真っ平らだった。大平原だった。サバンナだった。イボイノシシが咆哮した。それをライオンが追っかけた。背後からはハイエナがおこぼれを頂戴せんと迫る。胸を張ったところで、目を見張るべきものはなにもない。大平原は一味ちがった。アフリカ大陸は偉大だった。

「善人は麻醉ナシで腑分けとかしません」

「いじわるだな。孔明くんは」　なんだか寂しそうだ。

「ギャグキングだからなあ」

「そうか。うん……。ギャグキングだもんな。ギャグキングは恒久平和を実現しなくっちゃな……」

白面さんはネコミミ帽子をいじった。それから、短めのスカートを軽く叩くと踵をかえし、

「残念だなあ」

と言つて立ち去った。

とりあえず、一難は去った。

白面さんのちっちゃな背中がひどくちいさく見えた。廊下の幅が異様さをもつて巨大化していた。廊下がぐにやりとまがったかのよくな錯覚に囚われた。するといつのまにやら、彼女はいなくなっていた。

罪悪感がした——気がしなくてもないような気がしなくてもなかった。

四

「おまえはッ！ ゴミ箱を孕ませたいのかッ！」

闖入者はいつもとつにやってくるから、闖入者である。そのようなやからに気を遣う必要性など皆無である。だから、ぼくはぞんざいに応対するわけだ。

「おつす……父さん」

部屋の隅っこのゴミ箱をビシビシと厳しくも指差しつつ、父さんが怒鳴った。「なんだこのティッシーの山は！ まるで富士山の雪化粧のように神秘的にバリバリじゃないか！ 野口健に怒られるぞ！」

「意味が解らない」

「父さんはな……」酒瓶片手に問答無用でぼくの部屋に入ってくる。足取りやその風体ふくめ、完全にアル中のそれである。

こんなのがぼくのオヤジなのだから、まったくイヤになる。息子が非行にはしつてないだけ喜んでほしいものである。まったく、やれやれである。肩をすくめて、手をうえにして、やれやれである。それから溜息をするべきなのだが、ぼくの心中はおだやかではないので、

「かつてにはいつてくんない！」

「なんと冷たい。あたかも液体窒素のようだ。そうか、反抗期かッ！ そうなんだな。そこで軽やかに、父さんのパンツといっしょに洗った下着なんか着たくないっていうんだな……。俺は悲しいぞ」「そういうのは娘だろう！ クソオヤジ！ くそして寝ろ！」

「はて。俺には娘しかいなかったはずだが？」
すっとぼける父親。

「モーロクしてんじゃねえよ！ この、アル中！」

「なんだと、オナ中！」

「解ってんなら、かつてにはいつてくんな！」

「息子とのスキンシップだ。それに俺はアル中じゃない。ウイスキーのブレンダーだ。ま、職業病さ」

んなバカな……。

日本中のブレンダーが発狂するぞ……。

毎日朝から晩までウイスキー飲んでいただけではないか。ぼくは反駁しようとしたが、さきに父さんが言った。

「おまえ……さいきん、カノジョでもできたか？」

ドキッ！ 父と息子のラブ話！ ポロリはないよ。

あまりにはつきりうつきりと指摘されてぼくはたじろぎ、焦ってしまっていた。声が裏返っているのが自分でも解るくらいだ。

「で、できてないよ！」

「じゃあ、とりあえずソープいけ」

「十七の息子にそんなもんすすめんな！ あんたは北方兼三か！」

「ほら、やっぱりできたんじゃないか。うん。俺はおまえが魔法使いになるんじゃないかと心配だったんだ」

要らぬ心配である。

ぼくはもうすぐ魔法使い見習を廃業する。童貞ペンギンとは違うのである。大人の階段を登るのである。男だけど、シンデレラな生活はもうたくさんだ。シンデレラももうたくさんだけどね。

それに、ぼくという息子があるじてんで、この目の前のアル中も童貞ではないわけである。父さんにできてぼくにできないはずはないのである。まあ、ぼくのばあいはだれでもよいというわけではないのだけど。

望むべきは、まず巨乳。

これはゆずれない。

でっかい乳房は古代から人類が囑望してきたものである。土偶とかみてみれば、まさしく巨乳。

男はおっぱいが好きなのだ。いいや、だい好きなのだ。おっぱい

のためなら死ねる。よく考えてみたまえ？ 貧乳がすきということも巨乳がすきということも、あまつさえ超乳がすきというドヘンタイまで、とどのつまりはおっぱいがすきであることに違いはない。博愛主義ならぬ博乳主義がそこにはあるのだ。

つぎに、くびれた腰。くびれがないとか、寸胴鍋とかまずごめんである。なぜ女性の腰がくびれを持っているかというと、挿すがわが両手でささえやすくするためなのだ。なぜなら、霊長類というのは基本的にバックスタイルなのだ。よって、幼児体型とか用事なし。

そして、あるていどひきしまつていなくっちゃならない。ガリつてるのはNGだ。むちむちしているくらいがよい。ぽっちゃりじゃないぞ。むちむちしてるかんじ。肉感的でればよい。

「でもな、孔明。気をつけるんだぞ。異性とは、異常性欲の略なんだ。これは、国民体育の略が国体なのと一緒になんだ」

「イミフ」

「まあ、カノジョができたなら、ゴミ箱を孕ませる作業はやめるんだ……。おまえの部屋な、タコ焼きくさいぞ。なんというか、B級グルメ的香ば——」

「帰れ……」

「邪険にするなよ。だいたいなあ、世の中の料理でA級といえるのは母の味だけなんだぞ」なにかいいことをいつているつもりなのだろうが、父は得意げである。

「で？」

「いいものがあるんだ」父さんはにんまりとにやけるさまをぼくに見せ付けるといいうラっとする行爲をした。それから、父さんは酒瓶の底をなぞった。「デートといえは遊園地じゃないか」

「どこからだした……」

「さあ？」むかつくオヤジだ。「まあ、いつてこい」

父さんはぼくの肩をつれしそんな表情でばんぼんした。なぐりたかった。

けれど、DVなんてしたくない。ぼくは好青年なのである。

「みなさん。捜査本部の山田花子警部補です。今回の事件は、私のコークンがなぜモテてしまっているのか？　ということですよ。」

おかしいです。じつに奇怪。私の幼馴染としての経験と長年の観察からすれば、彼は間違いようがないほどの非モテです。間違いの起こしようがないのです。そうです。私以外にモテるはずがないのです。

残念な顔、残念な財産、残念な脳味噌、残念な運動神経、すべてが残念、残念！　です。残念づくしのバーゲンセールなのです。つまり、モテたことの理由というのは、そのじつ、どうしようもなくしょぼく、しかし神をも恐れぬ強大ななにかが働いていると考えるべきでしょう。これは神々への冒流行為です。もちろん、私がもっとも冒流されているのはいうまでもありませんが」

ナギは花子へとジト目を向けつつ、言った。「妙なカメラ目線だなにを言ってるの？　おかしくなっちゃったの？」

花子は、さもとうぜんといった態度で友人のつつこみを右から左へ受け流す。受け流しながら、右手でささげもち、自分の顔面までかけたデジカムへと視線を注ぎつつけるのは忘れない。

「みなさん。二ページを開いてください。《ぼくは占い師から運気の向上するというクスリをもらった》と強調符合つきでかかれていますね？　強調符合ですよ？　あやしい。じつにあやしい。あやしすぎてあたまの毛がアフロになりそうですね。」

これは伏線に違いありません。間違いありません。なんという、アコギな伏線！　事件解決の糸口いとですね。本件はあんがいとカンタンなものかもしれませんね。蓋をあければ、そのなかみはからっぽの宝箱。そんな気がひしひしとします。それでは、私は捜査に向かいます」

「捜査って……どこへ？」ナギにジト目をやめる気配はない。

「占い師を捜すにきまつてるじゃないの」

「いつてらっしゃい」

ナギは手をぞんざいに振ろうとし、

「あんたも行くのーッ！」

強引に両手にかかる、お縄。

身体がひっぱられた。

花子の強引さをイヤというほどに熟知しているナギは、彼女にひきづられるがままだった。彼女は思った。ああ、厄介だなあ。と。

ふたりは繁華街にやってきた。

シャッター商店街と揶揄されることうけあいなそこは、薄暗く繁華街とよぶのはおこがましいほどの陰気さにあふれていた。ピンクチラシだけが紙ふぶきのように道路を舞い、街路を錯綜している。かたや逆説的にこの雰囲気こそ、占い師が出没するには最適と思われた。

目的の占い師はすぐに見つかった。

シャッターのしまった商店の軒下にちいさな机を置き、水晶を胸のまえにしてパイプ椅子に座っていた。悲壮感たどよう青白い顔。昼間の商店街にはふつりあいな黒のフードすがたといい、いかにも絵にかいた占い師だった。

さっそく花子が話しかける。ふたりは二言三言ことばをかわした。「あんたも運氣向上の霊薬がほしいのかい？」占い師が言った。

「そうそう。運がつくのが」

ナギはめがねの弦を押し上げた。反対の手のさきで花子の脇腹をつつきつつ、小声になって、

「あやしいよ。めっちゃくっちゃら、あやしいオーラだよ。サイババと浅原を足して二で割ったくらいあやしい気配だけど」

「そりゃ、あやしいのがご利益があるってもんよ。私も妖怪アンテナがびんびんだよ。たちまくってやばいね。これは！でもね、識ってる？ ねずみ講で早く始めたヤツは儲かるの」

花子は自信満々に言う。孔明をモテモテにさせた秘薬なのだ。

ふつうの感覚なら、そのご利益など疑うのがスジである。非科学的にもほどがある。花子は占いなんて信じていなかった。

――が、そびえたつ現実と事実が彼女を惑わせてしまっていた。非モテであるはずの幼馴染に効果靨面だったクスリなのだ。どんなヤバイブツなのか識れたものではないのだが、彼女にはほんものと思えなかった。

ナギが言った。「ねずみ講って関係あるの？」

「この世で一番儲かるのはねずみの商売なんだよ」と花子。
「ハア？」

「じつは千葉にある遊園地とか、黄色いねずみとかさ。どっちも著作権の問題でいえないけど」

「そうなんだ……で、はやく買えば？ その霊薬」ナギはなかば面倒になっていた。この友人にかかわるのが。

花子は悪い子ではないのだけれど、アホなのだ。

アホのあいてをするのは疲れる。

花子はふふんと唸った。「モチのロン」

意気揚々と霊薬をうけとろうとすると、

「五万円になります」占い師が笑った。

「ナギちゃん」

ぐるりんと背後のナギをふりあおぎ、

「ん？」

「こいつ、詐欺師」

ビシッと人差し指をつきたてて指摘する。

その顔は敏腕検事をおもわせるしかつめらしさに満ち満ちている。

「ひどい！」声が裏返占い師。

「じゃあ、いこうか。捜査は振り出しだ」

山田捜査官はむずかしい顔をした。

ナギは呆れた顔をした。

「よいこのみんなは、強調符合に騙されちゃいけないぞ！ おねー

さんとの約束だぞ！ ぜったいだぞ！」
「だから、カメラ目線……」

カーテンのしまったワンルームには陽光がわずかししか届かない。もともと立地がよくないせいもある。日照権的には完全にアウトだろう。灯のすくない部屋は、木目調のフローリングは灰褐色にすら見えた。

ぎしぎしと金属同士がこすれる独特の音がする。軋むスプリングじみた音色はやや不快感を呼び覚ます。

六畳間にぼつねんと置かれたソファにしどけなく座りつつ、氷柱は壁際の年代もののテレビへと視線をそそいでいる。

てっぺんにアンテナをのつけた、ダイヤル式の赤いテレビジョンは電源はついておらず、ブラウン管に光はともっていない。沈黙しているスピーカー。もとい、コンセントじたいが抜けていた。灰色の、なにも映さぬガラスを彼女は呆然と見つめているだけだった。まるで意味がない。

不意に、氷柱が口を開いた。

彼女はゆっくりとした口調でよびかける。

「なあ、オービチエ」

傍らをみやる。

オービチエと呼ばれたそれは、黒いスフィアだった。

なんの原理でそうなっているのか検討もつかないが、中空にブレることなく泰然として浮遊している。口もないというのに、ボーリング球じみたそれは応えた。ぎしぎしと唸りながら。「なんでしょうか？」

「我らヴォールピの歴史とはなんだ？」

低いが穏やかな声音だ。「とうとつな質問ですね……。しいて表現するとするならば、流浪の歴史でしょうか？」

「何万年こうしてきたのだ？」

「解りませんね」

「なあ、飢えたものは、どうしても糧を得なくてはいけけないのか？
老いた獅子はひとを襲うという。ひとはまずいんだそうさ。でも、
老いた獅子はジャッカルを狩るちからも、ハイエナをけちらす覇気
もない。だから、ひとを食う。いいのか？ それで？ 百獣の王は
それで満足なのか？」

「と、いいますと？」

「襲い掛かってくるわけでもないのに、窮鼠はネコを噛まねばなら
んのか？ 窮鼠がカピパラであいてが子猫でもいいのか？ 成り立
つのか？ それは窮鼠なのか？ たたしうしよう憔悴しているだ
けで」

「おつしゃっている意味が解りませんが？」黒い球体はぶるつとふ
るえた。困惑しているらしい。

「我らが故郷を追われたのいつだ？」

「淡々としてオービチエは応答する。「標準歴一七六五年です」

「私たちは、なにかを忘れていると思わないか？」

私は故郷タルティーンを識らない。私は生まれてこのかた、地球
に派遣されるまでずっと暗い舟のなかだったからね。世界はことさ
らに狭かった。いつもエンジン音がした。そして、自由意志もなく
テンプラーたちに導かれるままだった。

スピーシーズ

彼らの言葉は絶対だ。おなじ種だというのに。彼らはマシンでも
ないというのに。盲目とは恐ろしいな。私は歯車なのか？ 取替え
可能なのか？ いくらでも子宮でつくればいいのか？ そして――
私が雌性なれば……」

「そんなことをいつてはいけません。処罰されます」黒い球体はや
や声をひそめて、たしなめた。けれど、氷柱はとまらない。

「考えてもみる。」

そのテンプラーも果たして古の教えをきちんと受け継いでいるの
かもあやしいじゃないか。有機体は三年で完全に構成する物質が完
全に入れ替わるのだ。記憶など一日であやふやだ。脳はファジィだ
よ。ファジィだからこそこの世界を寛容に把握できている。だけど、

長所はときとして弱点になりかわる。

やっぱり、忘れていたものがあるんだよ。なあ、オービチエ。あ
るだろう！」

「さあ……？」

「おまえは識っているはずだろう？ おまえは死を識らぬマシンで
はないか。なあ、オービチエ。タルティーンはどんなところだった
？」

「地球に似ていましたよ。海面面積は多かつたし、サイズもやや大
きかつたですけど。高等生命はごくむ環境というのは往々にし
て卑近するのでしょうか。じっさい、あなたはホモ「サピエンスと
見かけ上の差はないですから。

宇宙の意思とまではいいませんが、分子原子の構造が宇宙に汎的
ならば、そうなることは必然でしょう。故、珪素生命の発祥には、
なにがしかの問題点があるものと思われますよ」

「そうか……」氷柱は深くうなづく。「衣食足りて礼節を識る。そ
れはいい。けれど、衣食がなくても笑いとばすことができないだろ
うか？ 不可能だろうか？

私はそうは思わない。

飢えて死ぬとしても、笑って死ねばいいではないか。醜く生き
ながらえることにどんな価値がある？——そう思うのだ。我々は
種の保存に固執するほど低俗ではないはずだ。きつと、万年の孤独
と閉塞が私たちを硬直化させたんだ。啼かぬなら啼かせてみようホ
トトギス。おもしろくない世をおもしろく。あらためんとする精神
のないぬけがらほど滑稽なこともないよ」

「つまり？ 我らヴォールピには笑いが足りないか？」

「そうだ！ そうなんだよ。さすがじゃないかッ！ おまえはよく
解っている。だてに長年の叡智と知識をもっているわけじゃないの
だな！」氷柱は目を輝かせた。爛々とした双眸がオービチエへと熱
い眼差しを与える。「ちよつとまえにな、とてもおもしろいギャグ
を聞いたのだ。あれは絶品であつた。まるで雷にうたれたかのよう

な——、電撃が走ったかのようだった。

私は派遣に際し、地球の歴史や社会風俗は学習したが、シリアスすぎた。私はもっと俗的なことを学ぶべきだったのだ。だから、あの日以来、私はテレビを見ている。深夜の——」

このまま放置していると、こちらの相槌など関係なく、話が延々長くなりそうなのでオービチエは横槍をいれた。

「どんなギャグだったんですか？」

氷柱は身振り手振りをまじえて、熱心にオービチエへ説明した。孔明のウォールギャグを説明してやった。白熱していた。彼女は真剣だった。電撃がはしったみたいだったということばにウソ偽りなど微塵もなかった。しかし、

オービチエはなにも応えず、ぶるつとふるえただけだった。

球体の反応などおかまいなし。氷柱は続けて、

「ギャグ。そう、ギャグが言えればきつと私たちも少しはいい感じになる。と、思うんだよ。」

笑いは世界を救う。私たちの狭い世界を救済するんだ。どうしようもなくなってしまった閉塞感、悲観的な精神のうずまき、そういうものから脱却することができはすなのだ。もう新しい郷里を捜すなどという蒙昧な考えを捨てるだろう。なあ、オービチエ。そのところをどう思う？」

「はあ……。そこまでギャグが大切だといおっしゃるなら、まずはあなたが実践すべきですよ。いいだしつぺが船頭になりませんかねですから、このサイです。——なにか言ってみては？」

考えること五秒——、

「うんこ」

「あなたは小学生ですか！ そんなのギャグにもなってますんよ。やはり——単にギャグだと間口が広過ぎましたね。ここはもっと的を絞るべきですね。では、一発ギャグとかどうでしょう？」

「一発うんこ」

「もつと——ひねって」

「ひねったっんこ」
「……」

「まずいよ。花子お……」
「なに言ってるの！ ナギちゃん」
「こんなデバガメ……よくないってッ！」
「事件は会議室でおこってるんじゃない！ 遊園地でおこっているのだ！」

と、まあ、ふたりは遊園地に来ているのである。
電車で三時間というすばらしい遠出であった。こんなに遠くまで出張したのは中学の修学旅行以来のことなのではないか。

花子は貧乏性まるだしのなさけない顔をしながら財布を開く。なかみを数える。嗚呼……夏目さんが券売機にすわれていく光景を思い出すにつけ鬱が入る。電車賃だってバ力にはできないのだ。

「事件って……」

「これは重大事件なのだよ」

花子は鼻を鳴らす。

「ひとの恋路を邪魔するやつはウマにけられて死ぬよ？」

「ウマなんぞいないからだいじょーぶ。牧場とか臭いからきらいだし。ウマはかわいいとは思うけどね」

「じゃあ、現代風にアレンジして、車に轢かれて死ぬよ？」

「だいじょぶっていつてるじゃん。だってこれはオフィシャルな活動なんだから。公認されているんだよ」

「え？」

「さつきナギちゃんにチケットわたしたよね？」

「うん。だから、いまから代金を——」

ナギは肩掛けポーチのチャックを外そうとした。
それを花子が制止。

「払う必要ないよ」

「なんで？」

「これはね……じつは、コーくんのお父さんからの捜査依頼をいただいているのだよ。ナギ捜査官。だから、チケットももらったわけですよ。うん。よって払う必要はないよ。どうしてもっていうのなら、身体で払っても……」

「じゃあ、払わない。茂木くんのお父さんに払う」

「ちえー」花子は口をとんがらせた。すぐさま真剣な顔になる。「男には第二の脳がある。ゴジラも股間にあるが、人間もそうである。しかし、それはオスのみにある。男性の犯罪は、女性にくらべて十代後半から二十代後半にかけてが多い。それは性的な欲求のなせるわざである。と、コーくんのお父さんがいったわけよ」

なんか始まったよ……とあたまをおさえつつ、ナギはさきをうながすことにした。「で……？」

「第二の脳は強力無比である。権力構造的には国会いじょうに各省庁が実験をにぎっている日本の政治機構のようなものだ。だから、間違いがおこるかもしれない。俺は息子のムスコ——すなわち孫——が理性的であると望むが、現実はつねに悲観すべきだ。もしも、孔明が暴走したばあいボコボコにしてみらいたい」

鞆からバールのようなものを取り出す花子。

バールのようにいてバールではない。なんだろう？ 気にはなつたものの、ナギは追求しなかった。

「……」

「ほら、ちんたらしてると置いてかれるぞ！」花子が走り出す。

眼前に捉えているのは、孔明と黒紐のうしろすがた。雑踏のなかにまじっていても、それと解る。縄架黒紐はまれに見る美人に相違なく、かたや孔明は花子にとって見慣れた存在だから見間違いはない。

ふたりは口惜しいことに手を繋いでいる。
ぎゅっと繋いではない。

じつに初々しいことに、そつとあいての掌に自分の掌を重ねているのだ。まだまだ付き合いはじめて日が浅く、しかし着実に両者のところが接近していることを、その光景は証明していた。

パーペキすぎて目に毒な青春模様である。

目が目が！

まさにムスカル。きゃきゃうふふといった甘い吐息がこちらまで空気を媒介にしてやってきて、ウボワーとなりそうである。視覚だけではなく、嗅覚にも大ダメージ。精神的攻撃力も生半可なものではなかった。

花子の両眼が赤くきらめく。そして、ダッシュ。ロケットスタート。

砂埃をふきあげるかと思うほどの、花子の疾走っぷりを啞然として見ていたナギだったが――、

「あ、まってよ！」

あわてて追いつがった。

「まずは昼食のようすな。ナギ捜査官」

「……」

「ふたりがさ、なんていつてるかきこえる？」

花子は耳が悪いようだった。ナギにはきちんと会話の内容が聴こえている。ちゃんと耳掃除しているんだか――。彼女はハアとわざとらしく嘆息してみせた。しかし、花子は催促する視線をよこし続けているだけで変化なし。

黙っていてももちろんよい――のだが、あとあとが怖い。

花子のことだ、じつはきこえていることがバレたしゅんかん、『ワキガ伝説』とかいうあだ名をつけてくることだろう。そんなのイヤだ。『ワキガ女王』くらのあだ名であるなら許せるが、＜ワキガ――そして伝説へ――＞なんてなりたくない。しぶしぶとナギは応えることにした。

花子にだけ聞こえる程度に声量をしばるもの忘れない。ナギは優

等生的だった。

「先輩曰く『おなががすいたよ』。茂木くん曰く『じゃあ、マツクにしましょう』。先輩曰く『いいな。マツク。いこういこう』」

「子曰く、君子は道を謀りて、食を謀らず」

ナギはふと疑問を覚えた。口にする。「ところで、先輩ってあんな話し振りだったっけ？　なんか砕けてるような気がするんだけど？」花子に反応がない。「ねえ、花ちゃん」

険しい表情で花子、

「我曰く、驚天動地なり」

「もうそれいいから……。それに、それ別に孔子のことばじゃないし……。曰くとか漢語とか使えばいいってもんじゃあ——」

「じゃ、マツクへさきまわりしようか」

「はいはい……」

なるだけほかの席から死角になっているボックス席を選んだ。ふたりはそこに陣取った。ややしてから、黒紐と孔明がやってきた。どうやら、テイクアウトではなく店内で食すようだ。花子はちいさくガッツポーズした。

広場などでは、遮蔽物がすくなく盗み聞きには不向きだ。雑踏もある。店舗のなかでも雑踏はあるが、遊園地のファーストフードの回転率は早いということを斟酌した。ごみごみして、こみあっている店内のほうがいい。まあ、たぶんしておそらく。

「ナギちゃん。ちゃんときいててよ。委細漏らさず、ね。あ、シヨウベンも漏らさないでね」

「なんか、花ちゃんさ……茂木くんと似てるよね」

「え？　どこが？」

「言動のすべて」

「心外だなあ」花子はマツクチキンを齧った。

ナギは耳を澄ます。

雑踏のなかから、ざわめきのなかから、ふたりの音声だけをひろう。

黒紐先輩の声は特徴的だ。

どこが？　といわれて素直には返答できないけれど、同年代や世代の近い若い女性の声のなかにあって、彼女の声はどうしてだか目立つ。育ちとかの問題なのか……どうなのか、ナギには解らなかった。けれど、彼女の声を拾うという実務的観点にたつと有意なことは確かだった。反面、孔明の声はききとりづらかった。ほかの男性客の声との区別がむずかしかった。

ナギは両耳に人差し指をつつこんで、ほじりほじりして、

「先輩曰く、『私ね、はじめてなんだ。ねえ、茂木くんのおすすめというか、そういうのってなにか？』。茂木くん応えて、曰く『そうですねえ——。じゃあ、シャカシャカしましょう。シャカシャカ』」

「バカじゃないの……」

「先輩曰く、『シャカシャカ』」

「バカじゃないの……」

「仲いいみたいだね……」

「バカじゃないの……」

なぜだか解らないが、不穏な空気がするのだ。

なんだろう？　背中につきささる針。

それも見えない針だ。

視線。

殺意とまではいかないけれど、かなりの反感の情と敵愾心がこもっていることが容易に推察できてしまい、どうしようもなく不安になる。どろどろうずまくような気配が背後より、する。

「どうしたの？」と先輩がいった。

杞憂かもしれない。思い過ごしかもしれない。

先輩と遊園地にきているというこのハッピーな事実が却ってぼく

を不安に駆らせているんじゃないか？　と思った。ぼくと先輩は見た目的にも、財産的にも、成績的にも釣り合わない（セックスが釣り合うかは未知数）。どこかでぼくは背徳を感じていやじゃないか？　けれど、ぼくの不安で先輩を、不用意に、不必要に心配させてはいけない。ぼくはとりつくろった。「なんでもないですよ」

「もしかして……尾行されてるかな？」

まさかの同調。

不安からくる思い違いではなかったようだ。

「え？」

「え？」

「尾行？」

「うん。私、きょうね。パパにないしょできちゃったんだよ。もしも、バレているとしたらパパのSPが尾行してるんじゃないかって

……」

「ぼく——殺されませんよね……」

揺り籠から墓場までをサポートするA社のご令嬢なのだ。先輩は、もしかしたら、

とか考えちゃう。

「安心していいよ。うちはPDWとかもつくってるし」

「安心できません……」おもくつそ銃器メーカーじゃないすか……。しかも個人用ライフル。PDWっていったら、民間軍事会社なんかが愛用しているらしいじゃないか……。ってことは——、

「遊園地じゃ撃たないよ」

「遊園地じゃなきゃ撃つんですか……」

「撃つかも……」

おぞましい。

なんて淀破りなんだ。

たしかジャペーンでは銃の携行は禁止されているはずではなかったか。銃刀法違反！　銃刀法違反！

訴えてやる！

「ちよつと待てよ……」

ぼくはあごに手をあてた。

お解りのとおり、あごに手をあてる行為は考えるポーズだ。ロダンのポーズだ。首からうえだけ限定だけど。

「なに？」

「そのSPも佐藤さんなんだよね？」

「うん」

ぼくはガバつと背後を振り返った。

そして、おらぶ。「さーとーさーん！」

ビクッと震える人翳。

あたりだ。

佐藤さんと呼ばれてしまい、うっかり反応してしまったヤツがSPだ。日本では点呼の習慣がある。小学校から高等学校まで点呼の刷り込みがなされる。そしてパブロフの犬のように反応してしまう大日本人ができあがるのだ。

まさかこつちからよばれるとは予想だになかったに違いない。不意打ちとは、いついかなるときも有効打なのだ。戦国武将だって不意打ち大好き。でも一步間違つと「卑怯者！」っていわれるから用法用量には気をつけるんだぞ

「あ……」

人翳と先輩の目が合った。あいては気まずそうな顔をする。

これで確定。ビンゴだ。

赤の他人が先輩に対して気まずそうな顔をするはずがない。知り合いだからこそ、バツが悪いのだ。

けど、まさかこんなチャチな作戦で尾行を看破できるとは思わなかっただけに拍子抜けもいいところだった。こんなオマヌケなSPを雇っていて、はたしてだいじょうぶなのだろうか？ とか心配になっってしまうが……まあしかし、結果オーライである。終わり良ければすべてよしの精神。

ぼくを置き去りにして、佐藤さん（もちろんだが運転手の佐藤で

はない)のところへ先輩は向かった。

「佐藤。どうしてつけてたの？」先輩のいいざまは手厳しい。それもそうだろう。デートをかってに尾行されていたのだ。ぼくだって気分が悪い。先輩ならもつとそうだろうと思った。

なにせ、ぼくのばあいは直接的に佐藤さんとの関係性はないが、先輩のばあいは使用人なのだし。

「お父さまが、お嬢さまになにかあったらことだと……」あたまをかくコワモテのSP。もちろんスーツ姿。かんぜん到场違い。

てか、遊園地にスーツできているという、この場違いっぷりできづいてもよかったような。なんていまさらながら、思った。

「いいんです。そんなことは……どうせパパは……破談になるのがイヤなんでしょう？ 識っているもの。そんなこと。私がなんにも知らないって思ってるみたいだけど。それに、私の心配というよりは——」

「滅相もない……。お父さまは純粹に心配なのです。それが親心というものではありませんか」

「ほんとうに？ ほんとうにそうなら、一人娘の自由くらい……」

「おことばですがお嬢さま」

「なに？ 佐藤」

「お嬢さまは一般人ではないのです。どこの馬の骨とも解らないオトコといっしょにいるなどと……お父さまは、さぞや辛いおもいをしているに違いありません。それ相応のあいてというのが——」

「じゃあ、なんだっていうの？ 私は。貴族？ 華族？ それとも皇族？ なんなの？ 一般じゃないってなんなの？ 特殊だったことなんですか？」

「いいえ……ですから、そのような下賤の——」

先輩が激昂した。

わなわなと拳を震わせている。顔はやや赤めいている。くちもとをきつと引き結んでいる。

しばし見詰め合うSPと先輩。

先輩の堪忍袋の口火がきられた。

「茂木くんの悪口は許さないよ。佐藤その一〇七番。あなたをクビにするようにいいいます」

「お嬢さまッ！」

「ほうつておいてください！」ぼくの手を強引にとると先輩は走り出す。「いこう。茂木くん」

SPは追ってこなかった。

それなのに、背中につきささる視線の針は消えなかった。いったいぜんたい、どういうことだ？

「気分転換もいいものですよ」とオービチエが言った。

彼はいま、氷柱のむねのまえにだかれている。

まるでお気に入りのお人形さんを大事にだいているようだった。

彼女は背丈がちいさかったし、ネコミミ帽子がこもらしさをかもしていた。もちろん、その表情と顔立ちをみればけっしてロリイではないことにきづくのだが……。

「邪魔なものがなくて快適ですね」

空中を舞う黒い球体。

重力がいざなう。

きれいな放物線が描かれる。

「うひいいいい」

どしゃ！

アスファルトにめり込む黒球。

道行くひとが妙チキな音に反応する。

「氷柱さま……」

衆人環視のなかにあつては、オービチエは浮遊できない。そんなことをしてしまつてはあやしまれるのは必定。だから氷柱に放り投げられるがままだったのだ。彼としてはこんな無体な扱いをされる

いわれはなかったのだが。

氷柱はわざとらしく左右を振り仰ぎ、

「ここにボーリングピンがないのが残念だ。嗚呼、残念だ」

「あるかもしれませんよ。なんとはいっても、ここは遊園地ですから」

「そうか。さすがは遊園地。わざわざごみごみしい場所に出張るだけの価値があるということか」

「そうですよ」

氷柱はむうと唸った。

「バカと煙は高いところが好きだという」

氷柱の視線が向かうのは――、

言葉を発しない彼女のいわんとするところをオービチエが代弁する。「観覧車ですか？」

「気分転換になるかな？」

「どうでしょう。こういうときのコースというのがあるんですよ」

「コース？」

「おフランスなお料理みたいなものですよ。人間というのは、気にするものです。作法を。つまりです、さいしよはジェットコースターというのが暗黙の了解という人類の不文律があつてですね――」

「のろうか。慣性の法則の実験がしたい」

そいつって氷柱はオービチエを拾った。

クライマックスが近いことを花子は悟った。

西の空が赤い。

からすさんが、おうちへかえろつよ、っていいだしそうだ。まだカアとも鳴いていないけれど、時間の問題だろう。

閉園はまださきだが、帰路の所要時間をかんがえればそろそろお開きになるころあいと見ていいだろう。このまましつぽりとホテル

へいく計画でもない限りは……。いかんいかん。コーくんはそこま
でアクティヴじゃないはずだ。と花子はかぶりを振って、自身の考
えを否定する。

いまのところ尾行はバレていない。

肝を冷やす事件はあった。

なぜだかコワモテの男が黒紐に糾弾されていた。なにごとだった
のか解らないけれど、バレずにすんだのはさいわいで、任務の続行
にはなんら支障なし。まあ、気にもむ必要はない。

露店のみやげ物売り場の影から、花子とナギはようすをうかがっ
ている。

クライマックス。

臨界点。

最後にもりあげる場所。

夜が近い。

夜景。

ふたりだけの空間。

アベックが遊園地で最後におもむくさきといえ——、そんなの
決まっている。ひとつしかない。

案の定、黒紐と孔明が向かうさきは、

先輩はかわいい。

美人でかわいらしいというのは、もはや最強ではないだろうか。
最強すぎてみんな地にひれ伏し、五体投地すべし。白旗をあげるべ
し。

むかうところ敵なしじゃないか。

どのあたりがかわいいかって？

それは、

たとえば、

レタスを落としながらハンバーガーを食べ、ぼくがそれにきづくとすねたようにプイッと顔をそらすけど、ぼくがレタスをひろつてなにもなかったかのように取り成すと、「ありがとう」と小声でいう。

その仕草がおかしいやら、愛らしいやらで、思わず、だきしめたくなってしまったが、ここぞ漢の見せ所なんである。必死に耐えた。まだぼくらはハグする関係じゃない、と思うし。

何万回でもいうが、ぼくはジェントルマンなんだからね！

ちよつとしたハプニングもないではなかったが、園内の水族館もいけたし、半分開らの遊具は制覇したしでけっこうそれなりに順風満帆だった。

先輩はジェットコースターがすきだった。

さすがは屋上から飛べるか飛べないかとかきいてくるだけのことはあった。

意気揚々と最前部にのりこみ、さえぎるものがない風圧をうけながら、「うひひひひ」と奇声をあげるのだ。

さいしょこそ怖がっているのかと思った。

泪も流しているんだからふつう勘違いすると思う。恐怖心で涙してしまったもんだって、思うじゃない？　そこで、そつと手を差し伸べるのが正しい作法。

が、奇声をあげるのは怖いからではなく、どうやら楽しいらしいのだ。一風変わった楽しみ方もあったもんである。

先輩はいたく、ジェットコースターをお気に召した。

なんてことはない、ふつうのジェットコースターだ。一回転もない。スペースワールドにあるような木造のレールというわけでもない。逆さぶり状態でのりこむわけでもない。でも、気に入ってくれたのはいいことだ。

けど、

おかげで三回ものるハメになってしまったのは計算外。

こっちとら、すでに二回目の時点で憔悴しているのに、先輩はの

ることにハイになっていき、しまいには「無限のかなたへさーいくぞー」とかいいたす始末だった。なぜバズ＝ライトイヤー（著作権的にやばい）？ と疑念をいだくも、つつこまなかった。つつこむのはアワビに似た穴だけにしたい。

四回目もこなそうとする先輩をぼくは必死でとめた。

先輩は不服そうに、「終わりにするの？ まだまだいけるよ」と言った。ぼくは断乎として「いけません」と言った。

「イケズ」

かわいかった。

そんなこんなで、ぼくのなかにあった先輩のイメージが音をたてながらガラリಂಗーリンと瓦解していった。

きつとぼくのなかの先輩イメージの構造設計をしたのは姉齒一級建築士に違いないのである。まったく、きちんとやってよね！ 構造設計。ちよつとした余震でもゆらいじやうよ。

けれど、イメージが壊れても、いまのいままでいっていた先輩への諸々の感情が悪化するということではなく、むしろギャップ萌え？ にちかい感情に囚われた。どうやら、ぼくは恋しているらしい。なんてこつたい。

ぼくはとんでもないことにきづいてしまった。

革命だった。

天変地異。転地無用。

なんとなく成り行きでこんなことになっているが、その成り行きがいかにともしがたくうれしい。

やっぱり、ぼくはおかしい。

これが恋は盲目ってやつなんだろうと思った。たぶん、初恋だ。十七にして初恋。ちよつと遅いだろうか？

水族館では、先輩らしいというのも変かもだけど、ちよつとネガティブな側面が顔をだした。リストカッターとしての先輩が。

それはちょうど、ペンギンコーナーにさしかかったところだった。こまっしゃくれた白黒コントラストの鳥が流氷を模した一室を右

往左往していた。とくとんどりはねたりすることもなく、ぺったんぺったんと腰をふっていた。昼食を済ませてオネムなのか、ごろんと床に横たわっているヤツがいた。死んでいるだけかもしれないかった。

「ペンギンって可愛いよね」と先輩が言った。

かわいいの聞き間違いかと思った。

聞き返すと、

先輩は顔を横に振った。

ちよつと寂しげに眉を寄せた。

「こわくない？」

「ペンギンがですか？」

「うん」

「どうして？ あんなによちよちしてて、おいしそうなのに。串焼きにして食べたいくらいかわいいですよ」

「おいしそうかな……たしかにマルつとしてて……」先輩は困った顔をして、「って、そうじゃなくて……」

のりつつこみする先輩にニヤけそうになったので、

背筋をぴんしゃん。

「どこがこわいんです？」

「みんな一緒に見えない？」

「へ？」

「ペンギンのコロニーを見るとこわくなるんだ。ぜんぜん区別がつかないから。全部いっしょに見えてしまつて……。どれがどれなのか、ちつとも解らない。違うはずなのにね。まったくおなじってことはないはずなのに。それでね」一呼吸。「もしかしたら、私たちもそうなんじゃないかって思っちゃうんだよ。おおきなうねりのなかでは、だれからも私だって認知されないんじゃないか……。そんな風にかんがえると、ペンギンのコロニーを見るだけで背筋がゾクッとする」

アクリルガラスごしに数十匹のペンギンの蠢きが見える。

いくつかのグループをつくってかたまっている。何ペンギンだろう？ 学名まで書いてある親切な表示板をさがしたが見つからなかった。ぼくはペンギンのコーナーに視線を戻す。

たしかに彼らは区別がつかない。

オスカメスカくらいしか解らない。

一匹のペンギンに的を絞って食い入るように追跡しても、そのペンギンがいったん群のなかに消えると追うことはできなくなった。まぎれてしまった。

そうなるやさきのペンギンを識別できなかった。

先輩の危惧はただし。

でも、先輩は拡大解釈しすぎているし、ペンギンの見分けがつかないだとかそんなことはどうだっていいんだ。重要なことはそんなことじゃない。ぼくらにとって、個々のペンギンの区別がついたところで宴会芸にだってならない。そんなことは飼育員にまかせておけばいい。瑣末。

「先輩は先輩ですよ」自分のものとはどだい思えないやさしい声だった。

「私と……ほかのオンナノコは違う？」

ここでそんな質問を……。

ぼくは返答に窮した。

自分の恋心を理解してしまったあとだっただけに、当惑は一人だひとりおった。ぐわんぐわんと銅鑼があたまのなかを、ぼくの脳みそを、その轟音でかき回した。

咽の奥できゆるきゆると胃液くさい唾が逆巻くのが解る。唾はねちっこく、はねまわった。舌の付け根にまでからんでくる。

先輩がぼくをみあげた。頬がわずかに上気しているような気がする。黒く、深い瞳がぼくを真剣に見てくる。瞳の奥に見えたのは、期待感だった。ぼくはいとも簡単に射抜かれた。

「ねえ、応えてくれないの？ 私は——私が雑踏のなかに隠れてしまったら……見つけれないの？」

ぼくは応えなかった。

先輩が両手を胸のまえまでもっていく。たわんな乳房のあいだで、両手を合わせて、お互いの指の間隙に指をすり込ませた。いまにも神への祈りをささげてしまいやしなないかと思った。

「茂木くん……ねえ……」

ことは無力だった。

ちがう――

そうじゃない。

ことはよりも有効な手段をぼくはもっていた。ただそれを実行すればいいだけだった。ためらいはなかった。

ぼくは先輩の腰へと両手を回した。

身体がかつてに動いていた。

身体はぼくの意識下をはなれた。

けれど、反するようにあたまのなかはすつきりしていた。じつにクリアーで、網膜から視神経を通じてやってくる先輩のすがたはいつにも増して鮮やかな色彩を帯びている。――ツバサのない天使がそこにいた。

「え？」

素っ頓狂な声をだす先輩。

ぼくの身体はその声をおさえるかのように、先輩をだきしめた。

人・生・初のハグであった。

先輩からやってくる芳香。いままでにない圧倒的な香^{かおり}がやってくる。鼻腔内のレセプターがパンクしそうだ。

きめ細やかな長髪がぼくの肩へとふりかかる。

まわりにいるひとのことなんか、もはやどうでもよかった。ふだんならば、恥ずかしがっただろう。できやしなかっただろう。こんなこと。――でも羞恥を毛ほども感じなかった。脳神経が麻痺していた。ただ、先輩だけを感じていた。

「どこへもいかせません」

「茂木くん……」

ぎゅう。

先輩の腕がぼくの肩へと回ってくるのが解った。

「先輩は飛ぶ必要もないんです。ぼくはなしませんから。先輩はどこかに隠れてしまいせん。ぼくがはなさないから」

「うん……」

先輩の吐息。

とてもちかい。

身体にはさまれて行き場をうしなった先輩のダブルメロン。つぶされて、転がるメロン×2。

やわらかい。

適度に、

かたく、

張りもあつた。

ブラジャーなんてまるで意味がない。ノーブラとブラの境界線などオニギリとイナリズシの違いよりもすくなかった。沖縄そばとラーメンくらいの違いしかなかった。ブラジャーは先輩のぬくもり、あたたかさ、女の色香、フェロモン、そういった諸々をまったくふせいではくれなかったのである。

ずっとこのままでいたかったけど、このまま続ければぼくの理性がぶつちぎれそうだった。先輩の肉体にこれいじょうふれいるわけにはいかなかった。腰にまわしていた両手をはなして、ほんのすこしだけを距離をおく。

先輩がぼくの背にまわしていた両腕も離れる。

それから、言った。

「それに先輩」

「なに？」

「ペンギンよりもマグロとカツオの区別が付きません」

「……もう……ばか」

雰囲気的女神がわらった。

キューピッドは矢を折っただろう。もっとも、もうぼくにそんな

ものは必要ないんだがね？

うねうねと蛇のようにのたうっているレール。

やってくるのは女性の係員。クリーム色をした短いスカートに、オレンジ色の制服を着ている。

「お嬢ちゃん。身長はたりてるかな？」

氷柱は彼女のことばを無視した。

さいわい、氷柱の背丈はジェットコースターの入場条件に届いてはいたようだった。係員は不機嫌な表情はしたが、氷柱をそれいじよう拘束しなかった。

錆のうく、なんだか頼りない階段をのぼっていくと、

「ほう。これがジェットコースター」

「プリモピアット」黒球。

「は？」

「だからコースメニューに例えたんですよ」

「あんまり大声ださないで。怪しまれるじゃないか」シートにかけるてしばし、安全バーが降りてきた。肩と腰を固定。オービチエは手提げにつめてある。足元に置く。脹脛のうしろでかつちりと。

「と、ところでこれ……あの狭くて高低差のきついレールを走るんだよね？」

「そうですよ。ちゃんと帽子、固定しておいてください」

「あ、うん」そうだ。風圧で飛んじやう。氷柱は顎紐をまわして、結んだ。「これでいい？」

「はい。——っと」オービチエの声質が低まった。「どうやら発車のようです」

低速で前進を開始する車体。

なんてことないではないか。と氷柱は思った。
レールの頂上で車体はいったん停止した。

ガクつと身体が震えたと思ったら、落下している。位置エネルギーが運動エネルギーに変換されて、車体が加速。

風防なんて気障つたらしいものはなし。風がぐいっと頭部をおしで、うしろへとひっぱられているような。

「うにゃああああああ」

「絶叫ですか？ 柄にもないで——」

「黙れ。くそつたれい！」

慣性で横滑りしつつ、落下していく手提げカバン。

「Noooooo」

「ハアハア……。り、リベンジだ……。こんどは叫ばんぞ。武士は食えねど高楊枝なんだからな」

「あれ？ 白面さんじゃない？」

氷柱は振り返った。知らぬ男が立っている。歳のころはいっしょくらいか。「ん？ あなたはだれだ？」

「俺？ 俺は冬町。冬町敦ね。白面さんとおなじガツコなんだけど？ 学年もおんなじなんだけどね」

「ひとりか？」氷柱が言った。

「そっちこそ、ひとりなの？」

「うん」

「なんで？」

「なんとなくだよ。なんとなく。そういう気分だったんだ。気分転換というものさ。あなたは？」

冬町はポリポリと後頭部をかく。

「いづらそんな仕草で、」

「ほら、俺ってこのままじゃあ、カマセ以下じゃん？ しよっぱなに名前つきで登場したわりにはしよっぱいとかさ……。だから、わざわざフルネームで自己紹介したのもさ、そろそろ出張とかないと出番がなさそうだってことなんだよ。せめて、こうカマセっぽいことくらいはしておきたいなあって」

「大変だな」

「大変だ」

氷柱は座席についた。

冬町が追ってきて、

「となりいい？」

「好きなようにすればいい」

「発車しまーす」

こんどは叫ばんぞ。誓ったのだ。

車体が最頂部へ。

降下。

風圧。

うきそうになる身体。

もちろん固定バーが身体をおさえつけているからうかないんだけど。もそもそする。身体の内奥の芯みたいな場所が。

「にゅわあああああん」

憔悴した。

発車場へまいもどったジェットコースターのカー！。

息が荒い。

こんなの——大気圏突入艇にくらべたらミジンコのようなものだ
と思ったのに、いかんともしがたい感情が臀部のあたりから徐々に
のぼってきて、背筋がぞくり、ひやつとしてしまうのだ。

「白面さん」小声で冬町。

「……な、なんだ？」拳動不審。

「ジェットコースター、苦手？」

むすつとしたようすで氷柱は質問を質問で返す。「おまえ……、

孔明くんのトモダチか？」

「そうだけど？」

「……孔明くんには黙っておけよッ！」

一目散に駆けていくネコミミ帽子。

後姿はずんずんちいさくなっていき、群集のなかに隠れて見えな

くなつた。

「ちよつと、待って！ 話は――」冬町は気づいた。「ん？ 孔明くん？ あれ、あいつ先輩とつきあってるんじゃないか？ だけ？ はて……」

なんだつたんだろう？

「黒頭巾ちゃんは言いました。おおかみさん、おおかみさん」指を左右にふりながら、花子はことばをつづける。「チャウチャウはおいしいから、おおかみさんもさぞや美味なのでしょうね」

「食べたことあるの？」

とうぜんあるべき、つつこみをナギは言つてやった。すると逆ギレ的なことに花子はお怒りになつて、

「それ、チャウチャウちゃうんちゃう？ でしょ、そこは！」

『ぶわっふ』轟音。

盛大にだれかが噴出した音だつた。

すさまじい音であつた。

「いますごい噴いた音しなかつた？」花子はナギを見る。

おどろいた顔をしながらナギ。「したね……。臍物まで飛び出すレベルの噴きっぷり……。どのだれだろう……。花子ちゃんのルラ―ダフォルオルに噴出すなんて。きつと人間じゃないね」

「とりあえず、この黒頭巾をかぶりたまえ」花子は黒頭巾をナギにわたそうとする。

ナギは花子の機先を制し、

「拒否する」

「どうしてだ！」

「だつて見るからに怪しいじゃん」

花子は唸つた。うつむ……。

「青頭巾か黒頭巾でまよつたんだよね……。ほら、黒いサンタクロ

「ス知らない？ 知らないかあ……」
「はいはい」

そろそろ遊園地をあとにしくちやいけない、とぼくは思った。
なにせ、先輩の家には門限というものが存在するのだ。
ぼくにはないけど。

園を去ることにはすこしも名残惜しさはなかった。いっぽう、先輩との時間の閉幕がちかいことはイヤだった。

ぼくたちは観覧車へむかった。

観覧車はネオンサインにつつまれていた。

卑近すると、ゴンドラひとつひとつのネオンの色がちがうことを知った。塗装はいつしよだった。全部、赤い塗装で統一されている。見上げていると、不意に黒いフードをしたふたり組みがぼくらの横合いをすりぬけた。たたらを踏む。

彼らはそうとうあわてていたようだった。なにもあんなにいそぐこともないのに、と思うほどのスピードで走っていき、あつというまに見えなくなった。

尾行しているSPにしては小柄だったので気に留めなかった。

入れ替わりに係員がやってきた。

閉園には、まだまだはいからか、アトラクション性にすぐれない観覧車にのろうとするひとはまばらだった。

ぼくたちはフリーパスを見せた。

係員はうなづくと、ゴンドラの扉をあけた。

つれだつてのりこんだ。

真向かいに先輩がすわるのを確認してから、ぼくもすわった。係員が扉をしめた。がちゃんと施錠された。

密室。

そう、これは密室。

刑事モノの殺人事件でよくある密室。

ここでぼくが先輩を殺したら、

あ——ぼくしか犯人いないじゃん。

もつとも、ぼくは先輩を殺さない。もちろん、それは物理的な意味であって、精神的な意味では殺すかもしれない。いま、ぼくはプレイボーイへの道程の途中なのだから。

とはいつつ、ふたりつきりだ。

いままでは周囲に雑踏があつたが、いまは違う。

オンナノコと密室にいる。

花子？ あれはどうでもいい。

脚をくんだ。

態度が悪いかもと思う。でも、そうしないとおちつかなかった。ぼくはどこまでいっても根源的な部分でヘタレらしい。

ふと、かかとにあたるものがある。ぼくは目を落とした。銀色のケースがあつた。座席下の、薄暗闇のなかで鈍色に照っている。だれかの、おとしものだろうか？ あとで係員にわたしていこう。拾う。

ぼくの内情などよそに、ゴンドラはゆるりゆるりと上昇していく。時よ、とまれ、おまえは美しい。なんて言つたところでファウストではないぼくは無力だ。ゴンドラと観覧車の円環をつなぐジョイント基部ががくりと軋む。

園内の樹林の先端に視線がちかづいていく。

「ねえ、茂木くん」

先輩はぼくを見ていなかった。

彼女も彼女で緊張しているらしかった。ぼくのひとり相撲ではないことに一抹の安堵を覚える。

平静をつくろい、

「なんでしよう？」と応じる。

「きょうは、さそつてくれてありがとう」

「そんなにあたたまらないでくださいよ。ぼくは一銭もだしてない

んですから。父さんからもらったんです。このチケット」

半券になった入場券をポケットから出した。

ぴらぴらと左右にふる。

「え？ お父さんは、私たちの――その……関係というか、そのあたりのこと、知ってるの？」先輩はびっくりしたようだ。虹彩がふくれた。

「ほんとうは黙っておくつもりだったんだけど……うちのおやじ、嗅覚がするどいみたいで、バレました」

「私もバレてみたいだしね……。帰るの怖いな……。先輩がぼくをみすえてきた。潤んでいた。彼女はなにをいわんとしているのだろう？ 考えるまでもない。解っている。女性が帰りたくない旨をただよわせたとき、それはインザベットのフラグであることをぼくは男性誌から学んでいる。けど、聞こえないフリをした。先輩はつづける。「いいお父さんだね。とても……」

「あんなのアル中です」

「ブレンダーなんでしょ？」

「なんで、知ってるんですか！」

「私を誰だと思ってるの？」

「A社には酒類部門もありましたね……。先輩はぼくの個人情報をあさったのかもしれない。」

「家族思いのお父さんだよ。とってもいいお父さんだ。……チケットもいわないのに用立ててくれて」

「先輩だって心配されてるじゃないですか。SPまで使って、手を回したのだって――」

ことばがつつかなかった。

いや、つづけられなかった。

先輩がぼくをにらんでいたから。

怨念めいたものや、敵愾心はうかがえない。あるとすれば、非難だった。彼女の目がぼくをなじっている。

「ちがう。あのひとはいつだって――」

おっと雰囲気の悪魔が笑うのはごめんだ。

こういうときこそ、KYに徹するべき。

ぼくはうたった。大声で。

みつつならんで団子団子」

「ぶっ」噴出す先輩。よほどおかしかったのか、はたまたツボにジャストミートだったのか、目じりに涙まで浮かべ、つづく笑いを必死にかみ殺すようにして、「恋人同士って、楽しいね」

「楽しいですか？」

「楽しいよ。とても。茂木くんはどうだった？」ぼくが素直にうなづくと、さも満足そうに目を細めた。「このまえも、釣堀楽しかったよ」

「よかったあ。やつちゃったかと、思ってたんです。とんでもないところに連れていつちゃったなあって」

「ううん。そんなことない。新鮮だったもの。あいいうばしょっていままでいったことなかったから。存在くらいは知ってたけど……」

先輩はうなじにかかった髪の毛を手櫛した。ぼくは外をみやった。

いつのまにか遊園地の景観がはるか足の下になっていた。とおくの町が見えた。「茂木くんは博愛主義者なの？」

へ？

「たしかに。ぼくは、あらゆる女性にやさしいジェントルマンなんですよ」だなんて、言いかけ、

「ジョーダン。ちょっと気になっただけ」先輩、取り繕うようににつこり。この微笑はすぐさまなりをひそめ、「私がその……手首きつてること、知ってるでしょ？」

「はい」

「あれを見せると、みんな私の前からいなくなるんだ」悲しそうに顔を伏せる。「だけど、あなたはそうじゃなかったから」

「だって……」

さあ、またしても試練だぞ！ 茂木孔明十七歳。

先輩のこころをえぐらない回答をひねりだすんだ！

脳細胞フル稼働。

全エネルギーを脳細胞へ。

チャージ！ チャージ！ ちゃああじい！ 海綿体はチャ―

ジするなよ！

「だって……解らないじゃないですか！」

「解らない？」

「たとえば、小指のないおとこが歩いていました。彼はとてもコワモテです。そしてとてもかたぎの仕事をしているような風采ではありません。そのひとつについて先輩はなにを思い浮かべますか？」

「元ヤクザ？」

「ですよ。ふつう、そう思います。」

「だけど、単になにかの事故で失っただけかもしれないじゃないですか。顔がこわいのだって単なるうまれつきで、遺伝のイタズラ。カタギの仕事じゃないって一口いったところで、日雇いの仕事をまじめにしている勤労青年だってだれが疑えるんでしょう？ ね？

確かに彼はホワイトカラーじゃないけど」

「うん」

「人間、見た目が九割っていいいます」 ぼくは咳払いした。「でも、じつさいに話してみなきゃ解らないこともあると思うんですよ。先輩のそれだってなにかの事故の後遺症なのかもしれないじゃないですか。」

「手首のきずあととリストカットを初見で結びつけるだなんて、早計です。きちんとした人間のすることとは思えません。理性的でもないし、論理的でもないし、そういう人は差別主義者です。」

—— もつとも、いまはそうじゃないんだって解ってます。なにか家庭の事情かもしれないっておおよその予測もしています。もちろん、そこに深入りはしませんよ。ぼくがなにかできるとしても先輩についてのただですから。」

ちゃんとした性根をもった人間ならッ、なんの理由もなくリストカットなんかしませんよ！先輩とつきあいはじめて……そういうこと解りましたから」

屋上でラブレターの返事をもらったときの光景がフラッシュバックした。風がふいていたなあ。

先輩の目が皿のように拡がっている。

あのときとおなじように先輩はなにか感じたのだろう。

しかし、いけしゃあしゃあと口からでまかせをいえたものである。なんだか悪い子になった気分。

「やっぱり段階は踏むべきだね……」先輩はなんともなんともうなづく。首肯はぼくへ向けられたものではなくて、自分自身に対して同意をうながしているような気がした。「いっしょにいる時間がないと、あいてのひとなりも解らないし」

「ですす。いまじゃ、ぼくは先輩を美人って思ってます」

「え？」

「先輩は美人じゃなくなっちゃったかわい人です」

「どう、ちがうの？」

足を組みなおす。

やや前傾姿勢。

「美人は単純に見た目がすべてを物語るわけですけど、かわいいってのは外見も中身も含みます」

十秒くらい先輩が凍った。

まずいこといったかなあと思っていたら、

「私が……もしもの話だよ？ 遠くへいったら悲しい？」

遠くとは——あの世のことだろうか？

先輩はまだ死にたいと思っているんだろうか？

あの日くらい、ぼくは先輩のリストバンドのしたの膚はだえを見ていない。蚯蚓腫れは増えているのかもしれない。

先輩が死にたい理由はよく解らない。

つきあって数週間たつけれど、棚上げにしたままだ。くさいもの

に蓋をしても無意味だ。においが消えるわけじゃないもの。
いつか解決しなくちゃ……いけないだろう。

ぼくは縄架黒紐のためになにができるだろう？

「かなしいです」さきの問いに答えた。

いまは、ただこう応えるしかできない。

「先輩」

「なに？」

ぼくはたちあがった。

先輩へとちかづく。

ゴンドラはゆれている。バランス感覚がむずかしく、スローモーションのように前進して、彼女のすわっている板の、彼女の腰の横つちよに右手をおいた。

先輩は目をとじた。

わずかに彼女の首がのび、顔がつきだされた。

パチイン！

「ひッ！」

「蚊がいました」

掌をかえし、つぶれた蚊の死体を彼女に見せると、彼女はハアと盛大にためいきをもらしてから言った。

「うう……ほんとマイペースなんだから……」

よく解らないけど、先輩はあきれ顔でぼくを見るのだった。

「この屑鉄」

ガシボカ！

ガシボゴ！

不安定なゴンドラのなかである。黒い球体は、みぎからひだりへぴよこぴよこみぴよこぴよこ、ひだりからみぎへころんころん、うえへしたへの大騒ぎ。けたたましい金属音を轟かせながら跳ね回る。

オービチエは抗議の声をあげた。「私のオオオオせいですかああアアアア！ 盗聴しイイイイガツシャガツシャろっていったのはアアアアドシンドシンアブツツ氷柱様ではないですかウア！」
「うるさい。この屑鉄。しかれども……これが火サスっぽい展開というやつなのだろうか……」

氷柱の耳にはイヤフォンがひっかかっている。ワイヤーはつながっておらず、ワイヤレス形式のもの。彼女は、いままさにこれで孔明と黒紐の会話を盗み聞きしている最中なのだった。

「それをいうなら、メロドラマじゃないですか……。観覧車ラブストリー。ゴンドラから始まる恋もあるとか云々」

「どうでもいい。そんなことはいいんだ」イヤフォンからきこえてくるのは、はずれた調子の歌声。「しかし、なにをうたっているんだ？ 孔明くんは」

「断固三兄弟ですね。長男はダム建設に断固として反対し、次男は核発電所の誘致に断固として反対し、三男は断固として花より団子がすきで……」

「つまらん」一蹴。「私は泳げたいやきくんのほうが好きだぞ」

「それじゃあ、雰囲気ぶちこわしてはいませんか。あれは暗い歌です。きつと社会的な不幸ものの惨状をうたったものに違いありません。なにせ、まいにちまいにち、ぼくらは鉄板のうえでやかれるんですよ」

「あつそうだ」そっけなく氷柱。

オービチエは浮遊した。

ぶかぶか。

「氷柱さまもやかれてしまえ」

「口が悪くなったなあ、オービチエ」ピキピキと鳴ったのは氷柱の指。きらめく白銀のアーマリング。まるで野獣の爪。

「私が悪口になってしまったのも、近頃のあなたの言動がめつきりがさつで暴虐的だからです」

「むう……私は……諦めが悪いんだ……。あきらめないからな！」

なにをです？ とオービチェが返答しようとしたときだった。氷柱が叫んだ。「うぎい！」

「どうしました？」

「ノイズだ。どうやら《壁の耳蟲（インテルハイッテル）》が壊れたみたいだ」

叫んだ拍子に耳から外れ床に落ちたイヤフォンを氷柱は、しゃくりあげるような動作でつまさきを使い器用にけりあげると、手でキヤツチ。

即座にポケットへ。

「ところで、なにをあきらめないんですか？」

「孔明くんのことだよ」

「すでに二回拒否されてますよね」

「三顧の礼というではないか」

「なんかちがうような……」

「夫婦喧嘩は犬も食わないが、たにんの恋愛も〇・157。嗚呼、おなか痛い。正露丸どこー」

「そうとうシヨックだったんだね……」

ナギはそつと花子に正露丸——ではなくミントスをわたした。

花子、頬張る。口へ大量に投入されるミントス。彼女はなめるでなく、いきなり噛み砕きはじめた。

むしゃむしゃくちやくちやしなから、

「そりゃ……水族館じゃハグつてるところをみせつけられるし。白昼堂々、つてか屋内だけど。ぜんぜん周囲を気に病まないし。それもさあ、はつきり聞こえたわけじゃないし、ナギちゃんだってきちんと聞き取れたかどうか解らないけど、なんか男らしいことまでいつてるし……」

こう、傍目にも一応かつこよかったのがさ。齒がゆいっていえば

いいの？……こう、ね、なんていったらいいんだろう。と、とりあえず態度が違いすぎるんだよ。いっつも私のことはバカにするくせに……」

「観覧車が決定打だったんだねえ」ナギはささつとポーチからなにかを取り出す。「ポチつとな」

「やめて！ 再生しないで！」

ながれだす団子三兄弟のメロディ。

ナギの手ににぎられているのは銀色のケースにはいったテーブルコーダー。てか、録音機能つきウォークマン（和製英語）。

「でもさ、これって盗聴だよねえ……」

「いいの！」

「そういえば白面さんものつてたね。観覧車」

「へ？ あの不良っぽい子？」

「うん。ひとりだったのかなあ。だれかと話してるみたいな感じではあったけど、ほかに人影はなかったし」

白面氷柱のことなど花子はどうでもよかった。

遊園地にひとりでいく奇特なオンナノコくらいいるさ。ここにはストークするためだけに遊園地へおもむいた女子が約二名もいるんだから。

「そうだった……忘れてた。コーくんってバツゲームで先輩いがいにもラブレター出したはずなんだよね。どうなったんだらう？」

「さあ？」

ナギはかたをすくめた。

彼女は賭けマージャンと、その結果がもたらしたバツゲームのことについて、花子からききおよんではいたが、しょせんは他人事であって、きょう一日花子に付き合わされて疲れ果てている。どうせなら、ナギだってカレシでも連れ立っていききたいと思っている。彼女は、はやく帰ってマンゴーカルピスを飲みたいだけだった。

しかし、花子がいつになったら開放してくれるのは皆目検討がつきそうもない。ベッドのうえのグルーミーをみやった。

あんまり長居すると花子の母親が「ごはんでもたべていきなさいよ」といいだしてズルズルと居座ってしまいそう。山田家にはマンガールピスの備蓄はない。あるとしてもそれはグレイプカルピスカイチゴカルピスであり、ナギの望むところではない。グレイプ、あれはまずい。

「まあいいや、そんなことより私は思うのよ」花子が言った。

「なにを？」

「私のばあい、なまえがよくないんじゃないかって」

「ハア？」

この友人はバカである。

オオバカである。

オオバコではない。

「なまえよ、なまえ。いまは、なまえが凡百つてだけの理由で就職不可能つてくらい重要なんだから」

「まあ、たしかにあんたのばあい、平凡すぎるけど……逆に个性的だよ。いまどきさあ、花子なんてトイレいがいには住んでないってだからこそ、芸人の山田花子の本名とかだつて……」

「そんなことはいいの」ぴしゃり。

「じゃあ、どうしたいのさあ？」

「どうしたらいい？」

「なんで私に聞くかなあ……。じぶんで考えなよ。考えないと若年性アルツハイマーになつるよ」

「ボケはいや！ ハゲはいいけど」

「ハゲはいいんかい！」

花子はあたまをかかえ、身をよじり、のたうちまわった。牡蠣にでもあたったのかと思うほど。もしくは十二指腸か盲腸か。

ナギはアホの友人をグルーミーでたたいた。ひっぱたいた。手加減はしない。慈悲はない。親しき仲でこそ厳格さをうしなつてはならない。と、まれ——なぜか解らないのだが、この女、グルーミーでたたくと正気にかえるのである。

そういえば、アホの語源は阿房宮。バカの語源も始皇帝の故事。

——だったなあ、とかなんとか考えながらナギはたたきまくった。

「アイタタタ……」起き上がりこぼしのように花子が姿勢をもどす。
「だってさ、ハゲならアートネイチャとかあるしさ。レディースアートネイチャ。和田アキ子、でんじちゃん？ 関係ないけどさ、和田は。ツラでも育毛でもハゲは克服できるけど、ボケは特効薬ないじゃん？」

「まあ、そうだけど。って話それてない？」

花子はくびをひねり、「そうだった。なまえだ。なまえ。ハナコとかどう？ イチローみたいにカタカナにしてさ」

「発音かわらないでしょ……」

「だめ？」

「没」

斬って捨てた。それはもう、ばつさりと。

百年は芝すら生やさぬ除草をもってす。

「じゃあ、ちよっと考える」そういうと花子はうんうん唸り始めた。
こんこんこんとノックがして、花子の母親がおかしをもってきた。
「ナギちゃん。ゆっくりしていつてね」

「はい」

お盆にのっているのは、

濡れセンベイ。まあ、よい。カシカシしていないものをセンベイとよぶことなど言語道断——というほどにナギはセンベイ愛好家ではない。硬いセンベイだって湿気ればいつしよなのもの。がしかし、もうひとつの品が——いままいしことにグレープカルピスではないか！ イチゴならまだ許せたものをグレープだってッ！

口がひきつりそうになるのを全身全霊で必死に押さえ込みながら、ナギ。「お世話さまです」

ナギが言い終わらぬ間に彼女はキッチンへいなくなった。
とりあえず見送った。

「アレクサンドラ＝山田」とつぜん叫ぶ花子。そして、念仏のよう

なマシンガン。否、これはガトリングガンだ。機銃掃射だった。「クリステイーナ」山田。エカテリーナ「山田。マリーアントワネット」山田。ルイズ「フランスワーズ」ルブラン「山田。ピカソ」(長いので略)「山田。ヤマダ」ヤマダ

「山田から離れる！ 最後とか、ガソダムっぽいからッ！」グレー
ブカルピスへの鬱憤を発散する。

「いまから、フローレンス」マウンテンライスフィールドです」

「直訳、勘弁！」

「いまら、フローレンス」M & Rです」

「S & B！ てか、M & A？ かんたんに買収、もとい買春されそう！」

「Y & Hです」

「戻ってる！ 山田花子に戻ってる！」

……。

……。

「「はあはあ」」

口角泡をとばすのにも疲れたところで、花子。「もともとさ、私楔って名付けられる予定だったんだ！」

「ほう……。巫女っぽい。魚屋うおやの娘のくせに」

「が——しかし！ 常用漢字表（日本国内で使用が奨励されている漢字）になかった！ 戸籍係につっぱねられた！」

「人名用漢字表（特例的に名前のみに使用できる漢字）には？」

「なかった！」

「ちよいタンマ……」ナギは掌をつきだして制止の合図。頭蓋の側面をこしこしとなでまわすような仕草で、軽くたたきながら記憶をたどる。「縄架先輩の名前って、黒紐、だよね？」

「うん」

「紐って漢字、表にないよ？」

「マジで？」

「マジで！」

「エコヒイキッ!」

天上（ただしくは天井）に向かっておらぶ山田花子。

「だれに言ってるの?」

「さあ?」

結論をいうと、この日ナギはマンゴーカルピスを飲めずじまいだった。あな口惜しやあ、と化けてでたい心境であった。

我々はマンゴーカルピスを要求する。 日本マンゴー党書記長・
ばんごうみつたけ
万壕満剛

五

惑星タルティーンはいずこかにあった。

いや……いまでも宇宙のどこかに存在するはずであろう。いまや、そこに住まうものたちが、かの惑星をタルティーンとよばないことがまったくもって完全無欠に明らかであるにせよ……。

むかしむかし、タルティーンの大地には、できそこないの平和があった。くだんの平和はゾウの描いた絵画いじょうに均斉がとれていなかった。

生命は、本質的には個々としては争いを好まないのかもしれない。されど、種全体としてみたとき、そこには闘争本能がある。

重ねて言う。——これは本能である。

本能を超越することは、はかなくも難しく、知的な生命体にとって当面の課題として機能してきた。なぜ、生命は闘争本能をもつのだろうか？　こたえはカンタンだ。闘争することは、種族全体からみればとても有意義なことだから。

種族内部で研鑽を積み、優良種だけを残す。

優生学のような意図的な手法などなくても、生命はむかしからそうしてきたのだ。不良な要素は削いできた。

だから、争うわないことなどできない相談だった。

争うことは合理的であり、争わないことこそ非合理の産物だったから科学的な手法でもって、その根本を支配する合理性という観念で、かかるテーゼを解決せしめることは無理難題だった。

外的環境との闘争は黙認された。

これは個々としても戦わねば死ぬのだからいたし方のないことだった。闘争を拒否することは、巨大な自然環境によって勝られ、ねじふせられることを意味する。厳しくて、常日ごろは慈愛の片鱗さ

え見せぬのに、たまに思い出したように恵みを与える自然は闘うべき相手にほかならぬ。

なんども大戦争があった。

しかし、種のための高度なプログラムは、けっして、かかる種族をほろぼすことはなかった。内ゲバで死に絶える生命などいない……はずだった。

歯車はいつしか狂った。

その『いつ』を特定するのは困難だ。

時間の根幹に最小単位があったとしても、それを識ることはできない。一見する世界は、いつだってアナログ的に進み、ぶつぎりにすることはできそうもない。時間を輪切りにすれば存在も輪切りにされるのだから、観測することが内部性の問題になってしまふこともまた明白だったのだ。客観は死んだ。

社会という見えない存在が鎌首をもたげてきたときが、きつと曙光だったのだろう。そのとき狂ったのだ、とおおくの論者は口をそろえていい、雁首をそろえて首肯することを容易に想像可能だ。

種族内部の研鑽を積むべき争いはいつしか社会対社会の、異なる社会同士の闘争にすりかわった。

研鑽とはほど遠く、あいてを組み伏せることこそが至上命題になった。いつしかそれは、社会内部の熾烈な競争を生んだ。構成単位はコスモポリタンになることなく、どんどんミニマムになっていったのだ。

社会は自然環境から隔絶していた。

ほかの種族——単独で狩獵をおこなうような動物——が社会性なしに自然環境とわたりあえている事実から解るように、社会性とは自然と戦うための装置いじょうの効能を秘めていた。はつきりとは意味のないことなのに、逆説的に高等動物をうむための必須条件であることは、なんともはや皮肉的で象徴的なトートেমだった。

だれも個人的な領分がいかに於いて、死を片時も意識しなくなつた。生涯におけるもつとも哲学的な問題は『自殺について』。これ

だけが残された。そうすると、相互扶助的なものは霞になって、いつしかなくなった。

真に内在する哲学性とは、個々人の最大の関心事でしかありえず、そこには抑圧的で感傷的な外部からのインプットに対しアウトプットを返すでなく、輪廻のように絶え間ない円環をぶったぎるには、アポトーシスがちらつく。細胞的ではなくして、超個体としてのアポトーシス。

個々が闘争を開始した。

それは、自然的プログラムから逸脱していた。

だから、ブレーキはなかった。異様にピーキーで、整備不良の、とまならない列車だった。こいつはオーバーホールなんてしないと言い張るビッチじみた処女だった。そして、線路をはしることはなかった。ハナから脱線していたのだ。

集団的戦争は終わりを告げた。

万人が万人をあいてに戦った。

無秩序だった。

エントロピーは肥大化の一途をたどった。

物理学的に、エントロピーは増大するが、それはあくまで確率論であり、増大するほうが確率的に高い。ひくいほうの確率に樂園へのきざしがひそんでいることにだれもきづきはしなかったし、ギャンブル好きはいつだってつまはじきものなのは変わらない。

まず個人があり、それから文化が形成されるという考えがまちがっていたのだった。社会的な動物のばあい、さきに集団がある。

——集団ありき。だからこそ、エントロピーの拡大は個人化にながる。

眼前の敵に勝て。

つぎは、そのうしろのやつだ。そいつはおまえの背後をとらんと欲している。そいつはアサシンだ。さあ、やられるまえにやれ！

弱肉強食なのは超自然的な空間でもおなじなのだ！

きょうは何人に勝った？

負けることは社会的な死だ。

ともだち一〇〇人ではない——勝利を一〇〇回つかめ。

自称異常者が語るような、偏屈でじつのところ予想がたやすい概念は不要だった。それは、あいてを殺す、死を与えするというものだ。他殺的な死を望むことは、異常性の発露でもなんでもない。メクラのふりしたメアキよりも百万倍はおろかしい。

故、そんなものは必要ない。ネコの皮のような異常性などすててしまえ。三味線に貼れ。方便だ。クチジャミセンだ。

高度に発達した文化には勝利のための方程式が無数にあった。しかれども、なぜか、その解はすべて同一だった。

相互理解は消えた。

電子脳が管理することもたちは、闘争の方程式を暗記した。

理解の消滅は、社会の消滅だった。それは、集団性の喪失だった。社会的動物としての本文をうしなえば、まっっているのはネクロシスだけだった。腐っていくのだ。腐るだけで発酵はない。

真綿で絞め殺されるようにして、タルティーンから高等生命はいなくなった。

おおきな災害も、

甚大な戦争も、

宇宙からの強大な干渉も、

要らなかった。

残されたのは瘴気のただよう空気と、黒く変色した土地と、きらびやかな電光掲示板とゴーストタウン。

宇宙修行中のテンプラーたちがもどってきたとき、タルティーンはそこにあるのにないのと同じことだった。愚者にも間違いであると指摘できるほどの矛盾をいやおうなく彼らは受け入れた。そうせざるをえなかった。

自然環境の回復力というのはすさまじいことをテンプラーたちは識っていた。だが、精神的な理由が彼らにタルティーンへの里帰りを拒否させた。

「いまのタルティーンには、得体のしれぬ、ありうべくもないはずの、しかし顕在化した悪魔がすんでいる」と高位のテンプラーが言った。

「神は我々を見放した」と別のテンプラーが言った。

神は生きていた。

神は――高等動物が、その神意的なプログラムから逸脱した時点で生まれた産物だから、科学技術の発展で消えることなどなかった。なぜなら、一番最初に考え付いた科学的回答こそ神の存在だった。

神は宇宙だった。

ヴォールピたちは思った。神にふたたび受けいられることを望んだ。宇宙をただようことを望んだ。

それが、どんな艱難辛苦をともなっていようとも、

神の試練を、

拒否するものはいなかった。

だれかが聖典を開いた。

何千年もむかしに書かれた聖典で、その原本はとつくのむかしに消え去り、いまテンプラーの手元にあるのは高度な機械文明の印刷機で刷られたものだったが、しかし聖典に書かれている一言一句は太古より不変であるのだと信じられている。

聖典の最終章は破滅の話だった。そして、じつにありがちでひねりのない、最後の文句はこうだった。

『神は約束の大地を与えるだろう』

テンプラーウス
寺院舟は約束の地を目指すことにした。

どこにあるのかも解らなかったけれど。

逆にいえば、知らないからこそそこを目指すための希望を得ることができたのだ。解らないことこそ冒険者を育てる肥やしなのだから。

『あなたの家に爆弾を設置した』と書かれたノートの切れ端をみつけたのは今朝のことだ。ぼくはガクガクブルブルしながら、そんなことをしそうなヤツのところへいつて問いただしてみた。

犯人は取り繕う様子もみせず、あっけなく白状した。

おまえか？　ときくまでもなく、切れ端を見せたら、

「私だ」

白面さんだった。

まさしく予想通り。

「ぶっそうなことはやめろ」

「あれだ。おかしだ」じつにまじめくさって応答する白面さん。

「ハア？」

「まあいいよ。帰ろうか」

放課後である。

よく解らないがいつしよに帰宅することになった。そして、まずいことにぼくは先輩のことをわすれてしまっていたのだ……。カレシ失格。

「ほら、爆弾だ」

駄菓子だった。

茂木家の玄関には駄菓子がおかれていた。

あの、ポップコーンのような駄菓子の、バクダンとよばれているヤツだった。たしかにバクダンだけどさあ……。

「まぎらわしい」

「おもしろくなかった？」

期待の眼差し。

正直者のぼくは、言い放つ。「つまんねえ」

「そうか」シユン。

垂れる耳状の髪。きょうはネコミミ帽子はかぶっていなかった。

白面さんは歩き出す。

「をい」

「ん？」

「なぜ玄関のノブを回している？」

「いいじゃあないか」さつさとたにんの家だというのに白面さんは躊躇することなく框をまたいでいった。

運が悪いことに本日は両親が不在なのだ。

「ふふん。孔明くん。私は一応、女性なんだぞ。料理のひとつもできる。どんな女も女であるかぎり料理ができるのだ」

まったく不可解極まりないことに白面さんは茂木家のキッチンに立っている。母さんのエプロンを勝手に装着している。冷蔵庫にくびをつつこんでいる。まったく思慮というか配慮というか遠慮がない。

両親がいない旨を告げたら、「コンビに弁当はよくないぞ」とか言い出してこの始末である。

以前の家庭科室での一件にて、白面さんが料理上手なことは識っていたが、ここはおちよくるべきところだと思った。

「目玉焼き？」

「ノー。もつと高度だ」

「厚焼き玉子？」

「なぜそんな庶民的なの？ もつと料亭風な——」

「イセエビの活けつくり」

「近い！」

近いのか……。

イセエビなんてもの食ったことないぞ。ぼくは。

「舟盛？」

「おお！ もつと近づいた。いい。教える。私の料理は女体——」
「けっこうです！」大声でいった。

女体に興味はあるが、ちんちくりんな彼女の裸体は見ないでもよい。見るなら先輩がいい。と、まれ、先輩のばあい、身体の起伏がおおきすぎて盛り付けできないかもしれないけれどね。

六時になった。

夕飯にはちよつと早いと思う。

日暮れ。

両親はおそらくデートだから、朝まで帰ってこない可能性のほうが高い。まあ、なのでありがたいかどうかにはするけれど――、「毒とかはいってないよな？」ぼくは疑わしい目で白面さんを見た。彼女ならやりそうだと思ったのだ。

「なぜ、そんなことを気にする？」

テーブルのうえにはとりあえず料理。

野菜と肉の炒め物（品名が解らない）、焼き魚（なんの魚か不明）、オレンジジュース。最後に彼女が運んできた一〇〇円プリンですべて。いたってふつうの庶民のかつ質素なラインナップなのが逆におぞましい。

「睡眠薬でも盛つて、まーた腑分けとかいいだすんじゃないかと」

心外だ、そう彼女はいいたげだ。

「それは、少しね。しばらくおあづけといったところ。いまは、肉体の組成うんぬんよりももっと興味をそえられることがあるんだ。肉体的ではなく、精神的文化の支柱ともいうべきものかな。そういった観点からいえば、そうだなあ、脳みそはちよつとひりだしてみたい気がしないでもないか」

「やめたわけじゃないのね」ぶるつとぼくは肩を震わせた。古代エジプト人は鼻から、鋭い匙を使い脳みそをこそぎだしたそうだ。木乃伊づくりのために。その光景を想像する。ぞつとする。

「もちろん。私は地球にホモⅡサピエンスを調査にきたのだから」

「へ？」

「え？」

「調査つて？」

「え？」

「え？」

「いつてなかったかな？」

「なにを？」

「私はET（extra-terrestrial intelligence 地球外生命のこと）だってこと」

「初耳」

「そうか。そのわりには泰然としてるんだな」

「どうやら、おどろいたようだった。白面さんは野菜炒め——しなしなになったキャベツを喰^はんでいる。

いい加減に……、

「なんか慣れた」

「なにに？」

「おまえの奇行。宇宙人つてことで納得できた」

「そうか。それはよかった。ちよつと、このヘルメットかぶらないか？」

「なんだ……。その電気椅子で処刑されるときに死刑囚があたまにかぶらせられるような毒々しくまがましいヘルメットは！」

「お断りします」

「むう……」

「で、証拠みせてくれよ」

「なんの？」

「宇宙人である証拠だ」

「食べ終わってからな」

食事中の守るべきマナーは遵守するらしかった。

シッポと耳がとびだした。

耳はとんがっている。毛が生えていてネコミミそのものだった。いや——ネコよりはキツネっぽいかもしれない。そして、そればかりか、彼女の頭蓋の横つちよにあつたはずの人間ミミは完全に消失してしまっているのはおどろいた。いつのまになくなってしまったのか？

くわえてシッポだ。ふさふさしたものがびよこんとスカートの裾

からこんにちわして、左右にふられている。真っ白な毛並みが覆っていた。

「ヴォールピ。それがわれらの名前」

とりあえずぼくはシッポをひっぱった。そうするのが礼儀だと思っただけそうした。後悔はしていない。

「なにをする！」

「ちよつと出来心で」

「シッポというのは……」例のごとく白面さんは浪々と語り始めるのだった。「シッポというのはそれなりに重要度の高い器官だ。たとえば、人類や、それに近い類人猿、チンパンジーやゴリラ、ボノボにはシッポがない。それは樹上生活よりも、地上生活を選んだから。もちろん、類人猿は木登りをする。しかし——ほかのもつと樹上生活を基本とするサルはシッポを持っている。シッポというのは、四足歩行における舵取り装置にほかならないけれども、木登り運動に於いても同様に重要なのだ。人類がほかの類人猿とちがいで、その生活スペースをサバンナへうつしたのは、それなりに時代が下降してからだけれど、二足歩行に於いて、シッポは重要性を欠いたむしろ、座るという動作に於いては邪魔になった。木の上に座る分にはよいかもしれないが、平地に腰掛けるには適さないと表現すべきか。つまるところ、私たちヴォールピはあなたたち地球人と似たような経過を辿りはしたものの、私たちの母星には平地が極端に少なく、樹上生活を完全に放棄しなかった点に相違が見られる。ヴォールピの文明は人類と同じく、ジャングルから始まった。この発展はマヤやインカ、モホスといった文明に似ているが、かの文明がほかの灌漑文明よりも出遅れていたのは、人類という種の身体的機能がジャングルに向かなくなってしまうていたからだ。そして、私たちヴォールピの耳の形状が尖っているのは、聴覚を重視した結果だ。類人猿は色盲ではないが、旧い時代において、夜行生活をしていた哺乳類にとって視覚よりも聴覚が重要性を帯びていた。これはエコーケーションのような、人類の潜在的能力を見ても解ること。人

類の声帯と私たちの生態が類似性を示すのは、単なる偶然だと思うが、まったく口腔の形状が異なる鳥類が、人間のモノマネをできるということ踏まえれば蓋然性は低からず、高いものなのだろう。

逆も可能だから、鳥の鳴きまねを人類はできる。もともと、ヴォールピが二足歩行を始めたのは、泳ぐという作業に於いて、手と足を分化することが自然淘汰的に有用だったからだ。私たちの母星タルティーンは湿地帯が多いのだ。遊泳が得意な生物はそれなりの生存価値を持つ。イヌも遊泳が可能だが、彼らが潜水を得意とするかといえ、否だ。へびの一種は、潜水をするが、海産物を採取するという目的を持てば、手の有用性が示される。そのため、ホモ「サピエンス」——人類はイネ類の栽培によって文明を発展させたが、私たちは魚類の養殖がさきに立った。ジャングル時代を経て、つぎのピリオドへやってきたのは海の文明だったのだ。古代に於いて、陸路よりも海路がよりよい交通手段であったことは、グレクスにとって、ゲルマニクスが蛮族であったのに対し、海を隔ててなおアナトリアに悠を誇ったペルシクスと文化的接触が多かった点を見れば判然とする。もともと、グレキアそのものが多くの諸島群を持っている。だのにグレクスたちは普遍的な共同体意識をシェアしていた。私たちヴォールピは海運に秀でた。結果として、地球のイルカに似た生物を馬のように使役するようになった。これは機械駆動の船舶が出現するまで優勢を誇った。ヴォールピに於ける毛の退化というのは、遊泳に対し一助となったからだ。人類においても、体毛の退化は同様の仮説がある。また、私たちの色素が薄い点に関しては海面で反射する陽光をさらに反射することでみずからの存在を秘匿する意味を持ち、逆に海面下に於いては少ない光を反射し、仲間到自己の存在をあかすという相反する効能による。けっしてメラニンだけの問題ではない。色素を決めるのはメラニンだけではない。よって日焼けの問題に関し、ヴォールピは無縁である。そして——

「もついい！」

「もついいのか？」

「もういいんだって！」　そういえば先輩にもおなじ文句をいったなあと思いつつ、「それより野球の話しようぜ！」

「野牛の話？　それとも――柳生ならシベリアに……」

ちよつとはギャグセンスがみがかれてきたではないか。シベリア柳生というネタについていける人間がいかほどいるのかという点にはついては目を瞑るとして、だけれども。ぼくはにんまりとした。

「六点だ」

「それはうれしいぞ」よろこんだ。

ケータイが鳴った。

メールかと思ったが電話だった。

ディスプレイには先輩のなまえ。ぼくはあわてた。受信ボタンを押して、

「もしもし。――先輩。どうしたんです？」

「縄架黒紐から電話か？」

白面さんがよってきた。ぼくのケータイに耳をちかづけてくる。そんなことをされては、ぼくのかおも彼女にちかづくわけで……ぼくは彼女をいなしつ、受け答えしつ、そして先輩に応答せねばならなくなった。

「うん」受話器に、「……」と先輩？　先輩？　せんぱーい？　あれ？」

白面さん、ぼくが顔をしかめたを見てとって、

「どうした？」

「切れた」

「へんなヤツだなあ」白面さんはあきれた声をだした。

「なあ、茂木くん。私の話をきいてほしい」いつになくまじめな声だった。彼女はある意味ではいつだってまじめかもしれない。けれど、今回のものはそのいつもとは打って変わっていた。冷えた河底の水がせせらぐような声だったのだ。

「アブダクシヨンの話でないならいいよ」

「そうじゃなくって……」彼女にしては珍しく言いよどんだ。「あ

あなたは、人類だ。ホモ〃サピエンスだ。あなたの意見がききたい」
「そのまえに」

白面さんは眉をわずかにつりあげた。

「確認していい？」

「触ってみるか？」

ムネをつきだすな！ ムネを。つきだすべき山脈もないくせに！

「違う！」

「じゃあ……」

「ぬぐな！」

「人類とヴォールピの性器の違いでも知りたいのかと……」

ぬぎかけたスカートをむりやりあげさせる。

まったく、ぼくはこれでもオスなんだぞ！

「あのさ……」

「はやく続きをいえ」白面さんがせかす。

「ぼくにバラしていいわけ？」

「私が宇宙人であるということか？ それなら問題はないぞ。この宇宙に住まうものはすべて宇宙人なんだから」

「屁理屈禁止」

「屁理屈じゃあないぞ。断じて……」白面さんはうつむいた。「し
ようじきなところを言うのだな……よくはない。あまりよく、は。

私はスパイなんだ」

「殺さないで！」ぼくはとびすさり、居間とキッチンのあいだにある
カウンターの影に身をひそめた。

「オーバーだよ。私はあなたを殺さない。約束する」

ぼくはうなづいた。そしてカウンターから這い出した。

彼女がほんとうにぼくを殺さない確証なんてなかったが、なぜか
信じる気になったのだった。さいきんぼくはオンナノコに甘い。つ
て、白面さんはオンナノコじゃない！ そもそも人間じゃないし……
…。

「あなたは私に希望をくれた」

「え？」

「移民船の……正確には寺院船の話しよう」

白面さんの話をぼくはいつにも増してまじめに聞き入ってしまった。ぼくは宇宙の話とか、そんなに興味がなかったし、SFの熱心な読者でもないのに、ぼくの耳は彼女の話のをがすまいと必死だった。

彼女がヴォールピという宇宙人であるいじょう、彼女の話はほんとうのことで、異文明の話は現実で、だからぼくは聞き入ってしまったのだろうか。

もしかすると理由はまったく別のところに存在し、目の前にいる白面氷柱というオンナノコのすがたの宇宙人の語り方にその所以があるのかもしれない、ぼくのなかにある彼女への評価が少し揺らいでいた。

彼女は奇特でキテレツな少女ではなかったし、アブダクションにばかりかまけるマッドなインベイダーでもなかった。

故郷タルティーン／地球のような惑星。

万年の放浪の旅路／目的地は不明、否、未定。

聖典に縛られた艦内／牢獄のような自由のない／彼女はスパイ」

そうすることが艦外へでれる順当で穏当な理由。

テンプラーと呼ばれる教団幹／事実上の支配者。

彼女の話 요약すると、フェルミのパラドックスを思い出す。

パラドックスの概要はこうだ——ある程度の文明規模になると文明は崩壊してしまう。文明の高度さが仇になってしまふのだというのが論旨で、結論はこうなる。……だからぼくらは宇宙人に会えない。でもいまぼくは宇宙人に邂逅している。パラドックスはその意味を失った。

しかし、ヴォールピの文明がなくなったのは事実で、いまや寺院船と呼ばれる移民艇に住む五〇〇人しかいないのだと聞くと、フェルミ＝パラドックスは半分は真実なのかもしれない。

「じゃあ、帰るかな」とうとつに話をぶったぎり、白面さんが言った。

「帰るの？」外を見た。いつのまにか、宵闇だ。

ぼくはもつと話を聞きたかった。

その旨、つげるまえに、

「一応。私もオンナノコなんだよ。外泊するわけにもいかないよ。じゃあ、……また、あした」

「また、あした……」と背中にサヨナラをなげると、

「玄関までおくらないのか？」と言って白面さんがふりかえる。

「宮沢賢治だな」

「私は客だぞ」

「よく注文が多いって意味だと解ったな！」

「褒める。褒める！」

「いいこ。いいこ」流されるままにあたまをなでた。ネコミミがそのままだった。白面さんはあわててネコミミをひっこめた。入れ替わりに人間ミミが生えた。「さよなら。またあした」

「うん」

「もつときかせてよ」

「興が乗ったら」

そういつて彼女は街頭照らす夜道に消えた。

ぼくはわずかに後悔した。

白面氷柱（ヴォールピ名はなんというのだろうか？）がどうしてもくにつきまとうのか、その理由を知ってしまったことを。悔いた。「私は変えたいんだ。ヴォールピの形骸化と、そして墮落していることにも気づかず、だれが記述したとも知れないバイブルに頼り、漫然と舵をきることも忘れて風のおもむくままに漣引く船に揺られる愚かな同胞たちを……」。

反動ではないか。そんなのは。科学文明と高度な個人社会がタルティーンを滅ぼしたのかもしれないにせよ……反動だ。だってそうだろう？ 私たちはもはや自作できない光子エンジンの恩恵で暮らし、旅路につけているのだから。

でも、私は感情論を否定しない。いま我らを支配しているのが単にネガティブでペシミスティックなものだけだって話なのだから。その打開策に、私はぜひとも笑いを使いたいのだ。孔明くん。あなたは神を信じるか？」

だれでもここに闇を飼っている。

そこに光をあててしまったら、

責任をもたなくちゃいけないだろう。面倒なことになっていた。ぼくは面倒がだいきらいだ。

ハーレムもちの王様もきつと大変だったに違いない。

六

「飛び降りだつて！」

心臓が跳ねた。

会陰に小骨がつきささったような不明瞭な不快感。

ぶるつと背中をぼくは震わせて、あたりをみまわした。だれが「飛び降りだ」なんていいやがったのか、さぐるつもりだったが、解らなかった。もし解ったなら、ぼくはそいつをぶちのめしたかもしれない。

教室全体が地震でもきたかのごときざわめきで溢れかえっている。事態を收拾せんと、目をつりあげ、大声でわめきちらして、童貞ペーギンがいきまいているがまるで効果がない。それもそうだ——このHRが終われば放課なのだ。

みな、うずうずしている。

浮き足立っている。

その——飛び降りとやらのことであたまがいつぱいなのだ。日常の繰り返し産物であるHRなどあたまの片隅からこぼれおちている。むくむくと、日ごろ抑圧されている野次馬根性が芽をだしている。

ぼくもご多分に漏れない。

しかし、ぼくのはあい、飛び降りそうな知人がいるからにほかならなかった。野次馬的な喧騒の列にくわる気などおきるはずがなかった。先輩が心配だ。いやな予感があつというまに育ち、ここを埋め尽くし、支配する。

痺れをきらした童貞ペーギンが言った。彼はそうとうにご立腹だった。「HRは終わりだ。解散！」

あつというまに教室が空になった。

クモの子を散らすとは、まさしくこの光景のことなんだと廊下を駆けていくクラスメートたちをばやけたまなこで見送った。

ぼくは動けないでいた。

冬町も花子も物見遊山にいつてしまっている。ぼくだけがぼつねんと教室に残された。足が動かなかったのだ。もしかしたら？ が顕在化して現実としてぼくのまえにふりかかってくるのがなにもかえておそろしいのだ！

どれくらいぼくは硬直していただろうか？

意識を取り戻させたのは、年配の男性の声だった。「きみ！」
見知らぬ男だった。

高そうなスーツに身をつつんで、かなり顔立ちのよい彼は、五〇手前くらいに見えた。かなり憔悴した様子に見える。反面、双眸だけはギラッとひかかっていて不気味でもある。いったい、ぼくになんの用だ？

彼のうしろからもうひとり男がやってきた。こちらは三〇歳くらい。背が高い。そして、不本意にも面倒ごと^ごに巻き込まれてしまったという顔つき。その態度を隠そうともしていなかった。優男——というよりは軽薄と形容すべき男だ。

壮年のほうが大声で言った。「どうにかしてくれ！ きみは——黒紐と仲がいいんだろう！」

？ なんだ？

ぼくはつとめて冷静に訊ねることにした。「それは、いったいどういうことなんですか？」

「屋上で——」彼はことばをいったん切って、ひげの剃り跡が青々しいあごをなでまわして、つづける。「黒紐が……」

彼はこれいじょういかなかったが、ぼくには事態が飲み込めた。やはり、飛び降りしようとしているのは先輩なのだ。しかし、しようとしているのであって、完遂してしまったあとじゃない。だからこそ、眼前の男はぼくに助けを請うているのだから。このことは救いだ。まだ引き止める機会があるのだ、と思うとすこしだけ楽

になった。

そして、こんなことを頼むような人物のころあたりはひとつしかない。

そう――。

「あなたが黒紐先輩の父さんですか？」

「そうだ」鷹揚に言う。

「その……いいづらいんですけど、先輩がリストカットしていたのを知っていましたか？」

「なんですって！」優男。

ぼくは優男を見て言った。「だれですか。そのひと」

「黒紐の婚約者だ」先輩の父が優男を指し示しつつ、説明する。

「で、知ってたんですか？」

「お、俺は知らなかった。知ってたら、そんな――」

「東二町くん……きみにはきいていないと思うんだがね……。彼は」とげとげしい声で先輩の父。

「……知ってたんですか？」

「知ってたよ……」

「どうしてほうっておいたんですか？」

「いまはそんなことを言ってる場合じゃないんだ！ 火急なんだよ。きみだって解るだろう？」

「そうだ！ そうだ！」……なんだこの東二町という男は。先輩のオヤジさんの背を盾にして文句をいってやがる。

「だから東くん！ 黙れと言っている！」

「う……」

「なんとかしてくれ」

「そんなこと言われても困ります」一息。「ぼくは、先輩が手首を切る理由が解らなかつたんですから」

「解らなかつた？」

「いまはなんとなく解ります」

「なら――」

「先輩は、あなたが嫌いだと言っていました」

苦悶の表情。それほど悪いひとではないような気がした。「解つてるさ。年頃の娘にどう接したらいいのか、こどものないきみには解るまい」

「だから放置したんですか。それって言い訳なんじゃないですか。先輩のはなしにちゃんと耳を傾けたこと、あるんですか？　もしかして、あなたをがんじがらめにしているのは世間体ですか？」

「そうかもしれない」

先輩の父がぼくから顔を反らす。入れ替わりに優男が割って入ってきた。彼はいたけだかも大概にしろといたくなるような横柄さでよくに言う。「きみさ、学生みたいだから解らないかもしれないけど、おとなってのは世間体が大事なんだよね。人間はね、タテマエで生きているんだよ。ホンネなんてものはだれも気にする必要はないんだ。――愛とか勇気を信じるとかそんな、絵空事を声高に宣言するなんてのは、アンパンマンだけで十分なんだよ！

だからさあ、はやく彼女をどうにかしてよ。彼女に死なれたら困るんだ。まあ、彼女がリストカットなのはしょうがないよ。それはいいさ。一応、A社の娘なんだから価値はあるわけだからね。身体つきもいいし。それに――」

「どう困るんだ？　東二町くん」

「そりゃ、世間体に決まってるじゃないですか。お父さんもそうでしょう？　だから、黒紐さんのリストカットの件をぼくに話したगरなかつたんでしょう？　隠してた理由はそれじゃないですか。

でも、俺はこころが広いですから。どうせ、セックスしてこどもをつくれればいい関係な……」

「私の娘の誕生日はいつだ？」

「えっと……」

「そいつを連れて行け」

いつのまにかコワモテのスーツたちがいた。SPなのだろう。先輩のオヤジさんの命令で東二町さんがしょっぱかれていく。

なんてヤツだ。

ぼくだってあたまのなか、妄想の世界でなんとも先輩とセックスしたさ。先輩はあんあんという声で啼いたさ。あの巨大なメロンもぐちゃぐちゃにもみしだいたさ。……だけど、それをおもてにだしちゃいけない。それこそ、タテマエなんじゃないか？ こいつは……いつていることが矛盾している。いわないことも優しさじゃないか。

こいつにとつてのタテマエは、都合のいを意味している。

先輩は、きつと、そうだ——。

お父さんのことが嫌いだったんじゃない。こんな男のもとにとつがせようとする父親が嫌いだったのだ。だってそうだろう？ 先輩はこれまでに何度か、パパの話をしてくれたじゃないか。ママの話は一度もしてくれたことがないのに、だ。

彼はほざく、

「な、なにをするんですか！ 俺は婚約者ですよ！」

「婚約破棄だ」

「どうなるか解っているんですか！ あなたの会社がいまどんな状況にあるのか。俺だって知ってるんだぞ！」

「ふん。いいことを教えてやる。東くん。私もひとの親なのだよ」
ぼくのほうを向く。「茂木くんと言ったかな。きみ……。きみが黒紐を助けてくれるのなら……。娘の思うままにきみが加担してもいい」

「どうして自分でいらないんですか」

「解ってくれ……。私はなさけない父親なんだよ」そう言って縄架氏は深く深くこうべを垂れた。

「婚約を、先輩がのぞんでいないことも知っていましたか？」

「そんなことまで娘は話したのかい？」

「はい。それで——このまえ遊園地で……」

「ああ。あのときは——」

「先輩を叱りましたか？」

「いや……。佐藤。運転手の佐藤だ。きみも知っているね？」ぼくは首肯する。「彼が命をかけてもいいからと懇願してね。それにさいきん、娘は自傷行為に及んではいけないようだった。メイドからきいた話にすぎないのだけれど……」

「解りました」とぼくは言った。

屋上にいかねばならない。

「娘を頼む」

でも、

そのまえにぼくはしなくてはならないことがあった。ぼくは急ぎ足で家庭科室へと向かった。

家庭科室のとびらの鍵はあいていた。もしもしまっていたら窓ガラスを破壊して進入するつもりだったのだが、その必要はないようだ。しかし、鍵があいているということは、なかにだれかいることを意味する。

「どうした？」白面さん。やっぱりか、と思った。

「腑分けでもしてるのか？」

彼女はなにをするでもなく、トライポッドに掛けていた。伸ばした両足を中空でぶらんぶらんとさせている。

学校中が先輩のせいで大童だというのに、ひとりでこんな場所にいるなんていかにも、らしい。

「いや……。孔明くんは、なにをしに？」

「包丁を取りにきた」

「なにに使うの？」

「先輩を刺す」

白面さんは細い目をしてぼくを見た。それから、首をかたむけ、マイペースさまさまに言った。「飛べるか、飛べないか。それが問題だ。we can fly or cant, that's a problemってことか？」

「いちいちシエクスピアっぽく言わなくていい」

「鳥っていうのはね、孔明くん」白面さんはトライポッドからたちあがり、教室の壁面に右手をなぞらせながら歩き出した。その背中を追う。

「？」

「哺乳類よりも新しいんだ」

「なんの話だ？」

「竜脚類が跳梁跋扈していた時代にも、すでに哺乳類はいた。けど、鳥類はいなかった。いや、いたにはいたんだけど満足に飛べなかつ

た。翼竜であるプテラノドンには飛翔能力を持たなかったから、空を満足に飛翔する存在はおおくはなかった」

「なにがいたいんだよ？」ぼくは焦れていた。ぼくは一刻も早く先輩のもとへ馳せ参じなくちゃならないのに……。

「恐竜は飛びたいと思ったのか？　だから数千万年かけて鳥になったのか？　竜脚類の祖先である爬虫類はいまでも世界にいっぱいいるのに？　とべてよかったの？　彼らはいま、この星のどこにもいないのに」

「そんなこと、解らないよ」

「ペンギンはとべない。ダチョウもとべない」

「ぼくと同じこというなよ」先輩にもおなじことを言った覚えがある。

「愛だな」

「きやつせん」

「む——。鳥瞰して解ることもある。けど、解らなくなることもある。地上から見た円錐を、真上から見たただのサークル。強烈な光で陰さえもなくていたら、それが立体物であることにも気づかないかもしれない。必要なのは——あなたが懸案しているそのひとは地上にいるから、円錐をサークルだと思っているのだってこと。

蟲の目——虫瞰だっておなじくらい大切だ。巨人の産毛をみるために巨人同士なら目を凝らさないといけない。しかしだよ、小人にしてみればその産毛は剛毛——もとい、なにか蔓のようなものにさえ映ってしまうかもしれない。だから……」

白面氷柱はなんでも知っている。いつも長口上でぼくを煙にまくけれど——それはとうぜんのことだ。彼女は宇宙人のスパイ。

先輩とはじめてのデートのときだって、ぼくよりも先輩のことに詳しくかった。彼女は、いま、飛び降りしようとしているのが縄架黒紐であり、彼女をとめるにはどうしたらいいのかということを語っているのだ。

先輩がかこの中の鳥なら、白面さんもそうだ。

寺院船というかこのなかで暮らしてきたのだ。

先輩はいま、逃げようとしている。この世から。

しかし囑目のなかの、この宇宙人は先輩とはまったく違う——正反対のベクトルで生きている。だけど、ぼくはかこのなかの鳥になったことはない。だから、彼女たちの気持ちは解らない。

同じ道にしながら、その岐路で、ふたりの少女は違う道を進んだ。でも、道は後戻りだってできるのだ。なにも断崖絶壁から身投げする方法にたよることはない。先輩と白面さんは違う。その点で根本的に違う。

先輩はあんなに気に病んでいたけど、

先輩のオヤジさんは、

——そんなに悪いひとじゃない。

ちよつと娘との接触のしかたが解らないだけだ。なんだ。ぼくの父さんといっしょじゃないか。ちよつと不器用なだけなんだ。みんな、不器用だ。ぼくも含めて。

そして、不器用だけど、ぼくは——。

「見せてあげればいい」ぼくは宣誓するように言った。

「そういうこと」白面さんはほほえむと、ぼくになにかをつきだしてきた。ぎらりと銀色に光る刺身包丁だった。「もっていくといい。切れ味は抜群だ」

「世話になったよ。白面さんって意外と——」

「氷柱、そう呼んでほしい」

「了解」

ぼくは包丁を鞘のままベルトに差込み、屋上を目指した。

雨がふっていた。

いつのまにふりだしたのか、ぼくと氷柱の会話中に、だったろうか。しかし、そんなことはどうでもいい。

教師たちが塔屋につめていた。そのわきをすりぬけようとすると、肩をつかまれた。よびとめられたのだときづいたのは剣呑な声がぼ

くへと突き刺さったからだ。「おまえ、どこへいく？」

悲壮感にあふれた教師の顔。

そりやそうだ………ことが公になってしまえば、謝罪すべきでもないのにマスコミなぜか謝ることになるのだから。

ぼくはいった。「説得してきます」

「できるのか？」

だれもが臆して屋上へいきたがらない。

みなが遠巻きに見物しているだけなのだ。生徒たちは屋上への階段には、陽から逃れる低推移の三面側溝のザリガニのように犇いている。みなが、腫れ物に触りたくはなかったのだ。だから、ぼくはメシアのように彼らの目に映っただろう。彼らは道をあけた。

先輩はフェンスの向こう側にいた。

背中をフェンスにおしつけている。

ちかづくぼくの足音にきづいてか、彼女の上半身がこちらを向く。

「おはよう。茂木くん」

綺麗な髪をずぶぬれにした先輩。額にはりつき、肩口にはりついている。貞子みたいだった。

セーラーカラーが萎びれ、上着は水で透けている。ブラジャーの線が見え、どうしようもなくエロティックだった。

「もう夕方がちかいですよ」冷静に言った。

意外とだいじょうぶじゃないか、先輩は。なんて思ったのも束の間のこと。

「裏切りもの」

「え？」雨脚のむこうがわの先輩がくすんでみえる。

「きのう、どこにいたの？」

「自宅だよ」

「じゃあ、質問をかえるね。だれといたの？」底冷えのする声が空気を凍てつかせながらやってきて、ぼくの耳朵を氷結する。

「……」

「ねえ？ だれといたの？ どうして応えないの？ なにか、後ろ

めたいことでもあるの?」

「白面さんと……」

「そう。あの子、かわいいよね。このまえお弁当食べてたときにやってきた子でしょ? 私とは違ってかわいいよね。ああいうのが好きなんだ?」

「先輩だつてかわいいですよ!」

言つてからきづいた。失言だつた。

「だつて? 先輩だつて? 認めるんだ。白面さんがかわいいつて認めるんだ! この、嘘つきッ!」先輩はあらんかぎりの声量をふりしぼつた。「はなさないつていつたくせに! いつたくせに!」

「先輩は婚約者のことで……」

「佐藤からでもきいたの? 別にいいけど……。婚約者とかそんなことはどうでもいいの。そんなことはもういいの!」

あやまつてはいけないと思つた。

ぼくの優柔不断な態度がまねいた事態だつたとしても、先輩にここで謝罪してしまったら、彼女はかわらないと思つた。

「どうして隠すんですか?」

「え?」

「どうしてリストバンドをするんですか?」

「ひとに見せたくないからに決まつてるじゃない!」

「どうして見せたくないんですか。ひとはなぜ、傷に包帯をまくのか、先輩は知つてますか?」

「……なにを? いつてるの?」当惑する先輩。

「傷を癒すだけじゃないんですよ。包帯をまくのは傷を見たくないからです。先輩はリストカットの傷跡をたにんに見せたくないんじゃない。自分で見たくないんだ。みじめな気持ちになるからッ!」

先輩がことばに詰まつた。

ぼくたちは見詰め合う。

髪がびしょびしょになつた。

雨音だけが屋上を支配している。野次馬たちもいたつて静かなも

のだ。咽を鳴らす音さえ聞こえてはこない。

先輩の視線はぼくから逸れることはなく、それはぼくと同じだった。

無言。

目力勝負でもあるまいに……。

沈黙を破砕したのは先輩。「ねえ、知ってる？ 茂木くん。鳥はとべるのに人間がとべないのは、神様が意地悪だからだよ。どうしてなんだろうね？

自身の似姿として、楽園で囲い飼うほどにかわいがったはずなのに、私にはなんで羽根がないのかな？ じゃあ、どうして神様は鳥をつくったのかな？ そんなことしたら、人間がうらやましがって解らなかったのかな？ 全知全能のくせにバカなのかな？ かな？」聞き取れないほどの早口。まくしたてる先輩。いいしれぬ恐怖。「天使の羽根は、鳥の羽根。悪魔の羽根は、コウモリの羽根。なんでかな？

結論はね、とってもかんたんなんだよ。神様は天使をうやまわせたかったんだよ。コウモリさんは哺乳類だから。神様はコウモリを醜くつくったのは、きつとおなじ理由なんだよ！」

ぼくは歩をすすめた。

先輩。あなたは……。

「こないで。私は死ぬ。もう死ぬ。狂言じゃないから！」

聞かない。耳はかさない。
ずんずん接近する。

「私のことはなさないっていったのに、いったのに！ ほかのオンナノコのところで……。やっぱり私はペンギンなんだッ！」

先輩、知ってますか？

——クライストは言った。「いままでさんざんに神をこきおろしてきた無神論者は数あれど、悪魔をこきおろした無神論者を私は識らない」

ぼくは無心論者なんですよ。

それにいったじゃないですか……ペンギンはおいしそうだねって！
みすみす、うまそうなお肉を、沙でべとべとのミンチにはさせませんぜ。

ぼくは走り出す。

水で滑りそうになるが、気にしない。

フェンスをはさんで対峙。彼我の距離は三十センチもはなれてない。先輩は泪目になっていた。

「先輩」

「……」

ベルトに手をかける。

しゅんかん、鞘から包丁をぬき放った。

ぼくは問答無用で細い刃の刺身包丁をフェンスの網目のはざまからつきだした。雨粒にきらめく、刃先が先輩へ向かう。

彼女の頬がひきつった。

彼女が包丁の横っ腹をたたいた。

柄が網目にひっかかり、ぼくの手から滑り落ちる。そのまま包丁は校庭へと落下した。かきんかきんと不快なエコーをさせながら。

「なにをするの！ 死ぬじゃない！」

怒っていた。

生命をおびやかされた人間の目だった。

ぼくは安堵した。

これでいいのだ。ぼくは、先輩を刺すつもりでつきだした。これに嘘はない。殺すつもりでやらねば意味がない。けれども、それはあくまでも先輩が反撃や回避をしなかったならば、だ。彼女がさけたり、たたきおとしたりできるスピードでぼくはつきだした。それは彼女のホンネを知るためだった。

ぼくは深呼吸をした。

「先輩」力強くよびかけ、先輩を射抜くように見る。否、見つめる。視線で殺すほどの強さで。「対外的に自殺願望があるってひけらかしているひとつて、死にたいっていいますよね。でも、殺してくれ

とはいいません。

先輩が殺して欲しいというのなら、ぼくはいくらだって、あなたを殺してあげます！ でも、あなたはぼくに殺して欲しいって言わない！ こうして、ぼくたちのまえで死にたがるだけなんだ！ ぼくがここで、ちよつとした心遣いであなただけを刺し殺したら、あなたはぼくをきつと恨むんです。だから、刺そうとしたんです」おおきく深呼吸。宣言。「あなたは死にましえんツ！」

「……そんなこと言っただって！ ここから飛べば死ねるもん！ 私を裏切った孔明なんかッ！」

先輩が飛び込みの準備をする。ぼくにカンペキに背をむけた。だめだ……。手をのばしたい。しかし、フェンスが――。

そのときだった。

ずばつとフェンスを越える陰。

ん？ と視線をそそぐ。

「バカか！ おまえはバカなのか！」

「あなたは？」 怪訝な先輩。闖入者に敵対する両目。

「私は白面氷柱といまは名乗っている。孔明くんからラブレターをもらったもののひとりだよ」

「そんな…… やっぱり死ぬ！」

「だから、おまえはアホなのだッ！」 師匠が降臨した。

「なにを……」

「あなたは飛びたいの？」

「飛べないから…… こうしてるんじゃない！」

「アホだな。度し難いアホだ。」

飛ぶ勇気もないのか？ さつさと飛べよ。おまえがその口でバラまいているくそつたれな音節は、なにを指している？ フェンス越えたら、おまえは重力に逆らうすべなく、そのまま自由落下するしかないという意味か？ それともまえへ進み跳躍する気概の欠如の比喩表現か？ ま、そんなことはどっちでもいい。だって、おまえには二本の立派な脚があるだろう！」 氷柱はトーンを落とした。い

ままでの怒声じみたものとはうってかわり、「あなたには立派な脚がある。そして、あなたは大地を踏みしめているじゃないか。縄架黒紐。あなたは識っているか？ 踏みしめるべき大地もない場所があることを。一粒の沙もない場所のあることを」

「なにをいつてるの？」

「縄架黒紐。あなたは神さまを信じている？」

「そんなの信じない。神さまはなにもしてくれない。なんども祈った。でも全部、無視された！ 私にツバサをくれなかった」

「そうだ。なにもしてくれない。私もだいきらいだ。だから、神さまを恨め。神は天罰などくださない。神の仕事は恨まれることだから、すきなだけ呪え」ふふふ。「そして――」

氷柱が張った。

張られた先輩は、

「なにするのッ」

「こんどは殴られる先輩。」

フェンスからうつかりおちてしまわないような絶妙な角度で氷柱は彼女を殴打していた。ぼくはどうすることもできずに眺めているしかない。

「あなたのフィアンセが政略結婚の故だというのなら、そいつは哀しまないだろう。でも、あなたが死んだら孔明くんが哀しむ。だから殴った」

長い沈黙の開始だった。

事態の展開にさすがに耐え切れなくなったのか、三年の学年主任の先生と体育教師がひとりこっちへ歩いてきている。

彼らはあすにも地球が終わるんじゃないかという危惧と、しかしこの事態を收拾しなくてはならないという正義感とでマープリングされた顔色でぼくを見た。ぼくは、ただうなづくしかなかった。

フェンスのむこうでは、ふたりのオンナノコが睨み合っている。

先輩はいつになく激昂し、

氷柱はいつもどおりの冷静さをもって。

山の手からバリバリと乾いた音。雷がおちたみたいだった。雨脚はどんどん強くなり、横殴りになった雨が痛い。

センサーたちがふたりになにごとかを言う。ふたりは無視する。完全な膠着状態。

ぼくの見立てがあまかった。

ぼくのプランでは、とつくに先輩はこちらがわへと帰還していつしかるべきだったのに……。

どこでまちがったのだろうか。

ぼくは――、「優柔不断だ」しほりだす。「あのときはああいったけど、決められない。先輩。ごめんなさい」

嗚呼、なんてなさないんだ。

いきまいて先輩を救おうなんてして、それがこのザマだ。

沈黙の格子がはずされた。「……やっぱり、神さまはいないよ」

「そうか」

「だから、代わりにあなたをのろっていい？」

「もちろんだ。あなたと私は好敵手だ。好敵手はおたがいにおたがいを認め、貶し、責め、癒し、あいてに負けんがため切磋琢磨して研鑽にいそしむものだぞ。故、ぞんぶんに呪うがいい。」

その代わり、私を呪い殺せるまで死ぬなよ。ユーレイになっても呪いなんてできないんだから。呪いでひとは殺せない。呪いで夢は適わない。ユーレイは眠らない。だから夢もみない」

「誓うよ」

氷柱が先輩をだきかえるようにして、ひとつとびでフェンスを越えた。彼女はやりとげた感いっぱに言った。「孔明くん。解決したぞ」

「ずるい……」

「なにが？」どうなった？

「氷柱さんだけずるい」

「だからなにが？」

「きょうから孔明くんって呼ぶよ。いいかな？」

拍子抜け。

なにが起こったのか。問題は解決したようだった。

先輩は晴れ晴れとした顔をして、気力にあふれていた。

ぼくはとりあえず先輩の手をとって言った。「よろこんで」

「それから、恨むことにしたよ」

「神様？」

先輩はくびを横に振る。「ううん。それもそうなんだけど……もうひとり、ね。孔明くん、あなたを。あなたは私を刺そうとしたんだから。いいよね？」

「天使に恨まれるなら本望です」

「「え？」」重複。ふたりのハーモニー。おたがいの『え？』のしめすところはまったく違うのかもしれないけれど、ぼくは気にしないふりをして言うのだ。だってぼくは、ジェントルメン。

「ツバサなんかなくなっただって先輩は天使なんで——うぎい」

足の甲が踏まれた。

ぐりぐりぐりぐり。

踵がめりこむ。

「残念だなあ」氷柱が言った。

そのとき、地球が震えた。

七

「地球を救った英雄には重婚——一夫多妻もしくは多夫一妻を認める！」だあ、なんて妄言をアメリカ合衆国大統領がぶっちゃけたのは、英雄は色を好むから、という単純明快な理屈だった。毛沢東もナポレオンもヒトラーも。みんなそうだった。だから、重婚を許可すれば、おのずと英雄が現れるのじゃないかっていう淡い期待感があつたのだろう。

マスコミ的には、米大統領はカップル文化の影響下にあり、ファーストレディと仲むつまじくなくちゃいけないという暗黙のおきてに拘束されており、そのくびきをぬけだすための方便ではないかとも勘ぐるのであつた。

地球はてんやわんやだ。なにせ、宇宙戦争が始まったのだ。宇宙人と干戈を交えるというのは、お話の中だけで完結しなくなったのだ。ぼくは宇宙人というものと親交があつたので、寝耳に水じゃなかったけど、大半の人間にしてみれば間違はなく、寝耳に水だった。いきなりバケツにはいった大量の冷や水を浴びせ掛けられてしまったような気分だったろう。

男たちは果敢にも宇宙へ旅立った。誰でも重婚に憧れていたに違いない。その証拠に宇宙へ戦争に出かけたのは男ばかりで、ほとんど女はいなかった。ゼロじゃなかったが、きつとレスなのだ。

宇宙戦争は人類側が圧倒的に不利だった。それもそのはず、敵は軌道上から撃ってくるのであり、位置エネルギー的にもむこうが有利なのだ。地球からのミサイル攻撃はのきなみ迎撃された。一時期、米軍が画策していたSDIのような、光学兵器によるインターセプトではないかという話だったが、敵もさるもの、技術格差はあまりにもひどく、どんな高名な学者も結論を導けなかった。

あまりにも拓けた彼我の差はいかんともしがたかった。敵はたった一隻の戦艦しか持っていないというのに……。

ぼくは呆けていた。

我が町はほとんど空襲をうけてはいないが、東京はほぼ壊滅という話で、ブラウン管のなかではキヤスターがわめきちらしては砂嵐、わめきちらしては砂嵐だ。うつらなくなってしまうたチャンネルも多い。交通インフラは停止。おかげで麻痺してしまったのは人の流れにとどまらない。

物流もストップしてしまつては、通常の経済活動を維持することさえ困難を窮めた。アマゾンに注文しても届かないのだ。インターネット回線だけが無事というのが怨めしいといえは怨めしいが、おかげで人類側の状況がある程度、識ることができるのも事実だった。あやしげな宗教家が路地を闊歩し、街宣している。

『終末の日がやってきたのだ。悔い改めよ』

ぼくが呆然としているのは地球の存亡があやういからではない。いなくなってしまったのだ。氷柱が。

彼女は自分の舟に帰ってしまった。帰ってしまったというのは正しい表現じゃないかもしれない。帰らされてしまったというのがきつと、正しい。なぜなら、彼女は先輩が自殺しようとしたあの日、ぼくに、さよならも言ってくれなかったのだ。彼女は薄情なヤツじゃないから、自分の意思で舟に帰ったのなら、「さよなら」くらい言ってくれてもいいはずなのだ。

最初の艦砲射撃があつたのは二週間前。

敵はヴォールピだった。

にわかには、信じられなかった。

彼らが『約束の地』をさがしていることは氷柱からきいていた。しかし、彼女をみていると侵略という強硬な姿勢にでると思えなかったのだ。でも、いまとなつては、それは単なる誤謬だったんだろ。ヴォールピとはそもそも、そういう宇宙人で、氷柱が例外的だったと考えた方が自然に思えた。

ぼくは、彼女が唐突にいなくなってしまったせいで、色々とヤル気がなくなった。勿論、宇宙戦争をしているつてのに、学業に精を出す局面なんかなくて、学校はずっと閉鎖している。自宅から出るのも億劫で、毎日、ベッドの上だった。

なんとなくTVを見て、なんとなく一日を潰す。それで二週間が経つのは、本当にあつと言う間だった。

——ケータイが鳴っている。

また、先輩からだ。

不在着信一〇〇件。

ぼくはケータイを切った。

先輩にあいたくなかった。

先輩にあつてしまうと、氷柱を青白い光がつつみ、つれさつた光景と、山向こうが夕刻にははやいの茜色になっている情景をおもいだしてしまうからだ。

呼び鈴が鳴っている。

きつと先輩だ。

ぼくは居留守を決めた。

「いるんでしょう！ 孔明くん！」

ドアが叩かれている。勝手にあがりこんできたらしい。町内会の対宇宙防衛会議に参加している両親が怨めしい。いつもなら、両親がいるせいで、先輩はぼくの部屋まで踏み込んでこなかった。だからこそ、二週間も先輩を無視し続けることができたのだ。

ドアがぎしぎし唸っている。鍵はかけたままだ。あくはずがない。

先輩はピッキングなんてできないはずだ。

どんだん。

「孔明くんッ！」

きこえない。きゃっせん。

「きょうというきょうは許さない」

鍵が開いた。

「え？」

どこどかと複数の足音。

SP佐藤。その背後に先輩。

先輩は、散らかったぼくの部屋を一瞥してから、ぼくを睨んだ。彼女は女王さまのごとく、傲然とした態度で、仁王立ちになった。ぼくは、何もいえなかった。

言い訳することばもなかった。

そして、目の前にいるのは、リストカットを繰り返していた先輩じゃなかった。ひとりの勝気なオンナノコが、そこにいた。顔立ちも背格好も変らないのに、先輩は別人のようだった。逆に、ぼくは、あのときから彼女とは逆方向に変質してしまっている。

だから、いい訳なんてできるはずじゃないか。

「連行」先輩が言った。ぼくは屈強なSPたちにしよっぴかれた。抵抗する気が起こらなかったというのが事実だった。

SP佐藤は何もいわなかった。ただ、哀しそうな顔をしていた。

ぼくが先輩によって連行されたのは、どこかの倉庫だった。いや、倉庫という表現は不適切かもしれない。作業場、工場と表現するべきかもしれない。

何十人ものメガネがなにやら作業をしていた。溶接の火花が飛んでいる。しゅうしゅうという音がする。一体、何をつくっているのだろうかと言ひしたが、答えはすぐに出た。

倉庫のどまんかにはどうみてもロケットとしか思えないものが発射台に鎮座していたのだ。タンクに液体燃料を注入中らしく、ロケットの側面のソケットからケーブルがのびている。

「A社の誇る頭脳集団メガネーズ」ぼくは応えないが、ちっとも気にせず、先輩はつづける。「孔明くん。宇宙へいこう」

まるでコークの景品の宇宙旅行のように、かるがるしく先輩がいうのでぼくはかちんときた。

「いま、宇宙へいつてなんになるつていうんですか？」

「じゃあ、へもへもしててなんになるの？」ぼくは応えない。「私はゆりかごから墓場までをつかさどるコングロマリットA社の令嬢」

「それが？」

「利用できるものは利用する」

「ヴォールピに勝てるつていうんですか？」

「ヴォールピ？ そうなんだ。そういう名前なんだ。彼らは」

「う……」

口が滑ったようだった。世間的には、ヴォールピという名称は知られておらず、ただ単にインベーターと呼ばれているのである。ぼくが関係者——つまり氷柱がどういった存在なのかバレしてしまう。ぼくは、気が気じゃなかったが、平氣の平左で先輩が訊ねてきた。「氷柱さんはヴォールピなんでしょう？」

「なんで、解るの？」

「女の勘」笑う。「彼女は恩人だから。孔明くんもそうだけど――。ただ、私は恋がしたかったのかもしれない。政略結婚に愛なんてないってそう決め込んで、だから、孔明くんをダシにしてしまったのかもしれない。そのことはあやまらないといけない。」

――ごめんなさい」

先輩が深くこうべを垂れた。ぼくはかけることばが見つからなくて、したをむいた。

「それに、氷柱さんは強いひとだね。私はね、彼女に勝ちたいんだ。弱いままつてのは、ちょっとイヤかな。うーん。凄くイヤかな？」

「うん」

「私に死ぬな。死ぬくらいなら、呪えといってくれた。私は彼女に勝って孔明くんをほんとうの意味で手にいれたい。だから、まだ氷柱さんにいなくなってほしくない。氷柱さんを助けよう」

先輩はもう、リストカッターなんていう弱い存在ではなくなっていた。

そう仕向けたのはぼくじゃなかったのか？

それなのに、ぼくがへたれていていいのか？

いいはずがない（反語）。

ぼくはかぶりを振った。

「いきましょう。宇宙へ」

いうがはいいか、メガネーズがぼくにむかつて突進。あつとうまに、ぼくは宇宙服に着替えさせられた。先輩の前で下着姿にされてだ！

タラップをつたい、ぼくはロケットの先端、――ノーズコーンに護られたパイロードの宇宙船に乗り込んだ。もとい、詰め込まれた。ぼくもまるでパイロードといわんばかりで。

「いつてらっしゃい」

「え？」

宇宙船のとびらがしめられた。

「発射」

「ぬわああああ」

宇宙は案外、ちかかった。

多段式のロケットは逐次きりはなされ、最後にノーズコーン部分だけが残った。ノーズコーンは星の海を背景にして、真つ二つに割れた。コックピットの窓には煌かない星たちがあった。宇宙空間に宇宙船だけがほうりだされたわけだ。

窓から見えた。寺院船が。円形の、古いSFにでてくるファウンデーションといったおもむきのそれは宇宙移民船には見えない。円環と長い軸がくるくると回転している。ぼくがすることはひとつしかないのだ。ぼくは、操舵しようとしたが、生憎と操縦方法が解らなかった。にも関わらず、

彼我の距離が縮んでいった。自動操縦なのか、プログラム制御なのか、地上から先輩たちが操っているのか、しょうじきどれでもよかった。

ぴびぴと電子音が鳴った。

通信がはいったのだ。

どうしたものだろうと思いつつ、テキストに周辺のスイッチを押す。通信がひらいた。あたりだったようだ。

「おまえがツラーラをたぶらかした男か？」男の声。

「だれだ？」

「ツラーラの父だ」

ツラーラとはきつと氷柱のことだろう。

なんだ……本名だったのか、あれ。

「だったらどうするんだ？」

「地球もろとも滅ぼす」

くそつたれ！

敵はインベーターなんかじゃないじゃないか。

狂信的宇宙人でもない。

娘想いのアホな父親が怒り心頭に発しただけじゃないか。

寺院船の側面が光った。と、おもいきやばくの視界はホワイトアウトした。船体が震えた。光の速度は速すぎた。光った瞬間に、死んだかと思った。

「孔明くん。孔明くん」

氷柱の声だ。

ここは天国？

「ちがうよ。オービチエがあなたを助けた」

視界がはつきりすると、浮遊している黒い球と心配げにまゆをよせるネコミミモードの氷柱がいた。

「オービチエって？」

「オービチエは擬似人格特性機構。私たちの遠路を護持するための、テンプラーたちと教団をただしく導くための機構。そして私のガーディアン」

「ぼくはどうなったの？」

「空間転移させた。ここは寺院船のなか」

死んだかと思ったのに、どうやらいきているらしい。

「助けにきてくれたんだよね？　じゃあ、これからのことを説明するよ？」

氷柱はいつもの調子で長々としゃべった。こっちの言い分などおかまいなしだ。それでも彼女が自分を助け出しに来たと確信していることを、とやかかいう必要はなかった。事実、そうなのだし、ぼくはそのつもりなのだ。ただ、彼女の話は専門用語がいつにもまして多くて、ぼくには難解すぎた。

「ぜんぜん解らないんだけど？」

「口で説明してほしい？」

「あ、うん」といいつつ、いまも口頭で説明しているじゃないか、なんて思うのもいっしゅんのこと。
むちゅ。

唇があわさった。

ファーストキスか。

「ななにをする！」

「口で説明してあげた」

「……」

「どう？ 笑えた？ これは口頭という意味の口と——」

ぼくは赤面していたとおもう。

ときと場所をわきまえてくれよ、ともおもう。

ほんとにKYなんだから。笑うしかないじゃないか。ぼくが笑うと、氷柱は驚きの表情でぼくを見上げた。瞳孔がひらくんじゃないかと焦るくらいだった。

「やった。いまのは何点だ？」

「一〇〇点」

「やрий」氷柱はガッツポーズした。

ぼくは氷柱に案内されるままに寺院船のなかを移動する。寺院船はひろい。そして、無機質だった。人間——もとい異星人だが——が生活しているようにはおもえなかった。人類には未知の技術なのかで完全に清掃されているのかもしれないが、それは消毒液のする病院いじょうに生活臭がなかった。そうだ。においがいいんだから。

装飾の類もなかった。病院であれば、絵画のコピーや造花なんかがかざってあるが、それもなし。そして、誰ともすれちがわない。おおきさのわりに殆ど住人がいないのかもしれない。長旅が命の数を削ってきたのかもしれない。

格納庫とおぼしき場所について。

そこには一機のイカがいた。

正確にはイカのかたちをした攻撃機。イカをまえにして、氷柱がぼくへと振り返って、

「超高性能超起動型長期運用性超高機能的長期航行能力保有型最新

鋭戦闘機械動物形状タイプホワイトカラードカスタム改式？α78

00年式ハイペリオン」

「長いッ！」

「拾壱号」

「多いッ！」

「予備用」

「予備？？」

「テスト機——の」

「の？」

「残骸」

「残骸つて！」

「正式名称、超高性能超起動型長期運用性超高機能的長期航行能力保有型最新鋭戦闘機械動物形状タイプホワイトカラードカスタム改式？α7800年式ハイペリオン拾壱号予備用テスト機の残骸。略して——イカ」

「どこをどう略したらそうなるのさ……。見た目はイカだけど」

「超イカ？」

「イカでいいです。はい」

「安心して。残骸だけど強い。プロトタイプなのにジムより強いのと一緒」

「一緒じゃねえよッ！」

調子狂うなあ。

ぼくはたしか、きみを助けにきたはずなんだけど……。

「オヤジが、あなたと一騎打ちをするって」

「え？」

「あなたが勝てば、地球は救われる」

おいおい。超展開すぎますってば！

ぼくはイカにつめこまれた。

あれ？ ほんの数分前もこんな展開が……。

「射出！」

「うわああああ」

ぼくは氷柱のオヤジさんとイカで戦うことになった。

敵はタコだった。

なんてシユールなんだ。

金星人と火星人のバトルか。

そんなことはどうでもいい。どうでもいいんだ！ ぼくは叫びながらカタパルトで宇宙へなげだされた。こんにちは宇宙。さっきもあいましたね。

「マザーテレサは言いました！ できることをしなさい！ 小さな人間ひとりで、世界なんか救えない。だから、目に見えるひとだけを救いなさい！ そう、言いました！」 操縦法なんて知らない。だからめっちゃくっちゃにレバーを引いた。ボタンを押した。K I A Iだ。K I A Iがあればなんでもできる。「だから、地球がどうなるうと、ぼくは識りましえんツ！」

戦いのようすはめんどうなので（略）。

ドックに戻ると、氷柱が待っていた。

「ふふ」彼女は不敵な笑みでぼくを出迎えた。すごく、いやな予感がした。「孔明くん。いいことを教える。我ら同胞なきいま、あなたのマシンは地球最強！ つまり——あなたはアメリカだつて敵に回せる！」

もうどうにでもなれとおもった矢先、こうして世界政府が樹立した。

↓○へ戻る。

「一夫多妻とかねーよ！ てかなんで花子もいつしよにいるんだよ！ 意味わかんねーよ！」

「地球を救った英雄ですから！」

「増えすぎ！ 花嫁増えすぎ！」

ぼくはたくさんの英雄の花嫁の座をほつするオンナノコに追われている。

おかしいな。

どこでぼくはまちがったんだろう？

問題は解決していないようだ。嗚呼、無常。とりあえず、ぼくは叫ぶことにした。「ぼくが新世界の神だ！」と。

7 - 3 (後書き)

読了感謝。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3389j/>

ばつ らば

2010年10月8日14時16分発行